

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (8)  
— 『キエフ年代記集成』 (1181 ~ 1195 年)

中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香

富山大学人文学部紀要第 68 号抜刷

2018年2月

## 『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (8) — 『キエフ年代記集成』 (1181 ~ 1195 年)

中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香

6689 [1181] 年

篤信の公妃で大フセヴォロド<sup>1)</sup> [D177:K] の姉妹であるオリガ<sup>2)</sup> が逝去した。かの女は修道女となってエフロシニア (Офросья) と名乗っていた。7月4日のことだった<sup>3)</sup>。〔遺体は〕〔クリャジマ河畔のヴラジミルの〕黄金の円蓋の聖母教会<sup>4)</sup> に安置された。

6690 [1182] 年

キエフ公スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] が **[625]** 二人の息子を結婚させた。グレーブ [G3] にはリューリク [J2] の娘を<sup>5)</sup>, ムスチスラフ [G1] には<sup>6)</sup>, フセヴォロド [D177:K]

- 
- 1) 「大フセヴォロド」(великий Всеволод) は、フセヴォロド [D177:K] を称揚する表現で、この記事が、フセヴォロド公一族に近い資料を使っていることが推定できる。
  - 2) フセヴォロド [D177:K] の姉妹 (おそらく姉) であるオリガ (Ольга Юрьевна) が、嫁ぎ先のガーリチを離れて、ヴラジミル [クリャジマ河畔の] の弟フセヴォロドのもとに身を寄せたことについては、[イパーチイ年代記 (7): 注 82, 484] を参照。かの女は、ガーリチ公ヤロスラフ [A1211] と離婚していたことから、修道女となっていたと思われる。
  - 3) オリガの死については、『ラヴレンチイ年代記』にもほぼ同一の並行記事があるが、これは 6691(1183) 年の項に置かれている。ベレジコフによれば、『ラヴレンチイ年代記』の年紀は超三月暦によっており、その場合なら 1182 年 7 月に相当し、『イパーチイ年代記』の 6689(1181) の年紀は 1 年ズレが生じており、総じて、オリガの死は、1182 年の出来事だとしている [Бережков 1963: С. 82, 195, 198]。
  - 4) 「黄金の円蓋の聖母教会」(святая Богородица золотовѣрхой) とは、ヴラジミル [クリャジマ河畔の] の聖母就寝首座教会 (Успенский собор) のこと ([イパーチイ年代記 (5): 287 頁, 注 326] を参照)。アンドレイ [D173] とその一族の菩提寺的な役割を担っていた。
  - 5) このグレーブ・スヴァトスラヴィチ [G3] の結婚については、本年代記の 6688(1180) 年の項の記事で暗示されている。[イパーチイ年代記 (7): 注 574] を参照。
  - 6) ムスチスラフ・スヴァトスラヴィチ [G1] の結婚について、ここでは父スヴァトスラフ [C411:G] の視点から記されているが、6688(1180) 年の項の最後の記事では、「[フセヴォロド [D177:K]] は [スヴァトスラフ [C411:G]] の年少の息子を自分の妻の姉妹と結婚させた」[イパーチイ年代記 (7): 265 頁, 注 577] として、同じ結婚をフセヴォロドからの視点で記述している。前注の場合もそうだが、記述のダブリと内容の相違は、使用した資料の出所が異なることによるだろう。

の妻の姉妹にあたる、スーズダリのヴラジミルからやって来たヤース人の娘<sup>7)</sup>をそれぞれ娶せた。結婚式は盛大だった。

その年<sup>8)</sup>、スーズダリ公フセヴォロド・ユーリエヴィチ [D177:K] は、ブルガール人と戦争を始めた。かれ〔フセヴォロド〕は、スヴァトスラフ [C411:G] のもとに使者を遣って、援軍を求めた。かれ〔スヴァトスラフ〕は、自分の息子ウラジミル<sup>9)</sup> [G2] をかれ〔フセヴォロド [D177:K]〕のもとに遣って、かれにこう言った。「兄弟にして息子よ<sup>10)</sup>、どうか、われらの時には、神が邪教徒討伐の戦いをわれらになさしめんことを<sup>11)</sup>」。

7) 「ヤース人の娘」(ясыня)が「スーズダリのヴラジミルからやって来た」とは、フセヴォロド [D177:K] 公が、ヤース人である自分の妃の姉妹と姉妹の娘を、ヴラジミルに引き取って養育していたからだと解釈できる。

ヤース人(ясы, яссы)については、6624(1116)年にヤロボルク・ウラジミロヴィチ [D15] 公が、「ドン川」(セーヴェルスキイ=ドネツ川)流域に遠征したとき、ヤース人の公族の娘を連れ帰って結婚したとの記述があり(『イパーチイ年代記(1):263頁,注105]),また、フセヴォロド [D177:K] の兄であるアンドレイ敬神公の殺害の物語にも、ヤース人の鍵番の名が見えることから(『イパーチイ年代記(7):210頁,注273]),「ドン川」流域の居住する遊牧民族の同盟者として、モノマフ一族の諸公たちの間では婚姻同盟も含めた交流が続いていたのだろう。

8) 以下のキエフ洞窟修道院掌院ポリカルプの死去(1182年7月)の記事(下注33参照)の直前に置かれていることから、記事配置の時系列から見て、フセヴォロド [D177:K] のブルガール人討伐遠征は、1182年の河川航行情(春～夏)に行われたと考えられる。ただし、『ノヴゴロド第一年代記』6691(1183)年の項に「この年、フセヴォロド [D177:K] は、自分の領地のすべての住人とともに、ブルガールに対して侵攻した。ブルガール人はグレーブ [D178] の息子イジャスラフ [D1781] を殺した」とあり、『ノヴゴロド第一年代記』の年紀はおおむね信頼できることから、1183年に遠征が行われた可能性も否定できない。なお、ベレジコフはこの記事を、1183年に比定している[Бережков 1963: C. 201]。

9) ウラジミル・フセヴォロドヴィチ [G2] は、1181年の秋にノヴゴロドの公座を追放されて(『イパーチイ年代記(7):注576]参照)、父のもと(おそらくチェルニゴフ)に身を置いていた。ウラジミル [G2] は、フセヴォロド [D177:K] の姪と結婚しており(『イパーチイ年代記(7):246頁,注466]参照)、フセヴォロドにもっとも近い姻戚であり、かれがフセヴォロドのもとに派遣された理由もその姻戚関係にあると考えられる。

10) 「兄弟にして息子よ」の呼びかけは、6688(1180)年の記事で、スヴァトスラフ [C411:G] がフセヴォロド [D177:K] に対して年長者であることの誇示する意味あいが見込まれていた(『イパーチイ年代記(7):258頁,注538]参照)。その呼びかけがここでも繰り返されており、記事を書いた年代記記者の、キエフ公スヴァトスラフに近い政治的立場が反映している。

11) このスヴァトスラフ [C411:G] の言葉は、「援軍を求め」られたが、自分自身はブルガール討伐遠征に参加しないと、婉曲に断っていると理解すべきだろう。「われわれの時には～神が(…)なさしめんことを」(Даи Богъ... во дни нашѣмъ)とは、今はわれわれ(スヴァトスラフとフセヴォロド [D177:K])と一緒に異族討伐をする時機ではないという意味あいを持っている。

かれらは、ブルガール人を討つべくヴォルガ川を遡行した。そして、ツェフカ<sup>12)</sup> (Цѣвка) 川河口にあるイサジ (Исади) と呼ばれる中州<sup>13)</sup> に向けて出発し、そこで船を降りて河岸に降り立った。その場所にすべての川船とガレヤ船<sup>14)</sup> を置いて、ペロゼロ人の部隊<sup>15)</sup> もそこに残した。かれらとともに軍司令官フォマ・ナザコヴィチ<sup>16)</sup> (Фома Назакович) も残した。他の〔軍司令官〕ドロジャイ (Дорожай) も〔残した〕。かれは父親に仕えていた<sup>17)</sup> からである。諸公は<sup>18)</sup>、ほかの軍司令官もそれぞれ自分の家来たちと一緒に残して、自分たちは馬に乗って、ブルガールの地

- 
- 12) 「ツェフカ川」 (Цѣвка, Цивка) は、現在のアクタイ川 (Актай) と推定されており、その河口は、ヴォルガ川とカマ川のほぼ合流点に位置している。
- 13) 「イサジ」 (Исади) の中州は、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』 6728(1220) 年の並行記事では、「オシェリの対岸にあるイサジ」 (на Исадѣхъ противу Ошлю) と特定されている [ПСРЛ Т. 7, 2001: С. 126]。このオシェリ (Ошель) は、現在の「ボグダシスキンスコエ城趾」 (Богдашкинское городище) である。
- 14) 「川船」 (носад, насад) は河川航行のための比較的小型の平底船のこと。「ガレヤ船」 (галѣя) の語はギリシア語の γαλέα からの借用語だが、どのような船であるかは不明。ギリシア語の意味から見て、帆と多数の漕ぎ手を備えた、馬を積み込めるほど大型の川船だったことが推定できる。
- 15) 「ペロゼロ人の部隊」 (бѣлозерский полкъ) は、北方の白湖 (ペーロエ・オゼロ) 周辺の住民からなる部隊で、この地はロストフ＝スーズダリの公の支配下にあった。[イパーチイ年代記 (3) : 337 頁, 注 45] を参照。
- 16) 「フォマ・ナザコヴィチ」 (Фома Назакович) は、『ラヴレンチイ年代記』 6692(1184) 年の並行記事 ([ПСРЛТ. 1, 1997: Стб. 389]) では、Фома Лазковичь の名で呼ばれている。部隊の司令官で、スーズダリの公に仕えていた在地の貴族と考えられる。
- 17) ドロジャイが「かれの父親に仕えていた」 (бѣшь ему отень слуга) とは、おそらく、フセヴォロド [D177:K] の父親ユーリイ [D17] に、部隊の指揮官として仕えたことがあった老将だったということだろう。
- 18) この諸公 (князи) が誰であるか本年代記には記されていないが、『ラヴレンチイ年代記』 6692(1184) 年の並行記事では、遠征に参加した公の名があがっている。「フセヴォロド [D177:K] はブルガール人討伐へと進軍した。ともに進軍したのは、自分の甥のイジャスラフ・グレーボヴィチ [D1781], ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [G2], ムスチスラフ・ダヴィドヴィチ [J32], リヤザン公グレーブ [C542:H] の息子たち、すなわち、ロマン [H2], イーゴリ [H3], フセヴォロド [H5], ウラジーミル [H4] たち、そして、ムーロムのウラジーミル [C51111] だった」 [ПСРЛТ. 1, 1997: Стб. 389] とある。

へ、セレブレニエ・ブルガール人<sup>19)</sup>の大いなる城市(Великий город)<sup>20)</sup>に向かって進軍を開始した<sup>21)</sup>。

ブルガール人はルーシの部隊が多勢であることを見て、陣営を構えることができず、城内に立て籠もった。若い公たちは意気揚々として、城門を突破しようと〔騎馬で〕進んだ。そのとき、フセヴォロド[D177:K]の甥であるイジャスラフ・グレーボヴィチ[D1781]が矢で射られて、虫の息で陣営へと運ばれた。フセヴォロド[D177:K]は大いに悲しみ、すべての諸公と従士たちも気持ちが【626】沈んだ。

〔ブルガール人たちは〕周辺の城砦から、すなわちソビ(Собъ)<sup>22)</sup>、クーリ(Кулян)<sup>23)</sup>などチェ

19) 「セレブレニエ・ブルガール人」(сербреные болгары)の名称は、このヴォルガ・ブルガール人の部族が、セレブリヤンカ川(Серебрянка)流域に居住していたことから由来する[Голубовский 1888: С. 13, прим. 1]。

20) 「大いなる城市」(Великий город)の名称は、『ラヴレンチイ年代記』6672(1164)年のアンドレイ敬神公のブルガール討伐記事の中で言及されており([ПСРЛТ. 1, 1997: Стб. 352])、同じ遠征について『ニコン年代記』の6668(1160)年の記事ではこの城市について「カマ川のブリヤヒモフ」(Бряхимовъ на Камѣ)と補足されている([ПСРЛ Т.9, 2000: С. 230])。これは、他の史料の中ではビリヤル(Биляр; Bilär)と呼ばれた当時のヴォルガ・ブルガール国の中心都市を指している。10万人を数える多数の住人がいたことから、その名が由来したと考えられる[Халиков 1989: С. 93]。その所在地は、現在のタタールスタンのビリヤルカ川(Билярка)両岸に位置するビリヤルスク遺跡(Билярское городище)に同定されており、フセヴォロド軍が船を降りたアクタイ川河口付近からだと、南東方向へ約55km離れたところに位置している。

21) 『ラヴレンチイ年代記』6692(1184)年の並行記事には、フセヴォロド[D177:K]が「大いなる城市」へ進軍する前の興味深いエピソードが記されている。それによれば、「公〔フセヴォロド〕が平地を進んでいると、ブルガール人部隊の者たちが、われらの斥候部隊が平地にいるのを見て、思案した。そして、5人の家臣が〔ブルガール人の〕部隊からやって来て、フセヴォロド公の前に叩頭して、公にこう言った。『公よ、エマク族のポロヴェツ人はあなたに拝礼します、われらは、ブルガール侯と戦ってブルガール人から掠奪するためにやって来たのです』。フセヴォロド公は、兄弟〔諸公〕および従士たちと評議して、かれらにポロヴェツ式の誓いの儀式をさせて、かれらを〔部隊に〕受け入れ、さらに大いなる城市に向かった」[ПСРЛТ. 1, 1997: Стб. 389]となっている。

なお、この「エマク族のポロヴェツ人」(половци Емакове)とは、史料では、йемак, има́к, кима́кとも表記されるポロヴェツ人の部族で、カスピ海北東のカザフ平原に勢力を築いていたキメク・ハン国(Кимакский каганат; Kimek Khanate)が解体した末裔で東方に展開していた部族と考えられる[Плетнева 1990: С. 27-36][Расовский 2012: С. 131-132]。当時この部族は、ブルガールの勢力下に入っていたが、ルーシ軍の前にブルガール勢が劣勢になったのを見て、寝返ったということだろう([梅田 1959: 74頁])。

22) 「ソビ」(Собъ)は、ソビンカ川(Собинка)の民の意味で、現在のタタールスタン共和国、サビンスキイ州のボガティエ・サビ(Богатые Сабии)周辺と考えられている。

23) 「クーリの住民」(куляне)の「クーリ」(Куль)については不詳だが、カマ川(Кама)から北岸に位置し、ヴォルガ川との合流地点から北東へ75kmほどはなれた、タタールスタン共和国ポリシャヤ・クリガ村(Большая Кульга)に同定する説がある。なお、先行の語と併せて読んで「ソバクリヤン」(собъкулян)を部族名とする説もある。

ルマト<sup>24)</sup> (Челмат) の住民が、テムチュガ<sup>25)</sup> (темтюга) という別のブルガール人たちと合流して、その数は 5000 人に達した。〔かれらは〕川船で進み、トレッキイ<sup>26)</sup> (Торьцкий) 〔の城砦〕からは馬で、〔奪い取った〕ルーシ人の船〔が置かれているところへ〕やって来た。こうして、かれらは〔イサジの〕中州に上陸すると、ルーシ人を討とうと軍を進めた。

ルーシ人は、神の助けによって力を得て、かれら〔ブルガール人〕に向かって進軍し、かれら〔ブルガール人〕と会戦した。かれらはこれを見て逃げ出した。わが軍はこれを追いかけて、イスラムの徒<sup>27)</sup> の邪教徒を斬り殺した。かれらは、ヴォルガ川の方へと逃げ、急いで船<sup>28)</sup> に乗り込んだ。しかし、まもなく船が転覆して、1000 人以上が溺れ死んだ。このようにして、神はルーシ人を助けたのである。〔ルーシ人は〕かれら〔ブルガール人〕に勝利し、2500 人〔の敵を〕を撃ち殺した。

〔あとからやって来たブルガール人の〕残りの者は船のほうへと向かって来た。かれらは出来事を知らなかった。すなわち、〔ルーシ側の〕漕ぎ手たちは、かれらが来る前にすでに、ブルガール人部隊を撃ち破っていたのである。〔ルーシ人は〕この出来事に対して神を讃美した。<sup>29)</sup>

この中州のかれら〔敵〕の川船の中で、イジャスラフ・グレーボヴィチ [D1781] が矢傷を負って逝去した。かれの遺体は布で巻かれ、船に乗せられて、連れ帰られた。そして、ウラジミル

---

24) 「チェルマト」(челмат) は、カマ川沿岸の地域に居住するブルガール人を指していると考えられる。カマ川は、現代のタタール語で челман, чулман と呼ばれており、当時もこの川の現地名だったのだろう [Голубовский 1888: С. 13, прим. 1]。

25) 「テムチュガ」(темтюга) は、テムチ川 (Темти) のことで、現在のタタールスタン共和国の、カザン (Казань) から東へ 65km ほどの、トリュク=チャムチ (Трюк-Тямти) 村の周辺に居住するブルガールの部族と考えられている。

26) 「トレッキイ」(Торьцкий) は、カマ川流域の南に位置する城砦と考えられるが、具体的な場所は不明。

27) 「イスラムの徒」(бохмиты) はイスラム教の開祖ムハムドを指すロシア古語から発したもので、スレズネフスキイの古語辞典ではギリシア語表記 Μουχομίτες との対応が示されている [Срезневский I: Стб. 157]。

ルーシの年代記記者にとって、ブルガール人とイスラム教との関係は、ウラジーミル聖公のいわゆる「信仰の選択」のエピソードの中で、ブルガール人の使者がキエフにやって来てイスラム教 (вера Бохьмичя) 受容を説いていることから、明らかなものだった ([ПСРЛТ. 1, 1997: Стб. 84] [ロシア原初年代記: 99 頁])。実際に、ヴォルガ・ブルガール人は 10 世紀前半に王の手で積極的にイスラムを受容しており [家島 2009: 15 頁]、住民はイスラム教徒だった。

28) この「船」は原語では вчан, учан。チュルク語起源の語で、ブルガール人の川船を指している。

29) ここには敵の援軍に勝利した描写だけで、「大いなる城市」に向かった遠征軍の本隊についての記述はない。これに対して、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「フセヴォロド公 [D177:K] は 10 日間城市を包囲して、兄弟〔イジャスラフ [D1781] のこと〕が衰弱しているのを見た。ブルガール人はかれ〔フセヴォロド〕に和議の使者を遣っていた。〔フセヴォロド〕は再びイサジ〔の中州〕に向かった」[ПСРЛТ. 1, 1997: Стб. 389] として、城市を占領することはできず、和議を結んで軍を引いたことが書かれている。



の黄金の円蓋の聖母教会に安置された<sup>30)</sup>。

その年、洞窟修道院の掌院で<sup>31)</sup> 典院の至福のポリカルプ<sup>32)</sup> (Поликарпъ) が逝去した。7月24日の殉教者ボリスとグレーブの記念日のことだった<sup>33)</sup>。【627】かれの遺体は布で巻かれ、かれの遺言の通り、最後の聖歌に送られて埋葬された。

かれの死後、修道院では混乱が起こった。この長老〔ポリカルプ〕の後任の典院を選ぶことができず、修道士たちにとって悲しみがあり、大きな困難と悲哀があった。このような大きな〔神の〕家において、少しの間といえども司牧者がいないということは、あり得べきことではなかったからである。

火曜日<sup>34)</sup>、修道士が板木(バンギ)を打つと、〔修道士たちはみな〕教会の中に集まり、聖母への祈禱を献げた。そして、驚くべきことに、多くの者があたかも一つの口から発せられたようにこう語った。「シチェコヴィツァの司祭ヴァシーリイ<sup>35)</sup>のもとへ使者を遣らう。そして、われらの典院になり、フェオドーシイ<sup>36)</sup>の洞窟修道院の僧団を導くように頼もう」。

こうして、〔修道院の使者たちは〕司祭ヴァシーリイのもとにやって来て、拝礼してこう言った。「われら、すべての兄弟たる修道士はあなたに拝礼します。われらは、あなたが父となり、

30) イジャスラフ [D1781] の死については、『ノヴゴロド第一年代記』にも「ブルガール人はグレーブ [D178] の息子イジャスラフ [D1781] を殺した」と言及がある(上注8参照)。なお、埋葬された「聖母教会」については上注4を参照。

31) 「掌院」(архимандритъ, イパーチイ写本では анхимандритъ) の語は、『聖僧伝』版(下注39参照)にはなく、後代の挿入の可能性が高い。

32) 「ポリカルプ」(Поликарпъ) については、[イパーチイ年代記(6): 257頁, 注408]を参照。

33) ポリカルプの没年については、研究書によって1182年と1183年の二つの説が併存している。本記事が唯一の史料であるため、年紀の解釈が問題となるが、ベレジコフによる年紀の解釈を採用すれば(上注8)1183年となる。しかし、先行するブルガール遠征の年紀と関連付けて、本年代記の6690年の記事の事件をすべて1183年に起こったとするのは、記事の出所が異なるだけに説得力に欠ける[Bержков 1963: C. 201]。ポリカルプの死後すぐに修道士たちの後継者選びが始まったと考えられること(次注)、さらに、本年代記及び『聖僧伝』(下注39)の年紀がともに6690(1182)年であることなどから判断して、1182年の7月27日の可能性が考えられる。

34) ポリカルプが死去した1182年7月24日が火曜日であることから、修道士による後継者の選出の評議は、死後すぐに行われたと考えられる。なお、キエフ洞窟修道院で板木(било)を打ち鳴らして修道士たちを集める場面は、『原初年代記』6582(1074)年の項の典院フェオドーシイ逝去のエピソードでも登場している([ПСРЛТ. 1, 1997: Стб. 184]参照)。

35) 「シチェコヴィツァの司祭ヴァシーリイ」(Василий поп на Щьковици) は、キエフの丘の北西に隣接するシチェコヴィツァの森にあった教区教会に勤めていた司祭。かれは、次の典院アキンディン(Акиндин)(在位1224-1231年)に交代するまで、長期間キエフ洞窟修道院の典院を務めることになった。

36) フェオドーシイはベチェルスキ修道院の実質的な創始者で、聖人として崇敬を集めていた。1074年に死去、1091年には移葬式が行われている。

典院となっていたいただきたいのです。司祭ヴァシーリイは非常に驚いて、かれら〔使者たち〕に対して拝礼して、こう言った。「父たちよ、兄弟たちよ。わたしは修道の修行は心の中に抱いているだけです。なぜ、あなた方は、未熟なわたしを典院になそうなどと考えたのですか」。長い間言い争ったのちに、かれ〔ヴァシーリイ〕は約束した。かれら〔使者たち〕はかれ〔ヴァシーリイ〕を連れて、修道院へと導いた。金曜日だった。日曜日になり、府主教ニキーフォル<sup>37)</sup>が、かれ〔ヴァシーリイ〕を修道士として剃髪するためにやって来た。トゥーロフの主教ラヴレンチイ、**[628]** ポロツクの主教ニコライ<sup>38)</sup>、すべての典院たちも同行してやって来た。ニキーフォルは自らの手で剃髪を行った。こうして、〔ヴァシーリイは〕典院に、フェオドーシイの修道院の修道士たちの司牧者になったのである<sup>39)</sup>。

## 6691 [1183] 年

2月23日、〔大〕齋の第一日曜日<sup>40)</sup>に、イシュマエル人<sup>41)</sup>たる神をも恐れぬポロヴェツ人たちが、ルーシ〔の地の〕ドミトロフ<sup>42)</sup> (Дмитров) に向かって掠奪を仕掛けた。呪われたコンチャ

---

37) 「府主教ニキーフォル〔二世〕 (митрополит Микифор) については、本年代記記事が史料における初出で、この年 (1182 年) に、おそらくギリシアからやってきてキエフ府主教座に就いたと考えられている。その後長く府主教座にあって、ルーシ諸公の外交政策に深く関与した。1201 年以降にルーシの地で世を去っている。[Поппэ 1996: С. 461-462]

38) ポロツクの主教ニコライはギリシア人で、ルーシ来訪の最初の時期にはヴラジミル〔クリャジマ河畔の〕で務めていたが、フセヴォロド公 [D177:K] と対立して、1184 年にポロツクへ移っている (下注 70)。この時点ではまだポロツク勤務ではなかったはずだが、本年代記には「ポロツクの主教」と記されている。

39) 「その年、洞窟修道院の…」からここまでの、キエフ洞窟修道院典院ニキーフォルの死去と次の典院ヴァシーリイ選出の物語は、15 世紀に編集された『キエフ洞窟修道院聖僧伝』 (Киево-Печерский патерик) の最後の部分に、6690(1182) 年のこととして、そのまま収録されており、そのテキストはほとんど同一である ([БЛДР-4: С. 486-489] を参照)。ただし、『聖僧伝』の筆者の一人とされているポリカルブとこの典院ポリカルブは同一人物ではない。

40) 「齋の第一日曜日」 (в 1-ю недѣлю поста) は「大齋」 (великий пост) の第一日曜日と理解することができる。しかしその記念日 (移動祭日) が 2 月 23 日にあたる年は、このあたりの年代にはない。ただし、1184 年の「大齋の第一日曜日」が 2 月 19 日にあたり、本文の неделя を「その日曜日から続く週」と広い意味で解すれば、2 月 23 日 (木曜日) もこれに相当する。その意味では、この年紀は、1184 年の 2 月 23 日を指す可能性が高い。

41) 「イシュマエル人」については、[イパーチイ年代記 (7) : 247 頁, 注 472] を参照。

42) 「ドミトロフ」 (Дмитров) は、ベレヤスラヴリ公領にある城市で、スーラ川 (Сула) 支流のロメン (Ромен) 川右岸に位置しており、現在のチェルニヒウ州ドミトリウカ村 (Дмитрівка) に比定されている。ベレヤスラヴリからだと、北東方向に 150km ほど離れている。



ク<sup>43)</sup> (Кончак), グレーブ・チリエヴィチ<sup>44)</sup> (Глѣбъ Тириевич) も一緒だった。神の守護によって、かれら〔ポロヴェツ人〕から害悪を受けることはなかった。

スヴャトスラフ・フセヴォロドヴィチ公 [C411:G] は自分の姻戚<sup>45)</sup> であるリューリク [J2] と相談のうえ、ポロヴェツ人を討伐すべく進軍し、オルジチ<sup>46)</sup> (Олжичь) で陣を構えて、チェルニゴフからヤロスラフ [C412] が来るのを待っていた。ヤロスラフ [C412] は、かれ〔スヴャトスラフ [C411:G]〕と出会うと、かれら〔スヴャトスラフとリューリク [J2]〕にこう言った。「兄弟たちよ、いまは進軍せず、神が示す時を取り決めよう<sup>47)</sup>。夏になったら軍を進めようではないか」。スヴャトスラフ [C411:G] とリューリク [J2] はその言葉を聞き入れて、引き返した。

スヴャトスラフ [C411:G] は自分の息子たち<sup>48)</sup> に自分の部隊を率いさせて、イーゴリ [C432] のもとに<sup>49)</sup> 平原を通して<sup>50)</sup> 派遣して、自分の代わりに〔遠征に〕行くようかれ〔イーゴリ〕に

43) コンチャク (Кончак) は、1181 年夏に、イーゴリ [C432] の同盟者として、リューリク [J2] 一族とキエフの対岸チェルトリイ川で戦い、大敗して、イーゴリとともにチェルニゴフ方面へ逃げている ([イパーチイ年代記 (7) : 注 569])。その後、かれは根拠地のステップ地帯に (もしくは、同盟者であるイーゴリ [C432], フセヴォロド [C433] の所領地) に引き返して報復を狙っていたと考えられる。かれが、他の首長と一緒に、ドミトロフ (前注) 方面に掠奪遠征を仕掛けたのも、この城市が、リューリク陣営の一員であるベレヤスラヴリ公ウラジミル [D1782] (下注 51 参照) の所領地だったからと考えられる。

44) 「グレーブ・チリエヴィチ」(Глѣбъ Тириевич) について詳細は不明だが、父称が付されていることから、コンチャクと同盟していたドン・ドネツ川水系のポロヴェツ部族の首長だろう。

なお、リトヴィナとウスペンスキイは、「グレーブ」の名がルーシ公の名前によく使われることに注目して、これが、ポロヴェツ候に対しても使われるようになったのは、ルーシ公とポロヴェツ人の緊密な相互関係の結果だとしている。さらに、グレーブ・ユーリエヴィチ [D178] ほか、幾人かのルーシ諸公がこの名付けの由来となった可能性についても指摘している [Литвина, Успенский 2013: С. 167-189]。

45) リューリク [J2] がスヴャトスラフ [C411:G] の姻戚 (сват) であることについては上注 5 を参照。当時、リューリク [J2] はベルゴロドに根拠となる公座を置き、同盟によってキエフ公スヴャトスラフ [C411:G] を支えていた [イパーチイ年代記 (7) : 264 頁, 注 573, 574]。

46) 「オルジチ」(Олжичь) は、1142 年の項にある地名「オリジチエ」(Ольжичие) 及び 1152 年の項にある「ルジチ」(Лжичь) と同じ ([イパーチイ年代記 (2) : 326 頁, 注 229] 参照)。ドニエプル川とデスナ (Десна) 川の合流地点近くの村で、キエフからは北東に 9km ほどの対岸位置しており、スヴャトスラフ [C411:G] のキエフ軍が、チェルニゴフからの軍と合流するには適していた。

47) 上注 11 のスヴャトスラフ [C411:G] の言葉と同じ主旨で、神意を引き合いに出して、今は異族討伐の時機ではないと言っている。

48) この「息子たち」は、スヴャトスラフ [C411:G] の年長の二人の息子フセヴォロド [G4] とオレグ [G5] であると推定される。これについては、下注 85 を参照。

49) イーゴリ [C432] は、1180 年 1 月からノヴゴロド=セヴェルスキイの公座に就いている ([イパーチイ年代記 (7) : 248 頁, 注 479])。

50) キエフからノヴゴロド=セヴェルスキイまでは、夏場であれば、ドニエプル川からデスナ川を遡って船で行くことも可能だが、ポロヴェツ討伐の遠征軍であるために、陸路をとったということ。

命じた。他方、リューリク [J2] は、ウラジーミル・グレーボヴィチ<sup>51)</sup> [D1782] に自分の部隊を率いさせて派遣した<sup>52)</sup>。

ウラジーミル・グレーボヴィチ [D1782] は、イーゴリ [C432] のもとに使者を遣って、自分の部隊を〔ポロヴェツ討伐遠征隊の〕最先頭で進軍させるよう、かれ〔イーゴリ〕に要請した。なぜなら、ルーシの諸公<sup>53)</sup> は、ルーシの地において<sup>54)</sup>、〔イーゴリに対して〕最先頭で進軍することを許していたからである。イーゴリ [C432] は、かれ〔ウラジーミル [D1782]〕にそのことを許さなかった。ウラジーミル [D1782] は激怒して **【629】**、引き返すと、そこからセヴェルスキイ地方の諸城市へ掠奪におもむき、城内にあった多くの戦利品を奪い取った<sup>55)</sup>。

---

51) 当時、ウラジーミル [D1782] はベレヤスラヴリで公支配をしていた ([イパーチイ年代記 (7):248 頁, 注 480])。これまで、かれはリューリク [J2] と直接の同盟や親族・姻族関係を持ったことはなく、1179 年にチェルニゴフ公ヤロスラフ [C412] の娘と結婚している [イパーチイ年代記 (7):248 頁, 注 480] ことから、姻戚関係からすると、チェルニゴフ公の一族に近い。今回は、リューリク [J2] が、ルーシの地の公の年長者として、ルーシの地防衛のために、ウラジーミル [D1782] に命令を下したと考えられる。

52) この遠征は小規模な掠奪遠征であり、先にヤロスラフ [C412] が「夏」に行うように提案した本格的なポロヴェツ人討伐遠征ではない。1184 年の春に行われたと考えられる。

53) 「ルーシの諸公」(князи... русции) とは、遠征の命令者であるキエフ公スヴャトスラフ [C411:G] とベルゴロド公リューリク [J2] を指している。ノヴゴロド=セヴェルスキイ公イーゴリ [C432] は「ルーシの公」ではないため、対比的な用語を用いたのだろう。

54) 「ルーシの地において」(в русской земли) は、「ルーシ諸公からなる遠征軍において」くらいの意味。

55) 以上の、ウラジーミル [D1782] とイーゴリ [C432] の不和の経緯は次のように整理できる。1184 年夏にあらためて組織された、ルーシ諸公連合のポロヴェツ討伐遠征軍は、キエフ公スヴャトスラフ [C411:G] とベルゴロド公リューリク [J2] の命令によって、ノヴゴロド=セヴェルスキイ公イーゴリ [C432] に指揮権と「最先頭で進軍する」(すなわち最初に掠奪を行う) 権利を委ねられた。部隊を合流するため、キエフからはスヴャトスラフ [C411:G] の二人の息子が、キエフ人部隊を引き連れてノヴゴロド=セヴェルスキイへ向かい、ベレヤスラヴリからは、リューリク [J2] 配下の部隊を率いてウラジーミル [D1782] が同地へ向かった。ウラジーミルは、おそらく、自分が「ルーシの公」であることから、イーゴリ [C432] の指揮権を快く思わず、道中からノヴゴロド=セヴェルスキイへ使者を派遣して、掠奪の優先権を自分に与えるようイーゴリに要求した。イーゴリは自分が年長者(かれは当時 34 歳、ウラジーミルは 25 歳前後だった)であることからこの要求を拒否した。この回答に激怒したウラジーミルは配下の部隊に対して、ノヴゴロド=セヴェルスキイには行かずに、引き返すこと、その帰路にノヴゴロド=セヴェルスキイ領の諸城市を襲撃することを命じた。かれは、それら諸城市に蓄えられていた、イーゴリがこれまでポロヴェツから掠奪した戦利品を奪い取ろうとしたのである。

イーゴリ [C432] はキエフの部隊を帰郷させた<sup>56)</sup>。この部隊に〔息子の〕オレーグ<sup>57)</sup> [C4322] と甥のスヴァトスラフ<sup>58)</sup> [C4311] を同行させた。部隊が無事に〔キエフに〕到着するよう〔警備させた〕のである。

そして、〔イーゴリ〕自身は、自分の兄弟のフセヴォロド<sup>59)</sup> [C433] を、そしてアンドレヤン<sup>60)</sup> [C4323] とロマン<sup>61)</sup> [C4324] をともに引き連れた。また、黒頭巾族<sup>62)</sup> から何人か、クルドューリ<sup>63)</sup> (Кулдюрь) とクントゥヴディ<sup>64)</sup> (Кунътвудѣй) を引き連れて〔遠征に〕行った。

かれら〔イーゴリの遠征軍〕は、ヒリヤ<sup>65)</sup> (Хырия) 川に到達した。その時は暖かい夜で、強い雨が降り、〔川が〕増水していた。そのため、かれら〔遠征隊〕には川を渡る場所がなかった。

他方、ポロヴェツ人の中で、移動幕舎で川を渡りおえた者たちは助かったが、それができな

56) キエフ公スヴァトスラフ [C411:G] の息子たちが引き連れてきたキエフ人部隊のこと。

57) オレーグ [C4322] は、1175 年頃の生まれ ([イパーチイ年代記 (7): 注 365]) だから、当時は 9 歳ほどだった。父親の名目的な名代として、従兄弟のスヴァトスラフ [C4311] (次注) の補佐を受けて警備に派遣されたのだろう。

58) イーゴリの兄オレーグ [C431] (1180 年没) の息子スヴァトスラフ [C4311] は、イーゴリは兄の死後、そのノヴゴロド=セヴェルスキイの公座を継承すると同時に、兄の息子スヴァトスラフ [C4311] の庇護を引き受けたのだろう。スヴァトスラフ [C4311] は 1168 年に生まれている ([イパーチイ年代記 (6): 251 頁]) ことから、当時は 17 歳ほどで、部隊警備と従兄弟のオレーグ [C4322] の補佐役の任務は果たせる年齢に達していた。

59) 原文では、поима с собою брата своего Всеволода и Святославича Всеволода, сына Святослава となっているが、下線の部分は前と同じ人物を指しており、筆写の過程で生じた記述のダブリと思われる。フセヴォロド・スヴァトスラヴィチ [C433] は当時はトルーベチの公座に就いていた。

60) 「アンドレヤン」(原文は Андрѣя) は、イーゴリ [C432] の 1176 年に生まれた息子スヴァトスラフ [C4323] の洗礼名である ([イパーチイ年代記 (7): 234 頁, 注 410] 参照)。この時、スヴァトスラフ [C4323] はおよそ 9 歳ということになるが、ここでは、イーゴリ [C432] が遠征軍を一族 (兄弟と息子) の指揮のもとに組織し直したことが重要であり、スヴァトスラフ [C4323] の参加も象徴的な意味を持っていた。

61) この「ロマン」は誰であるか同定が難しいが、ポーランド語訳注でゴランインが指摘しているように、後年の年代記に登場し 1211 年に没するイーゴリの息子ロマン [C4324] と同定するのが最も可能性が高い ([Goranin 1994: S. 230, n. 5])。前注と同じ理由で、ほとんど幼児であるはずのロマン [C4324] の参加も意味を持っていたのだろう。

62) この「黒頭巾族」は、スヴァトスラフ [C411:G] (もしくはリューリク [J2]) の同盟者で、イーゴリ [C432] に援軍としてキエフ方面から派遣された少数の部隊のこと。イーゴリ [C432] は、ルーシの諸公は遠征軍に受け入れなかったが、同盟者の黒頭巾族は受け入れたのである。

63) 「クルドューリ」(Кулдюрь) は、次注の「クントゥヴディ」と同じく、キエフ公スヴァトスラフ [C411:G] によって派遣された黒頭巾族部隊の指揮官。

64) 「クントゥヴディ」(Кунътвудѣй) は黒頭巾族部隊のトルク人指揮官。かれについてはまた、1190 年の記事で、誣告によってスヴァトスラフ [C411:G] の手で投獄された経緯が述べられている。

65) 「ヒリヤ川」(Хырия) は、ヴォルスクラ (Ворскола) 川中流左岸の支流で、現在のフーフラ川 (Хухра, Хухря) に相当すると考えられる [Кудряшов 1948: С. 133]。ノヴゴロド=セヴェルスキイから河口までは、南南東の方向に直線で 223km ほど離れている。

かった者たちは流れにさらわれた。話によると、この戦いにおいて、ルーシ〔の部隊〕の目の前から逃げようとした〔ポロヴェツ人の〕幕舎、馬、家畜の多くが、ヒリヤ川に水没したと言う<sup>66)</sup>。

その年、ポロツクの主教ディオニシイが逝去した。

このことについて、われらはこれから語ろう。ロストフの主教レオンが逝去した後に、ギリシア人のニコライ (Никола) が〔ロストフの〕主教として叙任された<sup>67)</sup>。しかし、スーズダリの公フセヴォロド・ユーリエヴィチ [D177:K] は、かれを受け入れず、かれをキエフのスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] と府主教ニキーフォルのもとに送り還して、こう言った。「この人物はわが土地を選んだ者ではない。別の土地でかれが適当だということがあれば、その〔主教として〕かれを叙任されよ。わしの〔ロストフ主教としては〕、**[630]** 霊において恭敬で温順なベレストヴォの聖救世主修道院<sup>68)</sup>の典院ルカを叙任されよ」。府主教ニキーフォルは、かれ〔ルカ〕を叙任することを望まなかったが、フセヴォロド [D177:K] とスヴァトスラフ [C411:G] によって大いに強制されて、ルカをスーズダリの地の主教に叙任した<sup>69)</sup>。かれ〔府

---

66) イーゴリ [C432] の戦果についての記述がないことから見て、イーゴリのヒリヤ川への掠奪遠征は、所定の成果は得られなかったのではないかと推測される (下注 106 参照)。

67) 異端論争のきっかけとなったロストフ主教レオンがコンスタンティノポリスに去り (1163 年, [イパーチイ年代記 (6) : 238,239 頁, 注 292,294] 参照), その後、ロストフ=スーズダリで府主教の叙任を経ない主教を擁立する動きがあるなど (1169 年, [イパーチイ年代記 (6) : 291 頁, 注 639] 参照), キエフ府主教にとって、ロストフ主教の叙任問題は長年の懸案事項だった。おそらく、名目的にロストフ主教だったレオンがこの頃に没したことから、コンスタンティノポリス総主教庁は、あらためてニコライをロストフ主教に任命したのだろう。しかし、以下のように再び、スーズダリ公の抵抗に遭遇することになる。

68) 「ベレストヴォの聖救世主修道院」(Святой Спас на Берестовемь) は、フセヴォロド・ヤロスラヴィチ公 [D] もしくはウラジーミル・モノマフ公 [D1] が創建したキエフ郊外の修道院で、フセヴォロド [D177:K] の父ユーリイ手長公 [D17] が埋葬されている場所でもあった ([イパーチイ年代記 (5) : 299 頁, 注 399])。フセヴォロド [D177:K] はキエフにおける一族の菩提寺として、この修道院に庇護を与えていたと考えられる。

69) ルカの人物については、『ラヴレンチイ年代記』 6693(1185) 年の記事に詳しい叙述がある [ПСРЛ Т. 1: Стб. 391-392]。それによると、「ロストフ、ヴラジミル、スーズダリ及び全ロストフの地の主教」としての叙任は、3 月 11 日 (1184 年) であり、「公 (フセヴォロド [D177:K]) とロストフの地」のために祈ったとされている。

主教〕は〔ニコラ〕をポロツクの主教として派遣した<sup>70)</sup>。

その年、ヴラジミル〔クリャジマ河畔の〕の城市で大きな火事があった。4月13日水曜日<sup>71)</sup>のことだった。燃えたのはわずかで、城市全体ではなかった。公の大きな館と32の教会堂が焼失した。金の円蓋の聖母首座教会も、5つの金の円蓋ともども燃え尽きた。これは篤信の公アンドレイ [D173] が装飾をしたものだった。こうして、〔聖堂の〕上部が燃え、下部の装飾や銀の燭台、金銀の聖器物、祭衣、金糸や真珠で刺繍した〔布〕が〔焼失した〕。〔布は〕祭日の飾りとして金門から聖母教会や主教の居館までの間に、見事なまでに二列に飾られていたものであった。

その年<sup>72)</sup>、神は、キエフ公のスヴァトスラフ [C411:G] と大いなる公<sup>73)</sup> リューリク・ロスチスラヴィチ [J2] の心に、ポロヴェツ人を討伐するようにと思慮を与えた<sup>74)</sup>。

二人は、周囲の諸公のもとに〔使者を〕派遣した。二人のもとに集まったのは、ムスチスラフ・

---

70) これで段落の最初のポロツク主教ディオニシイの死と結びつく。つまり、この年（1184年）にディオニシイが没したため、府主教ニキーフォルは、諸公の抵抗にあつてロストフ主教に任ずることができなかったギリシア人ニコライを、ポロツクの主教に任じることになったのである。なお、1182年のキエフ洞窟修道院ヴァシーリイの剃髪の記事で、ポロツク主教としてニコライが言及されているが（上注38）これは編集上の混乱によるものだろう。

なお、ニコライの処遇について、『ラヴレンチイ年代記』6693(1185)年の並行記事では、「府主教ニキーフォルはギリシア人ニコライのルーシの地での登録をやめる (отписатися) よう命じ、このルカをロストフ、ヴラジミル、スーズダリ及びすべてのロストフの地の主教に叙任した」[ПСРЛ Т. 1, 1997: С. 391] とある。

71) この火事については、『ラヴレンチイ年代記』（ラヴレンチイ写本）の並行記事（6693(1185)年の項）では「4月18日、主の親戚のシメオンの日の水曜日に」とある。1184年の4月18日が水曜日に相当すること、前後の記事が1184年の事件と推定されることなどから、本年代記の「13日」は筆写の際に生じた誤記とすべきであり、『ラヴレンチイ年代記』の「18日」が事実に対応していると考えられる。

72) 1184年夏のことである（下注74参照）。諸研究には、これを1183年とするものもあるが、その後に続く遠征の時系列の関連から見ると、1184年が相応しいだろう。

73) リューリク [J2] を「大いなる公」（великий князь）と呼ぶのは本年代記ではここが初出だが、великий の語は、編集当時のキエフ公リューリク [J2] を称揚するために、編集の最終段階での補筆された可能性が高い。

74) この表現は、1184年2月に、チェルニゴフ公ヤロスラフ [C412] が、スヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2] に対して即時の遠征を思いとどまらせた言葉「兄弟たちよ、いまは進軍せず、神が示す時を取り決めよう。夏になったら軍を進めようではないか」（上注47参照）に対応しており、神が示した時機が来たという含意がある。

スヴァトスラヴィチ [G1] とグレーブ・スヴァトスラヴィチ [G3]<sup>75)</sup>、ペレヤスラヴリのウラジーミル・グレーボヴィチ [D1782]、**[63I]** ルチェスク (Лучьск) からはフセヴォロド・ヤロスラヴィチ<sup>76)</sup> [I23] とその兄弟のムスチスラフ<sup>77)</sup> [I24]、またムスチスラフ・ロマノヴィチ<sup>78)</sup> [J12]、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ<sup>79)</sup> [J31]、グロドノのムスチスラフ [F113]<sup>80)</sup>、ピンスクの公ヤロスラフ [B3212]、その兄弟のグレーブ [B3215] だった<sup>81)</sup>。また、ガーリチのヤロスラフ [A1211] からは援軍が派遣されて来た<sup>82)</sup>。

---

75) キエフ公スヴァトスラフ [C411:G] の二人の年少の息子、ムスチスラフ [G1] とグレーブ [G3] については、上注 5 と 6 を参照。なお、なお、『ラヴレンチイ年代記』 6693(1185) 年の並行記事には、グレーブ [G3] の名はあるが、ムスチスラフ [G1] は脱落しているが ([ПСРЛТ. 1, 1997: Стб. 394])、その理由は不明。

76) ルチェスク公フセヴォロド・ヤロスラヴィチ [I23] については、6688(1180) 年の記事でも、リユーリク [J2] の要請に応じて援軍を派遣したことが記されている ([イパーチイ年代記 (7) : 253 頁, 注 515, 517] 参照)。今回もリユーリク [J2] の命令による参加だろう。

77) ムスチスラフ・ヤロスラヴィチ [I24] (フセヴォロド [I23] の兄弟) については、本年代記では初出。当時、ルチェスク (及びその付属) には、フセヴォロド [I23]、ムスチスラフ [I24]、イングヴァル [I22] の三人の兄弟が公支配を行っていたと考えられる。前注の 1180 年の援軍では、別の兄弟のリユーリク [I122] がフセヴォロド [I123] とともに参加していた ([イパーチイ年代記 (7) : 253 頁, 注 516] 参照) が、今回は、ムスチスラフ [I24] がおそらくスモレンスクから参加している。

78) ムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12] は、スモレンスク公領内のルーチン (Лучин) に父から受け継いだ所領を持っていたが [イパーチイ年代記 (7) : 186 頁, 注 101]、当時はスモレンスクにいたと考えられる。本遠征では、叔父のリユーリク [J2] の配下にあつて、その命令を受けていたのだろう。

79) イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [J31] は、本年代記ではここが初出。父のスモレンスク公ダヴィド [J3] の指揮下にあつたと思われる。

80) グロドノ公ムスチスラフ・フセヴォロドヴィチ [F113] については、直接の言及はないものの、1174 年の記事の中で、アンドレイ敬神公が命令したキエフへの遠征に参加していると考えられる [イパーチイ年代記 (7) : 198 頁, 注 183, 184]。伝統的にキエフ公の命令を受ける立場にあつた。

なお、『ラヴレンチイ年代記』 6693(1185) 年の並行記事にも、本遠征に参加した諸公の名が列挙されているが、そこには、グロドノ公のムスチスラフ [F113] の名がなく、その代わりに Всеволодь Мстиславичь の名が見える ([ПСРЛТ. 1, 1997: Стб. 394-395])。二つの年代記記事では、その他の諸公の名がほぼ一致していることから見て、これは、Мстислав Всеволодовичь (すなわちグロドノ公ムスチスラフ [F113]) の名と父称を逆転させた誤記と考えるべきだろう。

81) ピンスク公ヤロスラフ・ユーリエヴィチ [B3212] とその兄弟グレーブ [B3215] については、やはり、1174 年のキエフへの遠征(前注)に参加している。グレーブ [B3215] の所領については、下注 89 を参照。

82) ガーリチ公ヤロスラフ [A1211] は、上注 76 と同じ、1180 年に、リユーリク [J2] の要請に応じて援軍を派遣している ([イパーチイ年代記 (7) : 254 頁, 注 519] 参照)。今回も同様の同盟による援軍派遣だろう。



〔スヴァトスラフ [C411:G] にとっての〕自分の兄弟たち<sup>83)</sup>は〔討伐遠征に〕参加せず、〔かれらは〕こう言った。「われらは遙かドニエプル川の下流には行かぬ。自分の土地を空にして離れるわけにはいかない。だが、もしそなた〔スヴァトスラフ [C411:G] が〕ペレヤスラヴリまで行くのなら、スーラ川 (Сула) でそなたと合流しよう<sup>84)</sup>」。スヴァトスラフ [C411:G] は、自分の兄弟たちに好意を持たず、自らの遠征路を急ぎ進んだ。神の御心の導きにより、かれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕の年長の息子たち<sup>85)</sup>はチェルニゴフ地方から連れ出されることはなかった<sup>86)</sup>。

スヴァトスラフ [C411:G] はドニエプル川を進軍し、インジルの浅瀬 (Инжирь брод) と呼ばれるところで陣を構えた<sup>87)</sup>。そして、戦場となる河岸へとドニエプル川を渡渉し、5日のあいだかれら〔敵〕を捜していた。そこで、〔スヴァトスラフ [C411:G] は〕年少の公たちを自らの

83) このスヴァトスラフ [C411:G] にとっての「自分の兄弟たち」(своя братья) とは、チェルニゴフ公ヤロスラフ [C412], ノヴゴロド=セヴェルスキイ公イーゴリ [C432], トルブチェスク公フセヴォロド [C433] の、いわゆる「オレーグ一族」(Ольговичи) 諸公を指している。

84) この、遠征参加断りの言葉は、チェルニゴフ公ヤロスラフ [C412] か、ノヴゴロド・セヴェルスキイ公イーゴリ [C432] のどちらかから出たものだが、イーゴリ [C432] は直後に独自の遠征を組織していることから見て、後者の可能性が高い。

この断りの口実はおよそ次のようにまとめられる。「はるかドニエプル川の下流に軍船で行くのは(実際、オレリ川は下流域にある)自分たちのとって遠すぎて、おくれを取り、また遠征の利益も見込めない。もし、ペレヤスラヴリ付近で諸公遠征部隊が集合するのなら、そこからドニエプル川を下ってスーラ川に入り、中流・上流域に来ることを求める。その場合なら、自分たちはセム川経由でスーラ川に入り、そこで諸公部隊と合流して、東の平原へむけて遠征することができ、自分たちにとっても利がある」というもの。以下に見るように、スヴァトスラフ [C411:G] は別の遠征地と遠征路を考えていたため、この要求を無視した。

85) 「年長の息子たち」(старѣишии его сынове) とは、この遠征に参加した、ムスチスラフ [G1] とグレーブ [G3] に対して年上の息子たちという意味で使われており、オレーグ [G5] (おそらく次男) とフセヴォロド [G4] (おそらく三男) ([イパーチイ年代記 (7): 245 頁, 注 462] 参照) の二人と考えられる。

オレーグ [G5] はチェルニゴフ公領北東境界のロパスナに所領を持っており ([イパーチイ年代記 (7): 231 頁, 注 389]), フセヴォロド [G4] も同様にチェルニゴフ公領の辺地を所領としていたと考えられる。1184 年春にスヴァトスラフ [C411:G] が、この二人をノヴゴロド=セヴェルスキイのイーゴリ [C432] のもとに、遠征支援を名目としたいわばお目付役として派遣したのも (上注 48 参照), 二人がノヴゴロド=セヴェルスキイの近くに所領を持っていたことによるだろう。

なお、スヴァトスラフ [C411:G] には、さらに年長 (おそらく長男) のウラジーミル [G2] がいるが、かれはこの遠征の際には、城市防衛のためにキエフに残されたと思われる。

86) オレーグ [G5] とフセヴォロド [G4] が、父スヴァトスラフ [C411:G] が指揮するポロヴェツ討伐遠征に参加できなかったことについては、当然、「自分の兄弟たち」(イーゴリ [C432] とヤロスラフ [C412]) によるなんらかの妨害があったことが想定される。

87) 「インジルの浅瀬」(Инжирь брод) については特定が難しいが、オレリ川河口近くにあつて、ドニエプル川を右岸から対岸へ渡ることのできる渡河地点の名前だったのであろう。クドリャショフは、この語は、「猪」または「豚」を意味するチュルク語の хынзыр に由来し、「浅瀬」の意味合いに適合しているとしている [Кудряшов 1948: С. 132]。

遠征隊の先頭に配置した<sup>88)</sup>。かれ〔スヴァトスラフ〕が配置したのは、ベレヤスラヴリの〔公〕ウラジーミル [D1782]、自分の〔二人の〕息子のグレーブ [G3] とムスチスラフ [G1]、ムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12]、ドゥブロヴィツァの公グレーブ・ユーリエヴィチ<sup>89)</sup> [B3215]、ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ<sup>90)</sup> [D1151] だった。かれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕とともにまた、2100 人のベレンディ人がいた<sup>91)</sup>。

<sup>92)</sup> ポロヴェツ人は、ウラジーミル [D1782] の部隊が一条乱れず自分たちに向かって進んで来

---

88) 「年少の公たち」(моложьшеѣ князьѣ) とは、スヴァトスラフ [C411:G] 自身やリュリク [J2] などの「年長者」に対して、年長制の位階において「年少者」ということで、次に列挙されている諸公のことを指している。ここでも、スヴァトスラフ [C411:G] は「年少者」の諸公に掠奪(戦利品獲得)の優先権を与えたと理解すべきだろう(上注 55 及び下注 240 参照)。

89) グレーブ・ユーリエヴィチ [B3215] (上注 81) は、ここでは「ドゥブロヴィツァの公」(князь Дубровицьскій) だが、『ラヴレンチイ年代記』6693(1185)年の並行記事では「トゥーロフの」(Туровьскій) ([ПСРЛТ. 1, 1997: Стб. 394]) となっている。かれが1196年に死去したときにはトゥーロフ公だったことから(下注 502 参照)、『ラヴレンチイ年代記』では、編集過程でこのことを先取りして記されたのだろう。

「ドゥロヴィツァ」(Дубровица)の城市は、プリピャチ川支流ホルイニ(ゴリニ)川(Горинь)の中流域に位置し、リウネ州の市ドゥブロヴィツァ(Дубровица)に相当する。トゥーロフからだとな西方向へ約100km離れている。

90) ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1151] は、1177年にヤロボルク [J11] からトレポリを計略によって奪取し、それ以来この城市を公支配していた([イパーチイ年代記(7): 233 頁, 注 404] 参照) この時には、リュリク [J2] の指揮の下にいたのだろう。

91) この記述からは、ベレンディ人部隊はスヴァトスラフ [C411:G] の指揮下にあったように読めるが、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「ユーリイ [D17] の孫であるウラジーミル・グレーボヴィチ [D1782] が、ベレヤスラヴリ人を率いて斥候部隊として先頭を進んだ」という文言があり、それに続いて「かれとともに2100人のベレンディ人がいた」となっている([ПСРЛТ. 1, 1997: Стб. 395])。その文脈からは、ベレンディ人はウラジーミル [D1782] の配下にあったように読める。この違いは、年代記記事を編集する際に生じたものだが、どちらが正しいかは定めがたい。

92) 『ラヴレンチイ年代記』6693(1185)年の並行記事では、この個所の直前に次のようなウラジーミル公 [D1782] の活躍についての文言がある。これは『イパーチイ年代記』の編集の過程で、原資料から削除されたものと考えられる。

「ポロヴェツ人はルーシ人が自分たちを討ちに来て来るのを耳にして喜んだ。かれら〔ポロヴェツ人〕は、力を恃んで、こう言った『見よ、神がルーシ諸公を与え給うたのだ。かれらの部隊はわれらが手中にある』。かれら〔ポロヴェツ人〕は戦闘に向かっていった。〈神にかなった思慮がなければ、勇猛さもない〉という格言を知らなかったのである。かれら〔ポロヴェツ人〕は、ウラジーミル [D1782] に向かって、一網打尽にしようと、喊声をあげて進軍した。ウラジーミル [D1782] は、神の助けと、聖母および自らの聖なる祖父、そして父親の祈りによって戦意を固め、かれら〔ポロヴェツ人〕に向かって進軍した。かれ〔ウラジーミル〕はスヴァトスラフ [C411:G] に対して、こう言って要請していたのである。『わたしの領地はポロヴェツ人の手で荒廃し空になっています。父であるスヴァトスラフ [C411:G] よ、どうか斥候部隊の先頭に立たせて下さい』。ルーシの諸公がウラジーミル [D1782] とともに先陣をきることはなかった」([ПСРЛТ. 1, 1997: Стб. 395])。『ラヴレンチイ年代記』では、ユーリイ手長公 [D17] の一族であるウラジーミル [D1782] の活躍が強調されていることがわかる(上注 91 も参照)。

るのを見て、逃げ始めた。神の怒りと聖母によって追い払われたのである。

〔遠征軍の〕ある者たちはこれを追いかけたが、追いつくことができなかった。ルーシ人たちは引き返すと、オレリ (Ерель) と呼ばれ、ルーシ人はウゴル (Угол) と呼んでいる場所<sup>93)</sup> に陣を張った。【632】ポロヴェツ人の侯コビャク<sup>94)</sup> (Кобякъ) は、ルーシ人はこれほどの数しかいないと考え<sup>95)</sup>、軍を引き返すと、かれら〔ルーシ人たち〕のあとを追った。あとを追って行き、ルーシ人の部隊を目撃した。そして、〔オレリ〕川を挟んで射撃が始まり、互いに馬で対岸に渡ろうとし始めた。長い間そのようなことが続いた。

スヴァトスラフ [C411:G] とリユーリク [J2] は、このことを聞くと、かれら〔戦っているルーシ人〕に向けて援軍として大軍の部隊を差し向けた。そして自分たち二人は、これを追うようにして急いで進軍した。ポロヴェツ人は援軍がやって来たのを見て、そこにスヴァトスラフ [C411:G] とリユーリク [J2] がいると思って、たちまち馬を駆けさせて〔逃げ出した〕。ルーシ人は神の助けを得ると、かれら〔ポロヴェツ人〕を追いかけて、これを斬り殺したり捕まえたりし始めた<sup>96)</sup>。

このようにして主はキリスト教徒に慈悲を与えた。この日、神はスヴァトスラフ [C411:G] とリユーリク [J2] を二人の信仰ゆえに誉め讃えたのだった。そのとき<sup>97)</sup>、コビャク・カルルイ

93) 「オレリ川」(Ерель, Орель) は、ドニエプル左岸支流の、現在の「オレリ川」(Орель) に相当する。その河口は、現在のドニエプロ・ペトロフスク郊外にあり、ペレヤスラヴリからだと 300km ほど離れた遠方にある。「ルーシ人はウゴル(Угол)と呼んでいる」の「ウゴル川」(Угол, Угла) の名称は、これまでの年代記記事でも、ルーシ諸公の遠征先として何度か登場している([イパーチイ年代記(3): 342 頁, 注 81; (5): 256 頁, 注 167; (6): 273 頁, 注 578])。

なお、クドリアシヨフは、Ерель そして、Угла を川の名ではなく、河口に位置していた城砦の名前として考察しており、Угол に名は、ドニエプル川と支流のオレリ川の「角」(угол) にあったことから来たとしている。確かに布陣をした場所の名としては、そう解釈するほうが適当だろう [Кудряшов 1948: С. 96-99]。

94) 「コビャク」(Кобякъ) はドニエプル川と南ブグ川下流域の「入江」(Лукоморье) のポロヴェツ人の部族連合の首長で、この「オレリ川の合戦」では部族長をとりまとめて総指揮を執っていた。かれは、1172 年に、族長コンチャクとともにペレヤスラヴリ公領を襲撃しており ([イパーチイ年代記(7): 210 頁, 注 121]), 1181 年のイーゴリ [C432] とリユーリク [J2] との対立のときには、イーゴリ側について戦い、敗走している ([イパーチイ年代記(7): 280 頁, 注 559] 参照)。下注 98 も参照。

95) コビャクは、ウラジーミル・グレーボヴィチ [D1782] 率いる斥候部隊が、ルーシの遠征軍の全てだと見誤ったのである。

96) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事には「われらの〔軍は〕かれら〔ポロヴェツ人〕を追いかけて、斬り殺した。かれらのうち 7 千人を生け捕りにした。ポロヴェツ人の侯たちだけで 417 人いた」([ПСРЛТ. 1, 1997: Стб. 395]) と戦果が具体的に記されている。

97) 以下に列挙されているのは、前注の「417 人」のうち、捕虜と(あるいは殺害)したポロヴェツ侯(族長)の中でも主な人物の名前である。

エヴィチ<sup>98)</sup> (Кобяк Карлыевич) とかれの二人の息子、イザイ・ビリユーコヴィチ<sup>99)</sup> (Билукович Изай), トグリイ<sup>100)</sup> (Товлый) とその息子, その〔トグリイの〕兄弟のボクミシ (Бокмиш), そして, オサルク<sup>101)</sup> (Осалук), バラク (Барак), タルフ (Тарх), ダニール<sup>102)</sup> (Данил), ソドヴァク・クロピチキイ<sup>103)</sup> (Сьдвак Кулобичкий) が捕虜となった。コリヤジ・カロタノヴィチ (Корязь

98) コビャク (上注 94) の父親の名が「カルリイ」(Карлый)であることがわかる。コビャクがキエフ公スヴァトスラフ [C411:G] の捕虜になったことは、『イーゴリ軍記』にも言及がある。〔「フセヴォロド [C411:G] は」 邪教のコビャクを, 海の入江から, ポロヴェツ人の大なる鉄の部隊から突風のようにして引つ捕らえた。こうしてコビャクは倒れた, キエフの城市で, スヴァトスラフの屋敷の間で」 (а поганаго Кобяка изъ луку моря отъ желъзныхъ великихъ полковъ половецкихъ, яко вихрь выгорже: и падеся Кобякъ въ градъ Киевъ, въ гриднищъ Святъславли)[СПИ-1950: С. 18][ 木村 1957-1979, 1983: №89]。ここで, コビャクは「倒れた」(паде)とありまたこれ以降, コビャクの名が年代記等の史料に見えないことから, かれは捕虜として連行されたキエフで死んだ(殺害された)可能性も考えられる。

99) このイザイ(Изай)の父ビリユーク(Билук)は, 本年代記 6671(1163)年の記事で, キエフ公ロスチスラフが息子のリユーリク [J2] に政略結婚させたポロヴェツ侯女(Белуковна)の父親「ベルーク」(Белук: Беглук)と同一人物であり ([イパーチイ年代記 (6): 注 321, 428]), つまり, リユーリク [J2] にとってイザイは義理の兄弟になる。ただし, この時点では, リユーリク [J2] とベルーク一族との姻戚関係は切れていた可能性もある。[Плетнева 1990: С. 151] も参照。

100) 「トグリイ」(ここでは, Товлый と綴られている)は, 年代記では Толгый, Тоглыи, Итоглыи などとも表記されるルコモリエ・ポロヴェツ人(ドニエプル川=ブグ川河口地帯)の有力な族長 ([Pritsak 1981: p. VIII-1617])。1172年の記事では, ミハルコ [D175] と戦って, 戦場から逃走している ([イパーチイ年代記 (7): 173 頁注 24] を参照)。今回は, 捕虜となりキエフに連行された後に, おそらく買い取られて解放されている。

1190年に, かれはスヴァトスラフ [C411:G] のもとから逃げて来たトルク人の黒頭巾族の侯(軍司令官)クントウヴディ(Кунтувдей)を保護し(下注 369 参照), かれとともに, ロシ川の掠奪を行っている。さらに, 1193年の記事にキエフ公との和議の場面で, やはりルコモリエ・ポロヴェツ人の族長アクーシ(Акуш)とともに名が出ている(下注 425)。

なお、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事には, この「トグリイ」(Толгый)について, 「ダヴィドヴィチの岳父である」(Давыдович тесть)という文言が付されている ([ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 396])。当時の状況から見て, この「ダヴィドヴィチ」をスモレンスク公ダヴィド・ロスチスラヴィチ [J3] の息子と見て, イジャスラフ [J31] ([Pritsak 1981: p. VIII-1618]) もしくは, ムスチスラフ [J34] ([Войтович 2006: С. 522] が, トグリイの娘と結婚していたという推定がなされている。

101) 「オサルク」(Осалук)は, 6701(1193)年の記事では, 上注 99 の「イザイ」(Изай)と並んで「オソルク」(Осолук)の名で記されており(下注 426 参照), ドニエプル川左岸に展開していたブルチェヴィチ族の有力な侯だった。

102) 『ノヴゴロド第一年代記』の 6711(1203)年の項に「ダニール・コビャコヴィチ」(Данила Кобяковиць)というポロヴェツ侯がコンチャクとともに言及されている [НПЛ 1950: С. 45, 240]。このダニールはコビャク・ハンの息子ということになるだろうが, 直前の部分でコビャクは「二人の息子」とともに捕らえられたとすでにあるので, このダニールがコビャクの子であるかは定めがたい。また, ここで逮捕されていたとしても, 捕虜の買戻しによって復帰した可能性は十分に考えられる。

103) 「ソドヴァク・クロピチキイ」(Сьдвак Кулобичкий)の Кулобичкий は, 1185年のカヤラ川の戦いの記事で言及されている, コロピチ(Колобич)一族の出身者(族長)と考えられる。

Калотанович)とタルスク(Тарсук)はその場で殺された。他に無数の者たちが〔殺された〕。神がこの勝利を与えたのは、7月30日の月曜日<sup>104)</sup>、戦士聖イオアンの記念日のことだった。

大公スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ[C411:G]とリュウリク・ロスチスラヴィチ[J2]は、神の手によって邪教徒に対する勝利を収め、大いなる栄光と【633】名誉をもって帰郷した。

その年<sup>105)</sup>、イーゴリ・スヴァトスラヴィチ[C432]は、スヴァトスラフ[C411:G]がポロヴェツ討伐遠征を行ったことを聞いて、自分のもとの弟のフセヴォロド[C433]、甥のスヴァトスラフ[C4311]、息子のウラジーミル[C4321]を呼び寄せた。そして、〔イーゴリは〕兄弟たちと、すべての従士たちに向かってこう言った。「ポロヴェツ人たちは転進して、ルーシ諸公に向かって進軍している。われらは、かれら〔ポロヴェツ人たちが〕がいない間に、かれら〔ポロヴェツ人〕の移動幕舎を襲って、撃ち〔殺そう〕ではないか」。

〔イーゴリが〕メルル川(Мѣрл)の向こう側<sup>106)</sup>に行ったとき、かれは、ポロヴェツ人たちと遭遇した。オボヴリ・コストウーコヴィチ<sup>107)</sup>(Обовлы Костуковичь)が400人〔の騎兵を〕を率いてルーシ人に向けて掠奪のために〔騎馬で〕出発してきた。そこで〔イーゴリは〕すぐさま、かれら〔ポロヴェツ人〕に向けて騎兵を放った。ポロヴェツ人は、神の意志によって逃げ始めた。ルーシ人たちはこれを追撃した。こうして、〔イーゴリの軍は〕かれらに打ち勝つ

104) 7月30日が月曜日に相当するのは1184年であり、このルーシ諸公ポロヴェツ討伐遠征のオレリ川の戦いは、1184年7月に起こったと考えるべきである。なお、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「6月31日月曜日の聖エヴドキイの日」(мѣсяца иуния в 31 день в понедѣльник на память святаго Евдокима Новаго)とあるが、聖エヴドキイの日は7月31日に祝われ、かつ1184年の場合、月曜日ではないことなど二重の間違ひがあることから、『ラヴレンチイ年代記』の年紀は誤記が重なった不正確なものと考えられるべきである。(〔Бережков 1963: С. 82〕も参照)

105) 1184年の夏～秋に相当する。

106) 「メルル川」(Мѣрл)は、ヴォルスクラ川中流域の左岸支流で、現在のメルラ川(Мерла, Мерло, Мерля)のこと。イーゴリ[C432]が少し前(1184年春)に遠征したときに言及されている「ヒイリヤ川」(Хырия)(現在のフーフラ川(Хухра))(上注65)とは上流では10～20kmほどしか離れていない。また、「向こう側」(за Мѣрлом)とは、ノヴゴロド＝セヴェルスキイから遠征して、ヴォルスクラ川を渡った一帯のことを指している。

イーゴリ[C432]はこの年の春のヒイリア川への遠征が増水によって戦果があがらなかったことから(上注65)、ポロヴェツ人の主要部隊がスヴァトスラフ[C411:G]とリュウリク[J2]率いるルーシ諸公連合軍の相手をして防衛が手薄になっている機会を捉えて、再度同じ場所(ヴォルスクラ川中流域)に掠奪遠征を試みたことになる。

107) 「オボヴリ・コストウーコヴィチ」(Обовлы Костуковичь)について詳細は不明。セヴェルスキイ＝ドネツ川流域の弱小のポロヴェツ侯か。先のコビャクが指揮した「捕虜7000人」(上注96参照)に比べれば、400人の騎兵は圧倒的な小勢である。



て帰郷した<sup>108)</sup>。

その時、ガーリチの〔公〕であるウラジーミル・ヤロスラヴィチ [A12111] は、義理の兄弟<sup>109)</sup>〔姉妹の夫〕であるイーゴリ [C432] のもとにいた。なぜなら、かれは自分の父親〔ヤロスラフ [A1211]〕の手でガーリチから追放されていたからである<sup>110)</sup>。

それ以前に、このウラジーミル [A12111] は〔ヴォルィニの〕ヴラジミルのロマン [I11] にもとにやって来たのだが、ロマン [I11] はかれ〔ウラジーミル〕の父親を怖がって<sup>111)</sup>、かれ〔ウラジーミル〕に安住の地を与えようとしなかった。そこで、そこから〔ウラジーミルは〕、ドロゴブージのイングヴァル [I22] のところに行ったが、かれ〔イングヴァル〕もやはりかれ〔ウラジーミル〕の父親を恐れて<sup>112)</sup>、かれ〔ウラジーミル〕を受け入れなかった。かれ〔ウラジーミル〕はそこから、トゥーロフのスヴァトボルク・ユーリエヴィチ [B3213] のところに行った。かれ〔スヴァトボルク〕はかれ〔ウラジーミル〕をスモレンスクのダヴィド<sup>113)</sup> [J3] のところに行かせた。そして、ダヴィド [J3] はかれ〔ウラジーミル〕を自分〔ウラジーミル〕の母方の叔父であるスーズダリのフセヴォロド<sup>114)</sup> [D177:K] にところに行かせた。しかしながら、ガーリチのウラジーミル [A12111] は、そこに安住の場所を見出すことができず、自分の義理の兄弟（姉妹の夫）にあ

---

108) ここでもイーゴリ [C432] の戦果は書かれておらず、掠奪目的の遠征としては大きな成果が得られなかったと考えられる。

109) ウラジーミル [A12111] にとってイーゴリ [C432] が「義理の兄弟（姉妹の夫）」(зять) であるというのは、イーゴリ [C432] が、1170 年以前にガーリチ公ヤロスラフ [A1211] の娘エフロシーニア（『イーゴリ軍記』では「ヤロスラヴナ」）と結婚していることを指している。

110) ウラジーミル [A12111] が、父のガーリチ公ヤロスラフ [A1211] と不和になって、ガーリチから逃げ出したのは 1173 年のことで、ウラジーミルが父ヤロスラフに「領地を要求した」のが原因とされている [イパーチイ年代記 (7): 注 150]。逃亡直後、ウラジーミル [A12111] はルチェスク (ルツク) のヤロスラフ [I2] のもとに亡命していたが、父親の圧力によって、トルチェスクのミハルコ [D175] のもとに、再度逃亡せざるを得なくなった。その後の行動は不明だが、本記事によると、トルチェスクからヴォルィニ地方のヴラジミルへ行き、その後各地を転々とするようになったと推定される。

111) 1173 年にウラジーミル [A12111] がガーリチを逃亡してルチェスクのヤロスラフ [I2] のもとに亡命したとき、父親のヤロスラフ [A1211] はポーランドからの援軍を要請して、ルチェスクを襲撃すると強迫している [イパーチイ年代記 (7): 215 頁, 注 151]。同様の事態が、ヤロスラフの甥のロマン [I11] にも（さらには息子のイングヴァルにも）起こったと考えられる。

112) 前注を参照。

113) ダヴィド [J3] は、1180 年にスモレンスクの公座に正式に就いており ([イパーチイ年代記 (7): 注 522])、かれがウラジーミル [A12111] を受け入れたのは、就位直後の 1180 年のことだろう。

114) ウラジーミル [A12111] の母は、ユーレイ [D17] の娘オリガであることから、ウラジーミルにとってフセヴォロド [D177:K] は母方の叔父に当たる。



たる、[634] プチヴリ<sup>115)</sup>のイーゴリ・スヴァトスラヴィチ [C432] のところにやって来たのだった。かれ〔イーゴリ〕は親愛をもってかれ〔ウラジーミル〕を受け入れると、かれに大いなる名誉を与えて<sup>116)</sup>、2年間自分のもとに滞在させた。そして3年目に、〔イーゴリは〕かれ〔ウラジーミル〕をその父親と和解させた<sup>117)</sup>。そして、自分の息子でリューリク [J2] の娘婿にあたるスヴァトスラフ<sup>118)</sup> [C4323] を同行させて、〔ウラジーミルをガーリチへと〕送り還した。

その年、グロドノ (Городень) の城市が全て焼けた。石造りの教会も〔焼けた〕。稲妻と落雷によるものだった<sup>119)</sup>。

---

115) 1164年にイーゴリ [C432] の父でノヴゴロド・セヴェルスキイ公スヴァトスラフ [C43] が没すると、長男のオレーグ [C431] が父の公位を継いでノヴゴロド・セヴェルスキイに座し、それをきっかけにイーゴリは公領の付属都市であるプチヴリを公として支配した。そして、1180年の兄オレーグ [C431] の死によってノヴゴロド・セヴェルスキイに移ったと考えられる [Dimnik 2003: p. 122]。

116) 「名誉を与える」(положити честь) という表現は、年代記中における用例から判断すると、主君の公が、同盟者か配下の公に、自分の領地を分け与えたことを示す表現である。イーゴリ [C432] がウラジーミル [A12111] に自分が領有する領地の一部を与えた(貸与した)ということだろう。

117) イーゴリ [C432] がウラジーミル [A12111] をプチヴリに受け入れたのは、この年(記事の時系列から見て1184年だろう)の3年前であれば、1180年もしくは1181年になる。

上注115のようにイーゴリ [C432] 自身は1180年にノヴゴロド・セヴェルスキイの公座に就いており、それまでかれが公支配していたプチヴリは、イーゴリの長男のウラジーミル [C4321] に引き渡した(下注151参照)。『イーゴリ軍記』の「ヤロスラヴナの歌」(1185年の出来事と推定される)([木村1957-1979, 1983: No. 172])の舞台がプチヴリとなっていることから分かるように、イーゴリ妃(「ヤロスラヴナ」すなわち、ヤロスラフ八智公 [A1211] の娘で、ウラジーミル [A12111] の姉妹)は、息子のいるプチヴリに住み続けていたようである。イーゴリ [C432] が、まさにプチヴリをウラジーミル [A12111] の受け入れの場としたのも、姉妹が世話をすることができる場所という理由だったことは明らかである。

118) このスヴァトスラフ [C4323] が、1176年に生まれたイーゴリの息子だとすると、当時はまだ9歳ほどということになる。ただし、イーゴリ [C432] は、この年(1184年)の春のヒイリヤ川遠征に、このスヴァトスラフを連れて行っている(上注60)。その意味では、幼少ではあるが、象徴的な任務を担わせたのかもしれない。

また、スヴァトスラフ [C4323] が「リューリク [J2] の娘婿にあたる」というのは、1187年にスヴァトスラフがリューリク [J2] の娘と結婚したこと(下注300参照)を指しており、この時点ではまだかれはリューリクの「娘婿」(зять)ではない。リューリク [J2] に立場の近い年代記記者が、編集の過程で、事後の事実をこの記事に反映させたということだろう。

119) 1184/1185年のグロドノ公はムスチスラフ・フセヴォロドヴィチ [F113] で、1184年7月のオレリ川の戦いにも参加している(上注80参照)。

その年、聖ヴァシーリイ教会<sup>120)</sup>の献堂式が行われた。これはキエフの大いなる館<sup>121)</sup>のところに建てられたもので、盛大な献堂式が行われた。1月1日<sup>122)</sup>に府主教〔ニキーフォル〕とユーリエフ主教<sup>123)</sup>の福なるニキーフォル、洞窟修道院の掌院にして典院ヴァシーリイの手で聖堂が祝聖された。この聖堂はスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] が建立したものであった。かれ〔スヴァトスラフ〕はこの教会の祝賀の宴に、聖なる府主教のニキーフォルを招いた。他の主教と典院たち、高位の聖職にある者たち、キエフ人たちも〔呼び招いた〕。祝いの宴が張られ、それが終わると、それぞれが帰郷して行った。

## 6692 [1184] 年

忌まわしく、神を畏れぬ、三重にも呪われたコンチャクが、多数のポロヴェツ人を率いてルーシを討伐にやって来た。かれは驕り高ぶって、ルーシの諸城市を捕囚とし、火で焼き尽くそうとした。なぜなら、〔コンチャクは〕一人のイスラム教徒の家臣を雇い入れ、その男は〈生きた火〉を発射する<sup>124)</sup>のである。かれ〔コンチャク〕のもとには、【635】強力な弩(おおゆみ)があり、50人の男がやっと引き絞れるほどだった<sup>125)</sup>。しかし、すべてを憐れむ主なる神は驕れる者を懲らしめ、かれらの意図を打ちひしいだ。

---

120) この「聖ヴァシーリイ教会」(церквы святого Василья)は、キエフのウラジーミル区のキエフ公の屋敷である「ヤロスラフ宮殿」に隣接して、おそらく宮殿付属の小規模聖堂として建てられたのだろう。その後「三主教聖人教会」(Трехсвятительская церковь)として保持されたが、ソビエト時代に破壊されている。[Каргер 1961: С. 455-456]

121) 「大いなる館」(великий двор)は、いわゆる「ヤロスラフ宮殿」(Ярославский двор) (前注)のこと。

122) 1185年1月1日に相当する(記事の時系列順から推定)。この日は、主教聖人聖大ヴァシレイオス(Василий Великий)の祝祭日であり、献堂式もその日にあわせて開催されたもの。

123) 「ユーリエフ主教」(епископ Гюрговский)のユーリエフは、キエフから約80km南のロシ川河畔に建てられた城市で、1032年にヤロスラフ賢公の手で創建され、1072年には既に主教が置かれていた。

124) 「生きた火」(живый огонь)は、文脈から見て、発火しやすい油成分(石油)や硝石火薬を含んだ矢弾を、強力な弩(次注)で城市に向けて打ち込んで、城内を炎上させる攻城火器と考えられる。そのような技術は、当時小アジアからクリミア半島経由でポロヴェツ人の地にもたらされていたという[Вилинбахов 1960: С. 287]。コンチャクはそのような技術を持った職人(「イスラム教徒の家臣」)を連れて、遠征に臨んだことになる。

125) 「強力な弩(おおゆみ)」の原文は複数形の луци тузи самострѣлнии で、横倒しにした大型の弓から専用の矢を発射する装置。クロスボウの原型にあたる。巨大な装置を移動幕舎(вежа)のように馬車に積んで動かしたと思われる。「50人がかり」はいかにも誇張で、本来は「8人」で、8の数値を表す Ѡ. の文字が、誤って50の数値を表す .н. に転記されたのではないか。(同類の誤写については、[イパーチイ年代記(6): 260頁、注422]を参照)

かれ〔コンチャク〕は来襲すると、ホロリ川<sup>126)</sup> (Хороль)に陣を構え、ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [C412]のもとに、策略をもって使者を遣って和議を求めた<sup>127)</sup>。ヤロスラフ [C421]はかれらの策略を知らずに、かれらのもとに自分の家臣オリスチン・オレクシチ<sup>128)</sup> (Ольстин Олексич)を派遣した。

しかし、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G]はヤロスラフ [C421]のところに使者を遣って言った。「兄弟よ、かれらの言うことを信じるな。自分の家臣を派遣するな。わしはかれらを討伐すべく進軍しよう」。

こうして、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G]とリューリク・ロスチスラヴィチ [J2]は、自分たちの部隊の全軍を引き連れて、時を移さずかれら〔ポロヴェツ人〕に対抗すべく出発した。リューリク [J2]とスヴァトスラフ [C411:G]は、ウラジーミル・グレーボヴィチ [D1782]〔の部隊〕に武装をさせた。また、ムスチスラフ・ロマノヴィチ<sup>129)</sup> [J12]〔の部隊〕にも先遣襲撃の武装をさせた。そして、リューリク [J2]とスヴァトスラフ [C411:G]自身は、かれらのあとから進発した。

126) 「ホロリ川」(Хороль)は、ドニエプル川支流プショール(Псёл)川の右岸支流で、現在のホロル川(Хорол)に相当する。その上流は、ルーシの地とポロヴェツ人の地の境界とみなされていたスーラ川に近接している。その下流・中流域はペレヤスラヴリ公領と、上流域はチェルニゴフ公領と接している。コンチャクが、チェルニゴフ公ヤロスラフ [C412]に使者を遣ったということは、ホロル川最上流に布陣して、北側のチェルニゴフ領の諸城市(Вьяхань, Попаш, Ромен, Дмитровなど)の攻略を狙ったのだろう。

127) 「策略をもって(…)和議を求めた」(с лестью <…> мира прося)とは、遠征隊の武力を背景にして、前注の諸城市を公支配しているチェルニゴフ公ヤロスラフに対して、貢ぎ物を要求したということ。「策略をもって」とは、かりに貢ぎ物を納めて和議を結んでも、すぐに和議を破棄して攻撃する意図があったということだろう。

128) 「オリスチン・オレクシチ」(Ольстин Олексич)は、チェルニゴフ公ヤロスラフ [C412]の重臣で、以下にも1185年と1187年の遠征の記事で言及されている。父称が付されているだけでなく、年代記には「ブローホルの孫」と祖父の名が示されている個所もあり(下注152)、特別に尊敬されるべき高位の人物だったことがわかる。本記事で使者としてポロヴェツ人との交渉にあたり、コウイ人部隊を率いているところから見て、チェルニゴフのコウイ人部隊を統率する軍司令官だったのだろう。

なお、オリスチン(Ольстин)の名は『ラヴレンチイ年代記』6685(1177)年の記事の中で、コロクシャ川の合戦(1177年3月14日にリャザン公グレーブグレーブ [C542:H]がフセヴォロド [D177:K]率いるウラジミル軍に大敗を喫した)の描写で、捕虜となった「グレーブ公の側近(думцы)」の一人として言及されている([ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 384])。これが同一人物だとすると(その可能性は高い)、オリスチンは、グレーブ公の死後(1178年)、リャザンからチェルニゴフへ、勤務替をしたことになる。このことも、オリスチンが、いわば黒頭巾族(コウイ人)傭兵部隊の指揮者として、時に応じて自分たちにとって有利な諸公に勤務していたことの傍証ともなる。([Энциклопедия СПИ-3: С. 360-361]も参照)

129) ムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12]は当時スモレンスクに座していた。前年、1184年7月のオレリ川への諸公遠征軍にも参加している(上注78)。

二人〔スヴァトスラフとリューリク〕が軍を進めると、商人たちに遭遇した<sup>130)</sup>。かれらはポロヴェツ人のところから逃げ出して来たもので、ポロヴェツ人がホロリ川で陣を張っていることを二人に語り聞かせた。スヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2] はこれを聞くと喜んで、かれら〔ポロヴェツ人〕に向かって進軍した。ウラジーミル [D1782] とムスチスラフ [J12] も、これを聞いて、商人たちが示した場所に向けて軍を進めた。

〔ポロヴェツ人の〕布陣していた場所に到着したところ、誰の姿も認めることができなかった。なぜなら、〔ポロヴェツ人たちは〕ホロリ川に沿って移動して、別の場所行つたからだった。先遣襲撃隊はホロリ川を渡り、丘に登って、**[636]**、かれら〔ポロヴェツ人〕がどこにいるかを見極めようとした。すると、コンチャクは河岸の低地に陣を張っていた。〔先遣隊は〕丘を迂回してかれ〔コンチャク〕を避けて進んだ。すると、別の〔ポロヴェツ人の〕一団をみとめたので、かれらを襲撃した。コンチャクはこれを見て、街道沿いに<sup>131)</sup>逃げ出した。〔先遣隊は〕かれ〔コンチャク〕の若い側妻を捕虜とした<sup>132)</sup>。また、一人のイスラム教徒を捕まえた。かれのもとに〈生きた火〉があった<sup>133)</sup>。この者〔イスラム教徒〕は、装置とともにスヴァトスラフ [C411:G] にもとへと連行されて行つた。ほかのかれら〔ポロヴェツ人〕の兵たちは撃ち殺され、多数の馬と武器、そして捕虜が〔捕獲された〕。

## 6693 [1185] 年

主はその救済の行いをなして、ルーシの地の二人の公、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] と大公リューリク・ロスチスラヴィチ [J2] に勝利を与えた。3月1日<sup>134)</sup>のことだった。

---

130) この商人たちは、いわゆる「ザロズィ商人」であり、その交易路はドン川、セヴェルスキイ＝ドネツ川方面とベレヤスラヴリ及びキエフを結ぶものだった。商人たちは、セヴェルスキイ＝ドネツ川方面へ商いに行き、帰りに西へ、すなわちルーシ方面へと向かっていたと考えられる（『イパーチイ年代記 (6)』: 298 頁、注 393] を参照）。

131) 「街道沿いに」(чресь дороги)の「街道」は、ウクライナ語訳注では、いわゆる「ザロズィ街道」(залозный путь)を指していると推定している。ドニエプル川水系とドン川水系の分水嶺を走っているこの街道は、クドリャショフ制作の12世紀の街道地図でも、オレリ川の最上流域に接している [Кудряшев 1948: С. 107] (『イパーチイ年代記 (6)』: 255 頁、注 393] も参照)。

132) 側妻(мьнщица)の捕獲について言及されているのは、多額の身受け金があてにできる大きな戦果と見なされていたことからきている。

133) この〈生きた火〉の矢弾を扱うイスラム教徒の側近については上注 124 を参照。発射装置(устроены)とともに戦利品として捕獲されたのである。

134) 記事の時系列から判断して、1185年3月のことである。同じホロリ川遠征の記事の続きだが、三月暦であることから、年紀が改まっている。

二人は、コンチャク (Кончак) が逃げたことを知ると、クントゥヴディ<sup>135)</sup> (Куньтудыи) を遣って追わせた。その数は 6000 だった。かれ〔クントゥヴディ〕は急迫したが、かれ〔コンチャク〕自身を見つけることはできなかった。ホロル川 (Хорол) を越えたところで、ぬかるみによって足跡が〔分からなくなった〕からである。

スヴァトスラフ [C411:G] と大いなる公リユーリク [J2] は、殉教者ボリスとグレーブの祈りによって勝利を手にした。そして、それぞれが、父、子、聖霊の三位一体なる神を誉め讃えながら、帰還していった。

〔この遠征において〕チェルニゴフ〔公〕のヤロスラフ [C412] は、兄のスヴァトスラフ [C411:G] と一緒に遠征に出ることはなかった。かれ〔ヤロスラフ〕はこう言っていた。「わしはかれら〔コンチャク等ポロヴェツ勢〕のところに、わが家臣のオリスチン・オレクシチ<sup>136)</sup> (Ольстин Олексич) を派遣している。自分の家臣を討伐するわけにはいかない」。【637】これを理由に、〔ヤロスラフは〕自分の兄弟のスヴァトスラフ [C411:G] 〔の要請〕を拒んだ。

〔他方、〕イーゴリ [C432] は、スヴァトスラフ [C411:G] の家臣<sup>137)</sup> に向かってこう言っていた。「異教徒の討伐を拒絶することなどあってはならないことです。異教徒どもは、われら全てにとって共通の敵である〔のだから〕」。

そして、イーゴリは従士団とともに、どこに向かえばスヴァトスラフ [C411:G] の部隊に先行することができるかについて協議をした。従士たちはかれに言った。「公よ、あなたは鳥のように渡り移ることはできません。見よ、スヴァトスラフから家臣が〔使者として〕あなたのところにやって来たのは木曜日<sup>138)</sup> です。〔スヴァトスラフ〕自身は日曜日<sup>139)</sup> にキエフから出立するのです。公よ、どうしてこれに追いつくことができますでしょうか。イーゴリは、このように従士たちに言われて不愉快だった。〔なぜなら〕かれ〔イーゴリ〕は、スーラ川〔の河岸〕に沿って、平原を横断して進軍することを望んでいたからである。〔しかし平原には〕一面に氷層ができており、軍兵たちは昼のあいだ、夕方になるまでに、見渡す限りの空間を横断仕切ることではできなかった。〔イーゴリは〕スヴァトスラフ [C411:G] の後を追う道を見出すことが

135) 「クントゥヴディ」は、ここでは綴りは「クントゥグディ」(Куньтудыи) となっているが、上注 64 の「クントゥヴディ」(Кунтудей) と同一人物で、キエフ公に仕える黒頭巾族の軍司令官。次の「6000 人」は、配下の黒頭巾族部隊の数である。

136) 「オリスチン」については、上注 128 を参照。

137) スヴァトスラフ [C411:G] は、ホロル川遠征へ出発するときに、ノヴゴロド=セヴェルスキイのイーゴリ [C432] に家臣の貴族を使者として派遣して、遠征軍に合流することを求めたのである。

138) 1185 年 2 月 14 日の木曜のことか。次注参照。

139) キエフからホロル川上流までの遠征旅程を 2 週間ほどと考えた場合、戦勝の日 (1185 年 3 月 1 日) から逆算して、2 月 17 日の日曜日 (放蕩息子の日曜日 неделя о блудном сыне に相当) が推定される。ウクライナ語訳の注もこれを採用している。

できなかったのである。

この年の春<sup>140)</sup>、スヴァトスラフ [C411:G] は、ロマン・ネズディオヴィチ<sup>141)</sup> (Роман Нездилович) にベレンディ人を率いさせて、異教徒ポロヴェツ人討伐の遠征に派遣した。神の助けにより、かれらはポロヴェツ人の移動幕舎を攻略し、多くの捕虜と馬を掠奪した。これは、4月21日のまさに復活大祭<sup>142)</sup> の日のことだった<sup>143)</sup>。

その時、スヴァトスラフ [C411:G] は、ヴァティチ人の地、コラチェフ<sup>144)</sup> (Корачев) へ向かっていた。これは、自分の仕事<sup>145)</sup> のためであった。

---

140) 1185年の春に相当する。

141) 「ロマン・ネズディオヴィチ」(Роман Нездилович)については、1187年の記事にも言及されており(下注311参照)、そこでは「軍司令官」(воевода)として黒頭巾族を率いて遠征をしている。本記事でもベレンディ人(黒頭巾族)の指揮を執っているところから見て、先の「クントゥグディ」(上注135)と同様に、スヴァトスラフ [C411:G] に仕えていた、黒頭巾族出身の軍司令官と考えられる。

142) 1185年の復活大祭(Великъ день)は4月21日に相当している。

143) この、スヴァトスラフ [C411:G] の命令によって行われた軍司令官ロマン・ネズディオヴィチのポロヴェツ人討伐遠征がどこに向かったかについては、この記事の記述からは不明である。1187年のスヴァトスラフ [C411:G] が命令し、ロマン・ネズディオヴィチが指揮をした、同様の遠征の記事(上注141)では「ドニエプル川を越えて」(за Днепръ)とあることから、黒頭巾族の拠点地ロシ川流域からドニエプル川左岸へ渡って南西に進んだ一帯のポロヴェツ人居住地(いわゆる「ドニエプル川流域ポロヴェツ」(приднепровцы)[Плетнева 1990: С. 69])へ掠奪遠征を仕掛けたと思われる。同様に、この記事(1184年4月)の遠征もドニエプル川左岸下流域への遠征ではなかったかと推定される。

144) 「コラチェフ」(Корачев)は、ブリャンスク近郊の都市で、現在の「カラチェフ」(Карачев)に相当し、ヴァティチの地の中心的な城市である。スヴァトスラフ [C411:G] はこの城市を叔父のスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] から領地(волость)として受け取っており、キエフ公位に就いて以降も、この城市を自らの拠点城市として大切にしており、定期的に往来していた。

このスヴァトスラフ [C411:G] のコラチェフ行きは、1185年4月～5月に行われた(下注192)。

145) この「仕事」(орудие)とは、ヴァティチの地に遠征して、ヴァティチ人からの貢税(掠奪)・徴兵(徴発)をおこなうことを指している。以下の記述によれば、スヴァトスラフ [C411:G] は、この年(1185年)の夏に、オカ川上流のヴァティチの地で徴発した兵士を武装させて、そこから直接ドン川上流域のポロヴェツ人居住区へ掠奪遠征を行うことも計画していたようである(下注192)。

なお、年代記で「自分の仕事」(свое орудие)と言うときは、自分自身や一族の利益のためだけの遠征であり、その略奪品、戦利品を諸公に分配することはないことが含意されている。



その頃<sup>146)</sup>、スヴァトスラフ [C43]の子、オレーグ [C4]の孫<sup>147)</sup>イーゴリ [C432]が、ノヴゴロド〔セヴェルスキイ〕を〔遠征のために〕出発した。4月23日の火曜日<sup>148)</sup>のことだった。

【638】〔イーゴリは〕トルーベチ<sup>149)</sup> (Трубечек)からは兄弟のフセヴォロド [C433]を伴い、リュリスク<sup>150)</sup> (Рыльск)からは自分の甥のスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C4311]を伴い、プチヴリ<sup>151)</sup> (Путивль)からは自分の息子ウラジーミル [C4321]を伴って行った。また、ヤロスラフ [C412]に頼んで、プローホルの孫でアレクセイの子であるオリスチン<sup>152)</sup> (Ольстин)とその配下

146) ここから6693(1185)年の項の記事の最後まで、イーゴリ [C432]一族のポロヴェツ討伐遠征に関する記事は、『イーゴリ軍記』の作品の背景を叙述していることから多くの研究があり、また翻訳もなされている。記事のロシア語訳については[БЛДР 4: С. 230-247]を参照。日本語訳については[木村1957-1979]及び[木村1983: 125-147頁]を参照。

147) イーゴリ [C432]の名を「オレーグの孫」(внукъ Олговъ)と祖父の名を挙げて示すのは年代記では珍しい。『イーゴリ軍記』の「表題」(«Слово о плъку Игоревѣ, Игоря сына Святъславля, внука Ольгова»)にも同様の呼称があり、テキスト上の『軍記』との関連が推察される。([Рыбаков 1971: С. 172]も参照)

148) 1184年の4月23日は確かに火曜日に相当する。フレーブニコフ及びエルモライ写本は「13日」となっているが、その場合には「火曜日」と合致しない。

4月23日は殉教聖人ゲオルギオス(ロシア語でユーリイ)の記念日であり、イーゴリ [C432]の洗礼名が「ユーリイ」と想定されることから[Литвина, Успенский 2006: С. 562-563]、守護聖人の加護を願って、出陣をこの日にしたと考えられる。

149) 「トルーベチ」(Трубечек; Трубеч, Трупец, Трубецк)はノヴゴロド=セヴェルスキイからデスナ川をさらに72kmほど上流に遡った右岸に位置する城市で、現在のトルプチュフスク(Трубчевск)に相当する。フセヴォロド [C433]にとっては、父スヴァトスラフ [C43]から受けた所領としての城市だったのである。[Dimnik 2003: p. 166]

150) 「リュリスク」(Рыльск)はセイム川の中流域右岸に位置する城市で、現在もロシアのクルスク州にある同名の都市。本年代記での最初の言及は1152年に、ユーリイ [D17]がスーズダリ帰る途中、この城市を経由しようとしたとある[イパーチイ年代記(5): 253頁, 注158]。これは、ユーリイの同盟者スヴァトスラフ [C43]が領有していたからだろう。

スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C4311]は、1180年1月に父のオレーグ [C431]が死去した([『イパーチイ年代記(7): 注477])後に、一族の支配城市地の変更があったときに、リュリスクに公座を配置されたのだろう。

151) 「プチヴリ」(Путивль)はセイム川中流域(リュリスクよりは下流)の右岸に位置する城市。イーゴリ [C432]にとって相続領地としての拠点城市であり、この時点では息子のウラジーミル [C4321]に公座を置かせていた。『イーゴリ軍記』に見るように、イーゴリ妃のエフロシニア(ヤロスラヴナ)もここに住んでいた([木村1957-1979, 1983: № 172, 177, 181])。

152) チェルニゴフの軍司令官「オリスチン」については上注128を参照。

のチュルニゴフのコウイ人<sup>153)</sup> (куи черниговские) たちを〔援軍として〕連れていった<sup>154)</sup>。

こうしてかれらは、ゆっくりと進んで行き、〔道中で〕自分たちの従士たちを合流させていった。これは、かれらの馬がすこぶる肥満していたためである<sup>155)</sup>。

彼らがドネツ川<sup>156)</sup> (Донець рѣкы) を指して進みつつあったとき、夕暮れに近いころ、イーゴリ [C432] は空を仰ぎ、太陽があたかも月のように空にかかっているのを見て<sup>157)</sup>、自分の貴族たちと従士たちに言った。「あのしるしがなんであるか、お前たちは分るか」。するとかれらは見上げて、皆が見て、頭を垂れた。家臣たちは言った。「公よ、見よ、あのしるしは、よいしるしではありません」。するとイーゴリ [C432] は言った。「兄弟たちよ、従士たちよ。神の神秘は誰も知ることができない。神はしるしの創造主であり、自らのすべての世界の〔創造主である〕。いま、神がわれらに対して何を創ったのか、善きことなのか、われらにとって悪しきことなのか、われらの見ることになろう<sup>158)</sup>」。

---

153) 「チュルニゴフのコウイ人」(куи черниговские) とは、オリスチンが率いるコウイ人部隊を指している。本来「コウイ人」は、ロシ川流域に居住して、キエフ公に仕えていたチュルク系民族の呼び名だが、ここでは、オリスチンの指揮下にあつて、チュルニゴフ公ヤロスラフ [C412] にいわば傭兵として仕えていた集団を指している。

154) 『ラヴレンチイ年代記』 6694(1186) 年の並行記事には、イーゴリ遠征軍の「オレーグの孫たち」(Олгови внуци) として、「イーゴリ [C432] はベレヤスラヴリでノヴゴロド=セヴェルスキイから来た二人の息子たち〔おそらく、ウラジーミル [C4321] とオレーグ [C4322]〕と、トゥルベチから来た兄弟のフセヴォロド [C433] と、ルイリスクから来たスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C4311]、およびチュエルニゴフの援軍〔コウイ人部隊のこと〕と合流した」[ПСРЛ Т.1 1997: Стб. 397] と記されている。『イパーチイ年代記』の内容と比べると、「ベレヤスラヴリ」まで行って合流したことになるが、これは行路としては不合理であり、『ラヴレンチイ年代記』における誤記と考えられる。

また、イーゴリ [C432] の息子で当時 10 歳ほどだったオレーグ [C4322] の参加が暗示されているが、実際に参加したのかどうか判断が難しい。『イーゴリ軍記』には敗戦の場面で「若い月のオレーグとスヴァトスラフも闇に隠された」[木村 1957-1979, 1983: № 103] という文言があり、10 歳ほどのオレーグ [C4322] とスヴァトスラフ [C4311] の二人を「若い月」(新月) と呼ぶことは自然であること、イーゴリはすでに、前年 1184 年にも、オレーグ [C4322] とスヴァトスラフ [C4311] をキエフ部隊の護送警護の任務に就かせていること(上注 57, 58) などから考えて、オレーグ [C4322] の遠征への参加も想定できるのではないかと。

155) 長途の遠征に備えてあらかじめ馬を肥え太らせており、そのためゆっくりと行軍をしたということ。

156) 「ドネツ川」(Донець рѣкы) は、現在のセヴェルスキイ=ドネツ川の上流域を指している。城砦の名称としても「ドネツ」(Донець) があることから(下注 232)、ここでは「川」(рѣкы) の語が付されているのだろう。

157) これは日蝕のことを指しており、[日食・月食・星食情報データベース]によると、1185 年 5 月 1 日に実際に観測されている。世界標準時 14:40 頃が食の最大で、この地域に該当する現在の東ヨーロッパ標準時では 16:40 頃となる。これは日の入りの約 2 時間前であり、「夕暮れに近いころ」という記述に合っている。この日蝕の最大の食分は 0.7 で、辺りが暗くなるほど欠け具合がはっきりと分かる日蝕だった。

158) このイーゴリの発言は、諸公間の戦争は一種の「神判」であるという考え方にもとづくもので、遠征(戦争)を続ける理由づけになっている。

こう言ってかれ〔イーゴリ〕はドネツ川<sup>159)</sup>を渡河して、オスコール川<sup>160)</sup>(Оскол)に到着した。そして、二日のあいだ、兄弟フセヴォロド[C433]の到着を待った。フセヴォロド[C433]はクルスクから<sup>161)</sup>、別の道を進んで来たのだった。そこから、かれらはサルニツァ川<sup>162)</sup>(Салница)へ向けて出発した。

そこ〔サルニツァ川〕まで来ると、敵情を知るための捕虜を捕える目的でかねて派遣してあった斥候がかれらのもとへ来た。かれらは来て、こう言った。「われらは〔敵の〕戦士たちと遭遇しました。【639】あなた方〔が戦う敵方の〕戦士たちは、武装して〔馬で〕進軍つつあります。そなたたちは、すみやかに進軍するか、さもなくば帰還しなさい。なぜならいまはわれらの〔戦うべき〕時機ではないのだから」。

イーゴリ[C432]は、兄弟たちとともに言った。「もしわれらが戦わずして帰るとなれば、それはわれらにとって死にもまさる辱めとなろう<sup>163)</sup>。むしろ、神がわれらに定めたようにしよう」。こうして合意すると、かれらは夜を徹して進軍した。

---

159) 現在のセヴェルスキイ＝ドネツ川、もしくはその右岸支流のウダ川(Уда)のこと。

160) 「オスコール川」(Оскол)はセヴェルスキイ＝ドネツ川上流域左岸の、現在も同名の支流で、上流ではセヴェルスキイ＝ドネツ川の東側をほぼ並行して流れている。二つの川の間は90～100kmほどの距離がある。

161) 『イーゴリ軍記』の記述によっても、フセヴォロド[C433]は、自領地のトルーベチから、セイム川最上流の城市クルスクに立ち寄って、この地の部隊を率いて、イーゴリ[C432]との待ち合わせ場所に駆けつけたことになっている〔木村 1957-1979, 1983: №№ 19-25〕。

162) 「サリニツァ川」(Салница, Сальница)は、1111年のモノマフ等による「ドン川」へのポロヴェツ討伐遠征の記事にも、ルーシ諸公軍が勝利を取めた場として言及されている(『イパーチイ年代記(1): 247頁, 注25]参照)。この川はルーシ諸公にとっては既知の場所であり、イーゴリにとってこの川が、この度の掠奪遠征の当面の目的地だったのだろう。

その位置については、行軍の距離から見て、セヴェルスキイ＝ドネツ川中流域で現在のイズム(Изюм)近傍の川と推定され、1627年に編集された『大地図の書』(Книга Большому Чертежу)の異版にも、「イズムの下流で右側からサルニツァ川がセヴェルスキイ＝ドネツ川に注いでいる。その下流にはイズメツ川」(А ниже Изюма пала в Донец с правыя стороны река Сальница. А ниже тое Изюмец)[Книга Большому Чертежу: С. 38]との記述があることから、この周辺と考えてよいだろう。ただし、研究者の間でも見解が分かれており、決定的な説はない。(『Энциклопедия СПИ-4: С. 160-167; Энциклопедия СПИ-5: Карта 2]を参照)。

163) 「死にもまさる辱めになろう」(соромъ ны будеть пущеи смерти)の文言の「辱め」(сором)とは、公にとってこれをこうむると自らの社会的(共同体における軍事的な)役割を失うほどの強い「被害」を意味している。971年にスヴァトスラフ[03]がビザンツ軍と戦う際に「欲しようがいなかわれらは迎え撃たねばならない。われらはルーシの地を辱めまい(не посрамм), 屍をさらそう。死ねば辱め(сором)を受けないからである」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 70]と言っているのと同様に、イーゴリ[C432]にとってこの遠征は、自らの公としての地位を賭けた事業だったことがわかる。

翌日、金曜日<sup>164)</sup>になり、昼食の時刻に、かれらはポロヴェツ人の部隊と遭遇した。ポロヴェツ軍は、かれら〔イーゴリ軍〕より先に軍備をととのえていた。かれら〔ポロヴェツ勢〕はおのれの幕舎をあとにして、みずからは老いも若きもひとつに合流して、スユウルリイ川<sup>165)</sup> (Сюурлий) の対岸に布陣していたのである。

他方、かれら〔イーゴリ軍〕は六つの部隊に戦闘態勢を取らせた。中央にイーゴリ [C432] の部隊。右翼に兄弟のフセヴォロド [C433] の部隊。左翼に甥のスヴァトスラフ [C4311] の部隊。〔イーゴリの〕前方に息子ウラジーミル [C4321] の部隊。第二のヤロスラフ [C412] 〔が派遣した〕部隊は、オリステンが率いるコウイ人とともにあった。第三の部隊は最前方の射手であり、すべての公たち〔の部隊〕から選抜された者たちだった。このようにして、〔イーゴリは〕自分の諸部隊に戦闘態勢を取らせた。

そして、イーゴリ [C432] は兄弟たちに言った。「兄弟たちよ。これこそ、われらが求めているのものである。さあ、進もうではないか」。

こうしてかれらは、神におのれの希望をかけつつ、敵に向かって進軍を始めた。

スユウルリイ川の岸へ近づいたとき、ポロヴェツ人の部隊から〔騎馬の〕射手たちが進み出て、矢を一本ずつルーシ人へ向けて射かけ、そのまま駆け去った。そのとき、ルーシ人はまだ【640】スユウルリイ川を渡り切ってはいなかった。川から離れた場所に布陣していたポロヴェツ人の軍勢のポロヴェツ人も駆け去って行った。

スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C4311]、ウラジーミル・イーゴレヴィチ [C4321]、オリステンと配下のコウイ人、そして射手たちは、かれら〔ポロヴェツ人〕の後を追って進撃した。他方、イーゴリ [C432] とフセヴォロド [C433] の二人は、自分の部隊の隊形をくずすことなく、少しだけ進んだ。

ルーシ人の前衛部隊は、〔敵を〕撃破して、捕虜を捕えた。ポロヴェツ人は幕舎をもかまわず逃走した。ルーシ人は幕舎に達すると、さらに多くの捕虜を捕えた。〔ルーシ人の中には〕、夜中になってから捕虜を連れて部隊へと帰還した者もいた。

---

164) 多くの研究者は、この「金曜日」(пятък)を1185年5月10日の金曜日と比定している ([Рыбаков 1971: С. 243-244][Гетманец 1989: С. 43]を参照)。『イーゴリ軍記』では、「その金曜日の朝まだき、ロシアの子らは、ポロヴェツ人の邪教徒の勢を蹴散らし」([木村 1957-1979, 1983: № 37])の文言に対応している。戦闘の第一日目ということになる。

165) イーゴリ遠征軍とポロヴェツ軍の最初の衝突が起こった「スユウルリイ川」(Сюурлий)の場所については、セヴェルスキイ=ドネツ川のなんらかの支流とする考えが多いものの、研究者の間での定説はない。さらに、「スユウルリイ川」(Сюурлий)とカヤラ川(Каяла)(下注180)を同じ川とする見解もある。この名の語源についてもチュルク語起源とするものとされているが、「分流点」など意味については諸説がある [Энциклопедия СПИ-5: С. 89-91; Карта 3]。

全部隊<sup>166)</sup>を集結させると、イーゴリ [C432] は、二人の兄弟〔フセヴォロド [C433] とスヴァトスラフ [C4311]〕と自分の家臣たちに言った。「見よ、神はその力によって、敵にはわれらの勝利をもたらし、われらには名誉と栄光をもたらした。見よ、われらは、ポロヴェツ人の諸隊が多数であることを見た。かれらはその総力を率げてここへ来ていると思われる。今こそ、夜を徹して〔ルーシへの帰還の道を〕進むことにしよう。〔ポロヴェツ人の〕ある者が明日、追撃を始めるとしても、よもや全軍が追撃を始めることはあるまい。〔ポロヴェツ人の〕最良の騎兵だけが川を渡るにすぎないだろう。われら自身のことは神に委ねるまでである」。

すると、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C4311] が、二人の叔父〔イーゴリ [C432] とフセヴォロド [C433]〕にこう言った。「わたしは、ポロヴェツ人を追って、遠くまで行きました。わたしの馬どもは出来ません<sup>167)</sup>。もし、今、出発しなければならないなら、途中の道中で遅れることになるでしょう」。フセヴォロド [C433] もかれ〔スヴァトスラフ [C4311]〕を支持して、ここで夜営すべきだと言った。イーゴリ [C432] は言った。「兄弟たちよ。理由が分かって **【641】**死ぬのなら、それもよかろう」。そして、かれらはそこで夜営した。

さて、土曜日の明け方になると<sup>168)</sup>、ポロヴェツ人の部隊は、あたかも松林のごとく<sup>169)</sup>に進撃を開始した。ルーシの諸公は肝を潰して、誰がどの〔部隊〕に向かって行くか知らなかった。かれら〔敵〕は数え切れぬほど多かったからである<sup>170)</sup>。

イーゴリ [C432] は言った。「見よ、どうやらわれらは、ポロヴェツ全土〔の軍〕をみずから

166) 原文はすべての写本で половци вси すなわち、「すべてのポロヴェツ人」だが、文脈から見て不自然であることから、ここは полци вси「全部隊」と訂正した。

167) この日（金曜日）に敵を追って長く馬を走らせたために、馬が疲れており、撤退のために夜を徹して馬を走らせることは「出来ない」ということ。

168) 上からの計算では（上注 164）、1185 年 5 月 11 日土曜日に相当し、『イーゴリ軍記』では「その明るく日の朝まだき、血の色の朝焼けは夜明けを告げた」〔木村 1957-1979, 1983: №43〕に対応している。

169) この「松林のように」（акъ боровѣ）は、ポロヴェツ人が大軍であることをあらわす年代記の定型表現で、1103 年のステニ川の合戦（〔ПСРЛ Т. 1 1997: Стб. 278〕〔ロシア原初年代記：301 頁〕）、1111 年のモノマフ等のドン川遠征（〔イパーチイ年代記 (1): 243 頁〕の記事の中でも使われている。

170) 『イーゴリ軍記』に「ポロヴェツ勢はいきおいづいて。ドン川より、海より寄せ来たる。告げる軍旗の声はしきり。敵はあなたより、こなたより、ルーシ勢をひしと取り囲んだ」〔木村 1957-1979, 1983: № 50-51〕の部分に対応している。

集めてしまったようだ。コンチャクとコザ<sup>171)</sup> (Коза), ブルノヴィチ<sup>172)</sup> 族 (Бурнович) も, トクソビチ<sup>173)</sup> 族 (Токсобич) も, コロビチ族 (Колобич) も, エテビチ族 (Етебич) も, テルトウロビチ族 (Терьтробич) もだ。かれら〔諸公〕は話し合って, みなは馬から下りた。戦いながら, ドネツ川まで到達しようとしたのである。かれらはこう言っていた。「もしわれらが自分たちだけ逃げ出して, 下層の民たち<sup>174)</sup> を置きざりにするなら, われらは神から罪とされることになる。かれらを〔捕虜として〕引き渡した〔ことによって〕。行軍しようではないか。死ぬか, もしくは全員がともに生きのびるかどちらかだ」。

こう言うと, 全員が馬から下りて, 戦いながら行軍した。

〔戦いの中で〕, 神の定めによって, イーゴリ [C432] は片手を傷つけられ, 左手が利かなくなった。かれの部隊には大いなる悲しみが起こった。かれらは〔立派な〕軍司令官<sup>175)</sup> を擁してたが, その者は以前に傷を負っていた。

こうしてかれらは, その日は夕方まではげしく戦い, ルーシの諸隊では多くの負傷者と死者が出た。土曜日の夜になっても, かれらは戦いつつ進軍した。

日曜日の明け方<sup>176)</sup>, 部隊の中の【642】コウイ人たちが, 混乱に陥って逃げ出し始めた。その時, イーゴリ [C432] は乗馬していた。負傷していたからである。かれ〔イーゴリ〕は, かれら〔コウイ人たち〕を残りの部隊のところに引き戻そうとして, かれらの部隊のほうへ行った。かれは, 自分が味方から遠く離れてしまったことに気づいて, 兜を脱ぐと, 本隊へ引き返そうと馬

---

171) 「コザ」(Коза)について, プレトニョヴァは, これを『イーゴリ軍記』[木村 1957-1979, 1983: №.200-207]にコンチャクと並んで登場する「グザク (Гзак)」「(Гзак, Гза)」と同一人物としている [Плетнева 1990: С. 163]。沿ドニエプルのポロヴェツ部族の最も有力な部族な首長の一人。なお, 以下に見るように, この戦いにはコザの息子ロマン (Роман) も参加していた (下注 187 参照)。

172) 「ブルノヴィチ族」(Бурнович) は, 「ブルチェヴィチ族」(Бурчевич) と表記されることもあり, ドニエプル左岸に居住する有力なポロヴェツ部族の名前である。ボニャク (下注 206) が首長だった時代には, このブルチェヴィチ族は強勢を振るっていた。

173) 以下に, -обич, -ебич の語尾をもつ名前が続くが, 古チュルク語で -оба (еб-, аб-) は「家」「家族」を意味することから, これらは部族名を示している。これらの部族の者たちが, 首長ともども参戦したということ。

なお, 「トクソビチ族」(Токсобич) については, 1147 年の記事で, スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] のもとに支援に駆けつけたポロヴェツ部族として「トクソビチ族」が言及されている。[イパーチ年代記 (3): 342 頁, 注 80]

174) 「下層の民たち」は原文では черныя люди で, 公配下の従士 (дружинники) とは事なり, 都市民もしくは農民から徴用されて遠征に従軍した兵たちのこと。基本的には歩兵であり装備も十分ではなかった [Древняя Русь 2015: С. 885]。

175) この「軍司令官」(воевода) はイーゴリのことを指している。イーゴリが捕虜となっていたときに, ポロヴェツ人がかれの「軍司令官の資質」(воеводство) に「恥じ入って」(一目置いて) いたという記述がある (下注 221)。

176) 上からの計算では (上注 164), 1185 年 5 月 12 日の日曜日に相当する。



を駆った。これは、〔敗走して〕逃げていった者たちが、公〔イーゴリ〕に気がついて、引き返すようにとの〔合図だった〕。しかしだれも引き返してくる者はなかった。ただミハルコ・ユーリエヴィチ<sup>177)</sup> (Михалко Гюрговичъ) が公の姿を認めて引き返したただけであった。

上級〔従士のなかで〕でコウイ人と一緒に混乱して〔逃げた〕者はいなかった。ただ、普通の〔従士〕が少数と、貴族の下級従士の何人かが〔逃げた〕<sup>178)</sup>。上級〔従士〕たちは、徒歩の隊列をとって戦いつつ進軍し、その中でもフセヴォロド [C433] が少なからぬ勇気を示した。

イーゴリ [C432] が、自分の他の部隊に近づいたとき、〔敵のポロヴェツ人が〕行く手を遮った。そして、〔イーゴリの〕部隊から、矢が届く距離のところ、かれ〔イーゴリ〕を捕えた。拘束されたイーゴリ [C432] は、おのれの兄弟フセヴォロド [C433] がはげしく戦っているのを見て、心の中でおのれの死を願った。自分の兄弟が斃れるのを見たくなかったのである。

フセヴォロド [C433] は、はげしく戦ったために、手に武器がいくつあっても足りぬほどだった。かれらは、湖のまわりを迂回するようにして戦った。

こうして、聖なる復活の日〔日曜日〕<sup>179)</sup> に、**[643]** 主はわれらにその怒りをもたらししたのである。〔主は〕われらに、喜びの代わりに悲しみをもたらし、祝宴の代わりにカヤラ川<sup>180)</sup> (рѣка Каяла) での嘆きをもたらししたのである。

イーゴリ [C432] はこう言ったとのことである。「わしは、わが主なる神に対して犯した自分の罪を思い出した。キリスト教の地において、多くの殺人と流血を行なったことを。なぜなら、わしはキリスト教徒を容赦せず、ベレヤスラヴリ近郊でグレーボフ (Глѣбов) の城市を略取したのだから<sup>181)</sup>。あのとき、罪なきキリスト教徒たちに少なからぬ悪をなした。父親はおのれの

177) 「ミハルコ・ユーリエヴィチ」(Михалко Гюрговичъ) について詳細は不明だが、イーゴリ配下の貴族と推定される。

178) 「上級〔従士〕」(добрии), 「普通の〔従士〕」(простыи), 「貴族の下級従士」(отроки боярские) は、イーゴリ遠征軍を構成する戦士の階級を示している。最初の二つは公の配下の従士の階級で、最後は貴族配下の従士であり、この三つの階級は騎兵の従士たち(дружинники) だったと考えられる。これ以外に、遠征部隊は、都市民から徴用した歩兵の「下層民」(черные люди) を含んでいた(上注 174)。

179) 日曜日の言い換えで、1185年5月12日に相当する(上注 176)。

180) イーゴリ遠征軍敗北の場所としてのカヤラ川(рѣка Каяла) は、『イーゴリ軍記』に何度も言及されているが[木村 1957-1979, 1983: № 46, 63, 71, 90, 104, 170], その場所については研究者の考える遠征路によって様々な川が同定されており定説はない。語源学の観点からは、これを каяти〔悔いる〕等の音の共通性から象徴性を担わされた架空の名称と解釈する研究があるのに対して、チュルク語にその起源を求める立場もある[Энциклопедия СПИ-3: С. 31-35; Энциклопедия СПИ-5: Карта 4]。

181) 1184年春にイーゴリ [C432] がヒイリヤ川遠征を行い、掠奪の成果があがらず、その遠征の帰路に、ベレヤスラヴリ公ウラジミール・グレーボヴィチ [D7182] の所領である城市グレーボフ(Глѣбов) (ベレヤスラヴリ北方 15km ほどのトルベジ川右岸にある現在のブルストロミ(Пристром) 村に相当) を襲撃して掠奪したことを指している。

子供から、兄弟は兄弟から、友はその友から、妻はその夫から、娘はその母から、女友達はその女友達から引き離された。あの時は、捕虜の境遇と悲哀によってあらゆることが混乱していた。生者は死者を羨み、死者は、自分たちが聖なる殉教者のように、火によって現世の贖いを受けたことを喜んだ。老人たちは迫害を受け、若者たち無残で無慈悲な傷を負い、男たち斬られて体を切り裂かれ、女たちは凌辱された。そして、これらすべてを行なったのは、このわしなのだ」。

イーゴリ [C432] はさらに言った。「わしは生きるに値しない。見よ、わしは今、わが主なる神から報復を受けているのが分かる。いま、わが愛する兄弟〔フセヴォロド [C433]〕はどこにいるのだ。わが兄弟の子〔スヴァトスラフ [C4311]〕はいまどこにいるのだ。実のわが子〔ウラジーミル [C4321]〕はどこにいるのだ。側近の貴族たちはどこにいるのだ。勇猛果敢な家臣たちはどこにいるのだ。武装した陣容はどこにあるのか。馬や価値ある武器はどこにあるのか。**【644】** わしはこれらすべてを失った。主〔なる神〕はわしを縛って、無法の者どもの手に渡したのだ。〈主はわしの無法に応じて報いをなし、わしの悪に従って報いたのだ<sup>182)</sup>〉。そして〈今日、わしの罪がわしの頭上にふりかかった<sup>183)</sup>〉。〈真実と正義の主は、これを正しく裁いた<sup>184)</sup>〉。わしは、もはや、生者たちと運命をとにもすることはないだろう。見よ、今わしは、他の者たちが殉教の冠を受けているのを見ているのだから。罪のあるわしひとりが、これらすべてのゆえに苦しみを受けないなどあり得ない。しかし、主宰よ、わが主なる神よ、〈最後までわしを見捨てるなかれ<sup>185)</sup>〉。しかし、主よ汝の御心のとおり、われらに、汝の僕たちに憐れみを垂れ給え」。

そのとき、戦いは終わって、〔ポロヴェツ人の〕部隊は散開し、それぞれの移動幕舎へと向かった。イーゴリ [C432] は、タルゴル (Таргол) の家臣チルブーク (Чилбук) という者に捕らえられた<sup>186)</sup>。弟のフセヴォロド [C433] は、グザの子ロマン<sup>187)</sup> (Роман Гзичь) に捕らえられた。スヴァ

---

182) 『詩篇』 102 (邦訳 103) :9-10 からの改変した引用。

183) 『詩篇』 7:17 の語句を改変した引用。

184) 『詩篇』 118 (邦訳 119) :13 及び 7 からの改変した引用。

185) 『詩篇』 26 (邦訳 27) :9、もしくは 50 (邦訳 51) :13 からの引用。

186) 「タルゴルの家臣」 (Тарголове мужь) は「タルゴロフの」 (Тарголов) とも解釈でき、ポロヴェツ人の部族長の名と思われるが詳細は不明。チルブーク (Чилбук) はその部族の高官で、直接イーゴリを捕虜とした人物の名。

187) 「グザの子ロマン」 (Роман Гзичь) のグザ (Гза) は、先にイーゴリが自ら言及している、「コザ・ブルノヴィチ」 (Ко́за Бу́рнович) と同一人物と推定できる (上注 172 参照) [Литвина, Успенский 2013: С. 147-148]。この「ブルノヴィチ」 (Бу́рнович) は、おそらく「ブルチェヴィチ」 (Бу́рчевич) の表記上のヴァリエントであり、グザは、ブルチェヴィチ族に属していたと考えられる (下注 188 を参照)。

トスラフ・オリゴヴィチ [C4311] は、ヴォブルチェヴィチ族<sup>188)</sup> (Вобурчевичи) のエルデチュク (Елдечюк) に〔捕らえられた〕。ウラジーミル [C4321] はウラシェヴィチ族 (Улашевичи) のコプチ (Копти)<sup>189)</sup>〔に捕らえられた〕。そのとき、戦地において、コンチャク (Кончак) が、姻戚の<sup>190)</sup> イーゴリ [C432] の身請けを行った。〔イーゴリが〕 負傷していたからである。

多くの〔遠征軍の〕 家来のうち、偶然の幸運によって逃れて救われた者はごくわずかだった。逃走することができなかったのである。なぜなら、ポロヴェツ人の諸部隊が、あたかも壁のように、かれらを包囲したのだから。ルーシ人で逃れることができたのは 15 人の家臣にすぎず、コウイ人〔で逃れたのは〕 さらに少なく、それ以外の者は湖<sup>191)</sup> で溺れ死んだ。

ちょうどその頃、大公 **[645]** スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、コラチェフ (Корачев) へ行って、〔オカ川〕 上流域から兵の徴集を行っていた<sup>192)</sup>。これは、この年の夏の

188) 「ヴォブルチェヴィチ族」(Вобурчевичи) は、ポロヴェツ人部族ブルチェヴィチ族 (Бурчевичи) のこと。ブルチェヴィチ族は、ドニエプル川中流域左岸支流のサマラ川 (Самара) 周辺に展開していた部族で、沿ドニエプルのポロヴェツ連合体の中では最強の集団だった。「ブルチェヴィチ」の語はチュルク語でオオカミを意味し、オオカミをトーテムとする集団だったと考えられる。なお、大いなる侯と称されたボニャク (Боняк) もかつてこの一族の首領だった (注 206 参照) [Плетнева 1990: С. 102]。

189) 「ウラシェヴィチ族」(Улашевичи) は、ブリツァクによれば、エジプト、マルムーク朝のアラビア語文献で Unaj-ylī > \*Uljaj-ylī と綴られる部族に相当し、サマラ川の上流域 (いわゆる「青い森」) を根拠地にしていたと考えられる [Pritsak 1981: p. VIII-1623]。なお、「コプチ」(Копти) はその部族の首長もしくは高官だろう。

190) 「姻戚のイーゴリ」(сват Игорь) とは、コンチャクの娘とイーゴリの息子ウラジーミル [C4321] の結婚したことを踏まえた表現。本年代記 1187 年の記事に、「ウラジーミル [C4321] が〔妻の〕コンチャクの娘と一緒にポロヴェツ人のところから戻って来た。そして、イーゴリ [C432] は自分の息子〔ウラジーミル [C4321]〕のために結婚式を催し、かれとその子供ともども結婚式を行った」とある (下注 303 参照)。ただし、正確な結婚のタイミングは明らかにされていない。ウラジーミル [C4321] がポロヴェツ人の地で捕虜になっていた間にこの結婚が成立したと考えるのが最も自然であるが、この時点ではまだ結婚には至っていなかったとしても、あとの状況からさかのぼって「姻戚」としたのだろう。

191) この「湖」は原文では「海」を意味する море となっている。戦闘が行われている付近は内陸であり、海が存在していたとは考えられない。先に、湖 (озеро) の周りで戦闘していたという記述があるので、この湖のことを海と表現したと考えられる。ウクライナ語訳の注は、このような表現は聖書 ([ヨハネ福音書] 6:16 - 25) にもあることを指摘している [Літопис руський 1989: С. 340]。

192) スヴァトスラフ [C411:G] のコラチェフ行きについては、上注 144, 145 を参照。

あいだを通じて、ドン川のポロヴェツ人を討伐することを、予定していたのである<sup>193)</sup>。

スヴァトスラフ [C411:G] が〔コラチェフから〕戻って、ノヴゴロド・セヴェルスキイに滞在していたとき、自分の兄弟たちが、かれ〔スヴァトスラフ〕に内緒でポロヴェツ人討伐に向かっているとの報を聞いた。かれは、これを気に入らなかった。

スヴァトスラフ [C411:G] は、船で行き、チェルニゴフに到着した。その時、ベロヴォロド・プロソヴィチ (Бъловолод Просович) が急ぎやって来て<sup>194)</sup>、ポロヴェツ人のところで起こったことをスヴァトスラフ [C411:G] に告げた。スヴァトスラフ [C411:G] はこれを聞くと、ひどく嘆息して、自分の涙を拭ってこう言った。「ああ、わが愛する兄弟たちよ、子たちよ、ルーシの地の家臣たちよ、神はわしに異教徒たちの力を削ぐことをゆるした<sup>195)</sup>。ところが、かれらは若気のいたりを抑えることができず、〔ポロヴェツ人を引き入れる〕ルーシの地への門を開いてしまった<sup>196)</sup>。すべては、神の御心のままに。イーゴリ [C432] について、前から残念だと思っていたが、今また、わが兄弟のイーゴリ [C432] にをひどく残念に思う」。

その後、スヴァトスラフ [C411:G] は、自分の息子のオレーグ<sup>197)</sup> [G5] とウラジーミル<sup>198)</sup> [G2] をセイム川流域に派遣した。それは、セイム川河岸の諸城市で混乱が起き<sup>199)</sup>、大いなる悲しみ

---

193) スヴァトスラフ [C411:G] は、以下に見るように (下注 200)、スモレンスクのダヴィド [J3] と同盟して、ドン川上流域に居住するポロヴェツ人部族への大規模な掠奪遠征を計画していたようである。この地域には、イーゴリの遠征先 (セヴェルスキイ = ドネツ川中流域) とは別に、ポロヴェツ人の部族が居住しており、1146 年の記事によれば、リャザン公ロスチスラフ [C54] が、エリトック (Ельтук) という名のこの地の首長のもとに逃亡先を求めている ([イパーチイ年代記 (3) : 337 頁, 注 49] 参照)。この頃にも、この首長エリトックの末裔の部族 (「エリトック族」(Ельтуковичи)) がこの地に展開していたと考えられる ([Плетнева 1990: С. 97, 99-101])。

194) この「ベロヴォロド・プロソヴィチ」(Бъловолод Просович) は、スヴァトスラフ [C411:G] に仕える貴族だろう。イーゴリ遠征軍の壊滅の報を受けて、キエフからチェルニゴフにいるスヴァトスラフのもとへ急行したのではないか。また、可能性は低いですが、イーゴリ [C432] 配下の貴族で、戦場から直接逃げ帰って、スヴァトスラフに報告したとも考えることができる。

195) これは、1185 年春にスヴァトスラフが諸公軍を集めて組織し、3 月 1 日に勝利を得たホルロ川への遠征のことを指している (上注 134 参照)。

196) 「門を開く」(отвориша ворота) とは、「防衛を放棄する」「降伏する」を意味する比喩的な表現。

197) オレーグ [G5] は、チェルニゴフ公領の最北東の辺境の城市「ロパスナ」(Лопасна) に所領を持っていた。

198) ウラジーミル [G2] は、当時、父親スヴァトスラフ [C411:G] のいるキエフに身を置いていたと思われる (上注 9 を参照)。

199) セイム川河岸の諸城市 (города Посемьские) とは、プチプリ (Путивль)、ルイリスク (Рыльск)、クルスク (Курск) などを指していると考えられる。これらの城市は、イーゴリの遠征軍に参加して捕虜となった諸公の支配領地であり (上注 150, 151, 161 を参照)、支配公が不在となったために、城市民たちがポロヴェツ人の来襲の危機を感じて、パニックが起こったと考えられるだろう (下注 202, 209 も参照)。

の悲惨が起こったからだった。このような事態は、セイム川流域やノヴゴロド＝セヴェルスキイ地方、チェルニゴフの領国の全土において、かつて無かったことだった。諸公が捕らえられ、従士たちが捕らえられ、打ち殺され、あたかも網にかかった〔魚〕のように騒然となっていた。**【646】** 諸城市は反乱を起こし、その時、自らの隣人に慈悲をかけることがなく、多くの者は自らの魂を大切にせず、自分の〔城市の〕諸公に不満を抱いていた。

その後、スヴァトスラフ [C411:G] は、スモレンスクにいるダヴィド [J3] のもとに使者を遣って言った。「かつてわれらは、ポロヴェツ人の討伐に行き、夏をドン川で過ごすという話をした<sup>200)</sup>。見よ、今、ポロヴェツ人はイーゴリ [C432] とその弟〔フセヴォロド [C433]〕、息子〔ウラジーミル [C4321]〕を撃ち破った。兄弟よ、来たれ。ルーシの地を守ろうではないか」。

ダヴィド [J3] は、ドニエプルを下って〔キエフへ〕やって来た。他の援軍もやって来て、トレポリ (Треполь) で陣を張った<sup>201)</sup>。

ヤロスラフ [C412] は、チェルニゴフで自分の兵を集めて、陣を張っていた<sup>202)</sup>。

異教徒のポロヴェツ人は、イーゴリ [C432] とその兄弟たちを撃ち破り、ひどく傲慢になって、ルーシの地を襲うためにすべての部族を集めた<sup>203)</sup>。

---

200) 上注 193 を参照。

201) トレポリ (Треполь) はキエフから南へ 50km ほどの城砦であり、ステップ地帯からキエフ方面へと攻め込んでくるポロヴェツ人からキエフを防衛することを想定した布陣である。

なお、『ラヴレンチイ年代記』6694(1186)年のイーゴリの遠征に関する記事では、「スヴァトスラフ公 [C411:G] は自分の息子たちとすべての諸公を呼び寄せる使者を發した。そして、〔息子たちと諸公は〕かれのもとにキエフへ集まり、カーネフ (Канев) へ進軍した」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 399] と記されている。カーネフは、トレポリからさらに 70km ほどドニエプルを下った地点にある城砦である。

202) ヤロスラフ [C412] はチェルニゴフの支配公であり、セイム川からデスナ川に沿って来襲してくるポロヴェツ人の攻撃を想定して布陣したのである。実際に、まもなくグザが率いるポロヴェツ人遠征部隊がこの地方の襲撃を行った (下注 209)。

203) 『ラヴレンチイ年代記』の 6649(1186)年の記事には、イーゴリ軍壊滅直後に、「一人の商人が〔商業路を〕進んでいた。ポロヴェツ人たちはかれに次のように〔ルーシ諸公に〕伝えるように命じた『そなたたちは、自分の兄弟たちを〔連れ戻す〕ために来られよ、あるいは、われらが、自分たちの兄弟たちを〔連れ戻す〕ために、そなたたちのもとに行こうか』」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 398] として、支配層レベルの捕虜たちの交換を提案したことが述べられている。『イパーチイ年代記』にその記述がないことから見て、この交渉は成立しなかったのだろう。

かれらの間に諍いが起こった<sup>204)</sup>。それは、コンチャク (Кончак) がこう言ったからである。「キエフの方面へ進軍しよう。そこは、かつてわれらの兄弟たち<sup>205)</sup>と、われらの大いなる侯ボニャク<sup>206)</sup> (Боняк) が撃たれたところである<sup>207)</sup>」。一方、グザ<sup>208)</sup> (Кза) はこう言った。「セიმ川へ進軍しよう。そこでは、女や子供たちが残っている。われらが捕虜を集める準備はできている、危険を冒さず諸城市を占領しよう<sup>209)</sup>」。

こうして、かれらは2つの方面に分かれた。

コンチャクはベレヤスラヴリに向かって進軍し、この城市を包囲すると、終日戦いを行った。ウラジーミル・グレーボヴィチ [D1782] はベレヤスラヴリの公だった。かれは果敢であり、激

---

204) この「諍い」(котора)は、以下にあるようにコンチャクとグザという、ポロヴェツ部族の二人の首長の進軍の方針の違いからきたものである。コンチャクとグザは『イーゴリ軍記』の中でも、イーゴリ軍の敵手としてひと組となって言及されており [木村 1957-1979, 1983: № 42, 200-208], イーゴリ軍を撃ち破ったポロヴェツ軍の主要な指揮官であったことは疑いない。

205) キエフ方面で撃たれたコンチャクにとつての「われらの兄弟たち」(братья наша)とは、1181年夏に、イーゴリ [C432] とコンチャク、コビャク等のポロヴェツ人部隊が連合して、リューリク [J2] 一族の部隊と戦い、イーゴリ=ポロヴェツ連合軍がチェルトルイ川で敗北して、コンチャクの兄弟が殺され、多くのポロヴェツ人が捕虜にとられた事件 (チェルトルイ川の戦い) [イパーチイ年代記 (7): 263 頁, 注 569] が考慮されているのではないか。

206) 「われらの大いなる侯ボニャク」(великий князь наш Боняк)は、『原初年代記』6604(1096)年に最初に言及されているドニエプル下流域を拠点とするポロヴェツ部族 (ブルチェヴィチ族 (Бурчевичи)) の首長で、年代記及び『モノマフの教訓』には何度も登場している。『原初年代記』1097年の記事では、ダヴィド [F1] と同盟してハンガリー軍を撃ち破っている。このとき、勝利を予言して、小勢で敵の大軍を撃ち破ったエピソードが記されており [ПСРЛ Т1, 1997: Стб., 270-271], かれのことはポロヴェツ人の間でも伝説的な首長として伝えられていたと考えられる。

207) このコンチャクの発言は、『原初年代記』6615(1107)年の項にある、ボニャク及びシャルカンらポロヴェツ首長が率いる軍隊がスーラ川の城市ルーベン (Лубен) まで進攻し、スヴァトポルク [B3], ウラジーミル・モノマフ [D1], オレーグ [C4] 等の諸公軍と対決して敗走した事件を指している [ПСРЛ Т1, 1997: Стб., 281-282]。この記事から見ると、ボニャクは1107年のこの戦いで戦死した可能性もある。

そのことから、「キエフの方面 (на Киевскую сторону) へ進軍」するとは、セヴェルスキイ=ドネツ中流域からほぼ真西に向かって、ルタヴァ (Лтава) - ベレヤスラヴリ - キエフへと「ルーシの地」を進攻して掠奪を行う遠征を、コンチャクは主張したのである。コンチャクが、グザの「セიმ川流域」への遠征の提案を斥けた背景には、コンチャクがイーゴリと婚姻同盟を結んでいた (予定だった) ことがあるだろう。

208) 上注 187 を参照。

209) セйм川沿いの諸都市の支配公は敗北して捕虜となったため (上注 199 参照), 当然防衛が手薄となることから、グザは、これらの諸都市への掠奪遠征を提案したのである。遠征の直接の目標は、以下にあるようにプチヴリの城市だった (下注 219)。

なお、1168年に当時ノヴゴロド=セヴェルスキイ公だったオレーグ・スヴァトスラヴィチ [C431] が、首長コザ (Коза) が率いる移動幕舎を襲って掠奪した [イパーチイ年代記 (6): 261 頁, 注 426] が、グザをこの「コザ」と同一人物として、グザの行動に復讐を読み取る説もあるが [ロビンソン 1988: С. 150], 根拠に乏しい。



しく戦った。かれは、【647】 城市から〔馬で〕飛び出すと、かれら〔ポロヴェツ人たち〕に向かって疾駆した。かれの後をあえて続く従士は少なかった。かれ〔ウラジーミル〕は、かれら〔ポロヴェツ人〕と激しく戦った。多くのポロヴェツ人が、かれを取り囲んだ。その時、他の者たちは、自分たちの公〔ウラジーミル [D1782]〕が激しく戦っているのを見て、城市から飛び出して来た。そして、自分たちの公を奪い返したが、公は三創の槍傷を負っていた。この善きウラジーミル [D1782] は、傷を負い、息も絶え絶えになって自分の城市へ入った<sup>210)</sup>。かれは、自らの父の地<sup>211)</sup> のために勇敢に汗を拭った<sup>212)</sup> のだった。

ウラジーミル [D1782] は、スヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2] とダヴィド [J3] に使者を派遣して、かれらに言った。「見よ、ポロヴェツ人がわしのところにいる、助けてくれ」。スヴァトスラフ [C411:G] は、ダヴィド [J3] に使者を遣った。そのとき、ダヴィド [J3] はスモレンスク人を率いて、トレボリに陣を張っていた<sup>213)</sup>。

スモレンスク人たちはさっそく民会を開いて、こう言った。「われらは、もし戦いになったら戦うつもりで、キエフにまでやって来た。はたして、われらは他の戦いを求めるべきだろうか。いや、できない。すでに疲れ切っているのだから」。

スヴァトスラフ [C411:G] は、リューリク [J2] と他の援軍とともに、ドニエプル川を渡渉して、ポロヴェツ人に対抗した<sup>214)</sup>。他方、ダヴィド [J3] は、スモレンスク人を率いて帰国した。

210) イーゴリ [C432] のポロヴェツ討伐遠征とその後のポロヴェツ人の反攻については、『ラヴレンチイ年代記』6694(1186)年の記事にも記述があるが、『イパーチイ年代記』の記事に比べて分量ははるかに少なく、またテキストの上でもほとんど同じものはない。ただし、この個所の、ベレヤスラヴリを丸一日攻撃したこと、ウラジーミル [D1782] が小勢を率いて出撃戦を敢行し、三創の槍傷を負ったこと、城市民がこれを見て、公を救出したこと、などの記述はテキストがほぼ一致しており、共通資料の存在が想定できる。

211) 「父の地」(отчина)については、確かにベレヤスラヴリは、ウラジーミル [D1782] の父や父祖の代からかれの一族の領地だった。1149年に、祖父のユーリイ手長公 [D17] は、ベレヤスラヴリの領有を狙って軍事行動を起こしており、ルーシの地の支配、ひいてはキエフ大公位の足掛かりとしてベレヤスラヴリを考えていたふしがあった〔『イパーチイ年代記 (3)』, 註240〕。1155年にユーリイ [D17] がキエフ大公の座に就いたときに、その息子(ウラジーミルの父) グレーブ [D178] にベレヤスラヴリが与えられた。その後、アンドレイ [D173] の息子ムスチスラフ [D1732] が1169年にキエフの奪取に成功した際に、グレーブ [D178] はキエフ大公に就任し、代わりにベレヤスラヴリの公座には、ウラジーミル [D1782] が就いている。

212) 「勇敢に汗を拭った」(утре мужественного пота своего) (フレブニコフ写本の読みを採用した) とは、軍事的な労苦の末に功績をあげることを意味する定型表現。

213) ダヴィドのトレボリ布陣については前注201を参照。

214) スヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2] は、部隊を編成すると、トレボリ近くのヴィティチェフ(Витичев)の渡渉地点もしくはベレヤスラヴリ対岸のザループ(Заруб)の渡渉地点でドニエプル川を渡渉して左岸に出ると、ポロヴェツ人襲来に対抗するためにベレヤスラヴリに進軍する構えを見せたということ。

ポロヴェツ人はこのことを聞くと、ペレヤスラヴリから引き上げて帰国した。かれらはその帰途にリムモフ<sup>215)</sup> (Римовъ) に攻撃を仕掛けた。リムモフの住民は城市に立て籠もり、胸壁<sup>216)</sup> が上がって〔戦った〕。神の定めによって、二つの【648】城塔が人をのせたまま襲撃者の頭上に崩れ落ちた。他の住民たちは恐れおののいた。何人かの住民は城市を出て戦った。かれらはリムモフの近くの沼地を歩き、捕虜になることを免れた。城内に残った者たちは、すべて捕らえられた。

ウラジーミル [D1782] はスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] とリューリク・ロスチスラヴィチ [J2] に使者を派遣して、かれを助けてくれるよう求めた。しかし、かれらは遅きに失した。それは、ダヴィド [J3] とスモレンスク人を待っていたためであった。こうして、ルーシの諸公は遅れてきたために、かれら〔ポロヴェツ人〕に追いつくことはできなかった。ポロヴェツ人はリムモフの城市を占領すると、捕虜を連れて帰国した<sup>217)</sup>。

諸公〔スヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2]〕は、自分の郷国へと戻った。かれらは自分の息子であるウラジーミル・グレーボヴィチ [D1782] を伴っていたが、悲しかった。なぜなら、かれ〔ウラジーミル〕は瀕死の重傷を負っていたからであり、キリスト教徒たちが異教徒の捕虜になったからである。

見よ、神はわれらの罪のゆえにわれらを罰し、われらのところに異教徒たちを引き入れた。それは、神が異教徒たちに情けをかけたのではなく、われらを罰して、われらを悔い改めに導くためである。われらが自らの悪行から解放されるようにと。異教徒の来襲という罰を下して、われらがへりくだって、悪行の道から目を醒ますためである<sup>218)</sup>。

---

215) 「リムモフ」(Римовъ)は『イーゴリ軍記』にも「リム」(Рим)として言及されており[木村 1957-1979, 1983: № 121]、その所在地については諸説が出されているが、現在の通説では、ペレヤスラヴリから南東に約 92km 離れた、スーラ川右岸の河口近く(プーリムカ川河口)の城市。現在のヴェリカ・プーリムカ村(Велика Бурімка)付近にあったとされている。[Куза 1996: С. 191][Нерознак 1983: С. 147][Слово сб. 1947: С. 76]。当時は、境界地帯の城砦としてペレヤスラヴリ公領の住民が植民していた。ステップ地帯からペレヤスラヴリへの遠征の「通り道」に立地している。

216) 胸壁(зобороло)とは城市の周囲の土塁(もしくは城壁そのもの)の上に築かれた木製の防柵(塀)のことで、内側は廻廊のようになっており、そこから包囲軍に矢を射かけることができた。

217) 「ウラジーミル」で始まるこの段落は、その前の段落と内容がダブっている。同じ事件についての、異なる資料を用いたことによると考えられる。([Рыбаков 1971: С. 173-174])

218) この段落の教訓的な文言は、1177年の記事にもほぼ同様のものを見ることができる([イパーチイ年代記(7): 232 頁]参照)。この文言は、リューリク [J2] 本年代記集成の最終的な編集者の手になる可能性が高い。

さて、別のポロヴェツ人たちは別の方面を<sup>219)</sup>【649】プチヴリに向けて進軍していた<sup>220)</sup>。グザは大軍を引き連れて、〔セウム川流域の〕領地を掠奪し、村を焼いた。かれらは、プチヴリの外廊の防柵を焼くと、引き返して行った。

イーゴリ・スヴァトスラヴィチ [C432] は、その年はポロヴェツ人のもとにいた。かれは、こう言っていた。「主宰なる神よ、わたしは、あなたの命令によって、然るべく敗北を甘受しました。決して異教徒どもの猛勇があなたの僕たちの軍勢を撃ち破ったではありません。わたし自身の悪行ゆえに、いまの自分のようにあらゆる苦難を受け取るようになったことは、残念には思いません」。

ポロヴェツ人は、かれ〔イーゴリ〕の軍司令官としての資質に恥じ入っているかのよう<sup>221)</sup>に、かれを監禁しなかった。そして、同族の息子たちから15人を、名士の息子たちから5人を、併せて20人を、かれの監視人としてつけたが、かれを自由に行動させた。かれは行きたいところへ行き、鷹狩りを行い、自分の従者を五、六人持っていて、かれらと馬を乗り回していた。

監視人たちもかれの言うことを聴き、かれに敬意を表し、何か言いつけられれば、口答えせずに命じられたことを為した。聖なる奉事を執り行うために、ルーシから司祭が連れてこられた。〔イーゴリは〕神の計らいを知ることはできなかったが、〔神の定めたことを〕行い、かの地で長く過ごした<sup>222)</sup>。しかし、主なる神はキリスト教徒の祈りを〔聞き入れて〕かれを解放したのである。かれのことを多くの者たちが悲しみ、かれのために自らの涙を流したのだった。

【650】かれ〔イーゴリ〕がポロヴェツ人のところにいたとき、そこにポロヴェツ人の生まれでラヴォル<sup>223)</sup>(Лаворъ)という名の男がいた。かれは、善き考えを抱いて、「あなたとともにルー

219) 遠征路について、コンチャクが「キエフの方面」(на Киевскую сторону)を主張したのに対して(上注204)、グザは「別の方面」(по иной сторонѣ)、すなわちセウム川流域への遠征を行ったことを指している。

220) スーラ川流域に遠征することを主張したグザ配下の遠征軍を指している(上注209を参照)。

221) イーゴリ [C432] を有能な軍司令官と見なしていることについては、上注175を参照。ここでは、イーゴリを尊重して、あえて監禁などはしなかったということ。

222) 「かの地で長く過ごした」(тамо и долго быти)とイーゴリ [C432] が捕虜となっていた期間は長かったとあるが、『ラヴレンチイ年代記』では非常に簡単に「少ない日々(の)後に、イーゴリ公はポロヴェツ人のもとから〔馬で〕疾駆して逃げた」(и по малых днѣхъ ускочи Игорь князь у половещь) [ПСРЛ Т.1, 1997: Стб 399]とあり、捕虜となっていた期間は短かかったとしている。実際、研究者によって1185年にポロヴェツ人のもとから逃走したとするもの(その場合、捕虜生活は1ヶ月半ほど)と、1186年春～夏とするもの(1年以上の捕虜生活)など諸説がある(下注231参照)。

223) ポロヴェツ人「ラヴォル」(Лаворъ)は、『イーゴリ軍記』に描かれている「オヴルール」(Овлуръ, Влуръ) ([木村 1957-1979, 1983: №.186, 191])に対応している。多くの研究者がこれをキリスト教聖人名である「ラヴル」(Лавр)と共通のヴァリエント語形としている [Литвина, Успенский 2013: С. 65-68][Энциклопедия СПИ-3: С. 344-346]。

シへ行きましょう」と言った。イーゴリ [C432] は最初はかれを信じていなかった。それより、自らの若気の至りで高望みをして、家臣たちをともなってルーシへと逃げることを考えていた。かれはこう言っていた。「わしはあのおとき、栄光を重んじて、従士たちを見捨てて逃げることはしなかった<sup>224)</sup>。今もまた、栄光なき道に行くことはするまい」。そのとき、かれ [イーゴリ] のもとには、千人長<sup>225)</sup> の息子とかれの馬丁がおり、二人は、かれに強く勧め、こう言った。「公よ、ルーシの地に行って下さい。これが、神の望むことであるなら、〔神は〕あなたを解放してくれるでしょう」。しかし、かれ [イーゴリ] が求めるような好機は到来しなかった。

ところが、先に述べたように、ポロヴェツ人たちがベレヤスラヴリから戻って来たとき<sup>226)</sup>、かれの、助言者たち<sup>227)</sup> がイーゴリ [C432] にこう言った。「あなたは、主なる神には適わない高望みをしている。あなたは家臣をつれて、一緒に逃げようとしている。しかし、なぜ次のことに思い至らないのか。ポロヴェツ人が兵を率いて戻ってくる。われらが聞いたところでは、かれら [ポロヴェツ人たちは] は、公 [であるあなた] とあなた方 [家臣たち] とすべてのルーシ人を殺そうとしていると。そうすれば、栄光どころか、命までも失うことになるでしょう」。

イーゴリ [C432] 公はかれらの助言を心に受け容れて、かれら [ポロヴェツ人] が戻ってくることを恐れて、逃げることを決めた<sup>228)</sup>。

しかし、かれは昼も夜も逃げ出すことはかなわなかった。監視人たちが見張っていたのである。**【651】**しかし、かれは日没のときが、唯一の好機であることを知った。

イーゴリ [C432] は、自分の馬丁を使者として、ラヴォルのもとへと派遣した。そして言った。「トール川<sup>229)</sup> (Top) の対岸に馬で来るように、替え馬を連れてくるように」。ルーシへと逃走することについてラヴォルと話をつけたのである。

---

224) 先のカヤラ川の戦闘における、イーゴリ [C432] の「自分たちだけ逃げ出す」なら「神から罪とされる」(上注 174) という発言を踏まえている。さらにコウイ人部隊が混乱に陥ったのを收拾しようとして自身の部隊から離れてしまったので、部隊から離れないように引き返した一幕があった。この行動がもとで、イーゴリはポロヴェツ人に捕らえられたのである。

225) この「千人長」(тысяцкий)については、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] ((1132 ~ 1171 年) の配下の千人長ラグイル・ドブリニンと同定して [Энциклопедия СПИ-3: С. 201], その息子はティモフェイ (Тимофей) であり、かれが『イーゴリ軍記』の作者だとする説 [Энциклопедия СПИ-4: С. 115] や、「千人長」はノヴゴロドの千人長ミロネグ (Миронег) であるとする説 [Энциклопедия СПИ-2: С. 110] などが出されているが、いずれも推測の域を出ていない。

226) コンチャクが率いたベレヤスラヴリ方面への遠征軍を指している。上注 217 の部分を参照。

227) 「助言者たち」(думцы) とは、上の「千人長の息子」(сын тысяцкого) と「馬丁」(конющий) を指している。

228) コンチャクが主導したベレヤスラヴリへの遠征軍 (上注 226 および 217 の部分を参照) が戻ってくるより前にイーゴリは逃亡したとすれば、おそらく 1185 年のうちに逃げたことになる。

229) 「トール川」(Top) は、セヴェルスキイ = ドネツ川右岸支流で、現在のカジョーニイ・トーレツ川 (Казенный Торец) に相当し、この川の流域にはコンチャクが支配する部族の幕営地があった。

その時、ポロヴェツ人たちは馬乳酒<sup>230)</sup>をしたたか飲んでいた。夕方になって、馬丁は戻ってくると、ラヴォルがかれを待っていると、自分の公イーゴリに告げた。

見よ、そのとき〔イーゴリは〕驚き震え上がって立ち上がり、神の聖像と尊い十字架に拝礼すると、言った。「心を知る主なる神よ、どうか、主宰よ、〔救われるに〕値しないわたしですが、どうかお救い下さい」。こうして、十字架と聖像画(イコン)を手に取り、天幕の幕を持ち上げて、外へと逃げ出した。そのとき、監視人たちは、遊樂に騒いでおり、公は寝ているものと思っていた。かれ〔イーゴリ〕は走って〔トール〕川に至り、渡渉して、馬に乗り込んだ。こうして、二人は、〔敵の〕幕営地を横切って駆け始めた。

主は、金曜日<sup>231)</sup>の夕方にこの解放をなした。イーゴリは、ドネツ<sup>232)</sup>(Донець)の城市にたどり着くまで、徒歩で11日間かかった。そこから、自分のノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕へと向かった。〔そこではみな〕かれの〔帰国を〕喜んだ<sup>233)</sup>。

〔イーゴリは〕、ノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕から、兄弟のヤロスラフ[C412]のいるチェルニゴフへと向かった。そこで、かれはセイム川流域諸城市への援軍を依頼した。ヤロスラフ[C412]は、かれ〔イーゴリ〕の到来を喜び、かれに援軍を与えることを約束した。

イーゴリ[C432]はそこから、キエフの大公スヴァトスラフ[C411:G]のもとへと向かっ

230) 「馬乳酒」(кумыз)は、馬乳を醗酵させたアルコール飲料。

231) この「金曜日」について、ウクライナ語訳の注では(おそらくルィバコフ説に依拠して[Рыбаков 1971: С. 271]), 1185年6月21日の金曜日と推定しており、その根拠として、『イーゴリ軍記』の逃走の場面の「サヨナキドリは楽しげに歌って夜明けを告げる」(соловьи веселыми пьсьми свѣтъ повѣдають) ([木村 1983: № 202])の文言を取りあげて、民間の言い伝えではサヨナキドリは「聖ペトロとパウロの日」(6月29日)頃までに鳴き始め、これは自然観察の実際にも合っていることから、これにもっとも近い金曜日(6月21日)を想定している。さらに、イーゴリが「ピローゴシチ聖母教会」へ向かった([木村 1983: № 213])ことを取りあげて、教会は「聖母就寝」の祭日(8月15日)に献堂されていることから、イーゴリは、帰国後およそ2週間キエフに滞在したのちに、祭日を祝うために教会を訪れたとしている[Літопис руський, 1989: С. 342]。スマルーコフはこの説より早い時期、1185年5月31日の金曜日を逃亡の日としている[Сумаруков 1983: С. 32]。

これに対して、ゲトマネツは、捕虜として収容されるまでの時間を検討した上で1185年内にイーゴリが逃亡した可能性を排除して、1186年の春～夏(『イーゴリ軍記』の記述から推定される季節)の金曜日に逃亡したとしている[Гетманец 1989: С. 126-132]。

232) 「ドネツ」(Донець)は、現在のウダ川(Уда)(セヴェルスキイ・ドネツ川右岸支流)の左岸にあったチェルニゴフ公領の城砦で、現在のハリキウ(Харків)市の郊外にあたる場所にあった。ポロヴェツ地との境界地帯に位置していた。

233) イーゴリの帰還に対する人々の「喜び」(обрадовашася)、さらに以下に続くヤロスラフ[C412]及びスヴァトスラフ[C411:G]の「喜び」(обрадовася; радъ бысть)については、『イーゴリ軍記』にも「国々には喜び、諸城市は祝い」(страны ради, гради весели) ([木村 1983: № 214])と同様の記述がある。

た<sup>234)</sup>。スヴァトスラフ [C411:G] はかれの到来を喜んだ。かれ〔スヴァトスラフ〕の姻戚である<sup>235)</sup> リューリク [J2] も〔喜んだ〕。【652】

## 6694 [1186] 年

3月に<sup>236)</sup> スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、チェルニゴフで、かれ自身が創建した受胎告知教会<sup>237)</sup>の献堂式を行った。

スヴァトスラフ [C411:G] は、自分の姻戚であるリューリク [J2] と協議して、ポロヴェツ人を討伐すべく、素早く襲撃を行うことにした。それは、ポロヴェツ人がタティネツ<sup>238)</sup> (Татинец) に近いドニエプル川の浅瀬〔近く〕にいるという報告が、かれらのもとにもたらされてからである。かれら〔スヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2]〕は補給物資も持たずに、襲撃すべく進軍した<sup>239)</sup>。

ウラジーミル・グレーボヴィチ [D1782] も自分の従士たちを引き連れて、ペレヤスラヴリから、かれらのもとにやって来た。そして、〔ウラジーミルは〕スヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2] に対して、黒頭巾族とともに先陣を切って進軍させてくれるよう頼んだ。スヴァト

---

234) この、イーゴリが虜囚の地から逃走、帰国して後にキエフに行ったことについては、『イーゴリ軍記』の末尾にも「イーゴリはピロゴシチェの聖母の聖堂を指して、馬上ゆたかに、ポリーチェフ坂を下り行く」〔木村 1983: № 213〕と記されている。

235) リューリク [J2] がスヴァトスラフ [C411:G] の姻戚 (сват) であることについては上注 5, 45 を参照。

236) 1186 年の 3 月に相当する。「受胎告知」の祭日 (次注) が 3 月 25 日であることから、この日に献堂式が行われたと考えられる。

237) 「受胎告知教会」(святое Благовещение) は、チェルニゴフ城市の内城の北東のストリジェニ川 (Стрижень) 河岸に建立された。石造りの聖堂は 17 世紀に崩壊し、ようやく 19 世紀になって礎石の存在が確認され、埋蔵物も発見されて研究されるようになった。内部はフレスコ画で飾られ、棺なども発見されていることからチェルニゴフ諸公一族の菩提寺のような役割を果たしていたと考えられ、1196 年にはトルベチ公フセヴォロド・スヴァトスラヴィチ [C433] がこの教会に埋葬されている〔Православная энциклопедия Т.5, С. 271-272: БЛАГОВЕЩЕНИЯ ПРЕСВЯТОЙ БОГОРОДИЦЫ ЦЕРКОВЬ В ЧЕРНИГОВЕ〕。

238) 「タティネツ」(Татинец) は、ペレヤスラヴリからドニエプル川を 100km ほど下った現在のズロトノシャ川 (Золотоноша) 近くの浅瀬で、ドニエプル川の渡渉地点の一つだった。19 世紀の記録によると、渡渉の川幅は 420m ほどで、深さは 90cm だったという。現在はクレメンチュク貯水地の中に深く沈んでいる。

239) ルーシ諸公の公領との境界地域に冬営しているポロヴェツ人の移動幕舎への掠奪を狙ったものであり、ポロヴェツ人の応援部隊が駆けつけるまえに掠奪を完遂するために、輻重の荷車を伴わずに、騎馬だけの急襲を試みたのである。



スラフ [C411:G] は、ウラジーミル [D1782] が自分の息子たちよりも前で、先陣を切らせることを好まなかったが<sup>240)</sup>、リユーリク [J2] や他の者たちはみな同意した。なぜなら、〔ウラジーミルは〕勇壯で大胆で頑強に戦う男であり、常に善き行いを追い求めていたからである。

ルーシの諸公がかれら〔ポロヴェツ人〕を討つべく進軍していたとき、黒頭巾族から、ポロヴェツ人のところの自分たちの姻族を通じて、〔ルーシ諸公のもとへ〕報告がもたらされた<sup>241)</sup>。ポロヴェツ人は、自分たちを討つべくルーシの諸公が進軍していることを聞いて、ドニエプル川を渡って逃げている<sup>242)</sup>、〔とのことだった〕。ルーシの諸公はかれら〔ポロヴェツ人〕にすぐに追い付くことはできなくなった。ドニエプル川の氷が薄くなっていた。春だったのである。そこで、〔諸公は〕は引き返した。

その帰路の途上で、ウラジーミル・グレーボヴィチ [D1782] は重病を患い、それが原因で亡くなった。かれは自分の城市ペレヤスラヴリ **【653】** に担架で運ばれた。そして、4月18日<sup>243)</sup> に逝去した。〔遺体は〕聖ミハイル教会<sup>244)</sup> に安置された。ペレヤスラヴリ人はみな、かれを悼んで泣いた。なぜなら、かれの従士たちは愛され、黄金を集めるようなことをせず、財産を惜しまず与え、従士たちを養ったからである<sup>245)</sup>。この公は善良で頑強に戦い、勇壯な姿を見せ、あらゆる徳に満たされていたからである。かれの〔死を悼んで〕この地方は大きなうめき声を

240) スヴァトスラフ [C411:G] は、息子たちに掠奪の優先権を与えようとしたということ（優先権をめぐる諸公間の争いについては上注 55 および上注 88 を参照）。ただし、この「息子たち」が誰であるかは年代記の記述からは不明。

241) 黒頭巾族は、一般的にはルーシ諸公に忠誠を誓っていたテュルク諸族の総称だが、この記事によれば、黒頭巾族の支配層はまた、ポロヴェツ人の支配層と婚姻同盟を結んでいたことが分かる（下注 412 参照）（[Плетнева 1990: С. 89] も参照）。

242) ポロヴェツ人の移動幕営が、おそらく冬営のために、ドニエプル川の右岸のルーシの地との境界地域のところまで来ていたが、ルーシ諸公襲撃の報を受けて、ドニエプル川を渡河して、左岸のポロヴェツ人の居住するステップ地帯に引き返したということ。

243) 本年代記では「4月18日」（апреля во 18 день）になっているが、『ラヴレンチイ年代記』6696(1188)年の並行記事では、ウラジーミル [D1782] は、「3月18日の柳の週の水曜日」（мѣсяца марта въ 18 день в среде вербное недѣли）に逝去したことになる [ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 400]。1187年の3月18日は確かに聖枝祭（柳の週）の水曜日に当たっており、年紀がより詳しく正確であることから、こちらが正しく、『イパーチイ年代記』の「4月」は「3月」の誤記と見るべきだろう。

244) ペレヤスラヴリの「聖ミハイル教会」（церковь Святого Михаила）は、モノマフ一族で、歴代のペレヤスラヴリ公だったスヴァトスラフ [D13]（1114年没）、アンドレイ [D18]（1147年没）、ロスチスラフ [D171]（1150年没）等が埋葬されていた。

245) 類似の讃詞が、本年代記では、1178年にムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [J5] が死去した時にも用いられており、「かれは、従士たちに親切で、財産を惜しむことなく、金や銀を蓄えることなく、自分の従士たちに与えていた」とある。財産を一人で所有することなく惜しまずに部下に与えることが公としての美德の一つとして考えられていたことが分かる。

上げた<sup>246)</sup>。

その年<sup>247)</sup>, 大フセヴォロド [D177:K] の息子ボリス<sup>248)</sup> [K2] が死んだ。〔遺体は〕首座聖母教会のイジャスラフ・グレーボヴィチ [D1781] の傍らに安置された<sup>249)</sup>。

その年<sup>250)</sup>, コンチャクはポロヴェツ人を引き連れて、ロシ川流域を掠奪した。その後, 〔ポロヴェツ人たちは〕しばしばロシ川流域とチェルニゴフの領地<sup>251)</sup> の掠奪を始めた。

その年の秋<sup>252)</sup> から、ひどく悪しき冬<sup>253)</sup> だった。それは、われわれが覚えている限りではこれまでなかったほどだった。

その年の冬<sup>254)</sup>, スヴァトスラフ [C411:G] は自分の姻戚のリューリク [J2] と使者を交わして協議し, ポロヴェツ討伐の遠征に行くことを合意した<sup>255)</sup>。リューリク [J2] はスヴァトスラフ [C411:G] の提案を気に入り, かれに言った。「兄弟よ, そなたはチェルニゴフに行き, 自分の

---

246) ウラジーミル [D1782] の死について「この地方は大きなうめき声を上げた」(о нем же украина много постана)のような土地を擬人化する修辭的な語句は、『イーゴリ軍記』にも類例があり ([木村 1957-1979, 1983: № 164]), 12世紀の翻譯文学からの影響とも考えられる ([Адрианова-Перетц 1968: С. 168])。

247) 1187年のこと。『ラヴレンチイ年代記』6696(1188)年の項にも、「この年ボリス・フセヴォロドヴィチが逝去した」と簡単な記事があり, 1187年のペレヤスラヴリ公ウラジーミル [D1782] (上注 243 参照) 死亡記事の直後にあることから, 1187年の出来事であることは確かである。

248) ボリス [K2] については, この個所が初出で死亡の原因なども不明。『イパーチイ年代記』では「死んだ」(умре)と卑称表現になっていることから, 不名誉な死あるいは若年の死だったか。なお, フセヴォロド [D177:K] の息子については, この個所が本年代記における初めての言及である。

249) イジャスラフ [D1781] は, 1182年 (もしくは 1183年) のフセヴォロド [D177:K] 主導によるブルガール遠征に参加して戦死し, ウラジミルの聖母就寝首座教会 (Успенский собор) に埋葬されている (上注 30 参照)。

250) 1187年のことと考えられる。

251) 「チェルニゴフの領地」(в черниковской волости) とは, 先にグザが遠征の対象としたセイム川流域の諸城市のことを指している (上注 209)。

252) 1187年の秋から 1187/1188年の冬にかけてのこと。

253) 「悪しき冬」(зима зла) とは, 冬場に異常に激しい極寒に襲われたということ ([Борисенков, Пасецкий 1988: С. 257] 参照)。

254) 1187/1188年の冬を指している。

255) 1187年3月~4月のスヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2] のタティーネツの浅瀬への遠征 (上注 238) が失敗したことを踏まえた, 再度の掠奪遠征の試みであることは明らかである。

兄弟たちと合流せよ<sup>256)</sup>。わしは、自分の〔兄弟たち〕とともにここにいる」。こうして、すべてのルーシの諸公が集合し、ドニエプル川を進んだ。雪が深く他の行路をとることができなかったからである。こうして、スネポロド川<sup>257)</sup> (Снепород) まで到達した。その場所でポロヴェツ人の斥候を捕獲し、ポロヴェツ人の移動幕舎と家畜の群れが青い森<sup>258)</sup> (Голубой лес) にいることを知った。【654】

ヤロスラフ [C412] は、さらに進軍することを望まず、兄弟のスヴァトスラフ [C411:G] にこう言い始めた。「わしはドニエプル川を離れて先に行きたくはない。わしの土地からは遠くであり、わしの従士たちは疲弊している」。

リユーリク [J2] はスヴァトスラフ [C411:G] のもとに使者を派遣し始め、かれに次のように強く要請して言った。「兄弟にして姻戚よ、われらはこれを神に頼むべきだろう。われらには報告がきており、ポロヴェツ人はほんの半日の行程のところにいる」と。<sup>259)</sup> もし誰かが合議に背いて進軍を望まないことがあれば<sup>260)</sup>、われらは二人でその場所まで行こう。なにを傍観していることがあろうか。神がわれらに与えたことを、われらは〔かれに〕与えよう」。スヴァトスラフ [C411:G] はこの〔提案〕が気に入って、かれ〔リユーリク〕に言った。「兄弟よ、わしはいつでも、今すぐでも〔進軍する〕準備が出来ている。だが、そなたは兄弟のヤロスラフ [C412] に使者をやって強く求めよ。そうすれば、全員で軍を進めることができるだろう」。

リユーリク [J2] は、ヤロスラフ [C412] のもとに使者を遣って言った。「兄弟よ、そなたが、われらの邪魔をするのはよろしくない。ポロヴェツ人の移動幕舎は、ほんの半日の行程のとこ

256) この「兄弟たち」に弟のヤロスラフ [C412] がいたことは確かだが、虜囚の地から逃亡したイーゴリ [C432] が含まれているかどうかは不明。

257) 「スネポロド川」(Снепород, Снопород) は、現在のサマラ川 (Самара) を指しており ([イパーチイ年代記 (6): 273 頁, 注 509] 参照)。スヴァトスラフ [C411:G] とリユーリク [J2] の部隊はキエフおよびベルゴドから、ヤロスラフ [C412] の部隊はチェルニゴフから、深い雪をかき分けながら氷結したドニエプル川の上を進んで、サマラ川の河口付近まで到達したということ。

258) プリツァクによれば、この「青い森」(Голубой лес) は、チュルク系民族の色と方位の象徴に関係しており、「青」系の色は「東」を示していることから、サマラ川の河口から見て東の方面、つまりサマラ川の上流域にあった森であると推定している [Pritsak 1981: p. VIII-1621]。([イパーチイ年代記 (6): 273 頁, 注 510] の「黒い森」も参照)。

他方、クドリャショフによれば、サマラ川河口付近でポロヴェツ人斥候を捕まえ、そこから「半日行程」(次注) なら、「青い森」はサマラ川下流域の、流れが北西から北東へ急転する場所 (河口から 20 ~ 30km) を指すのではないかと推定しており、「青」の名称も森の植生の特徴と関連付けている [Кудряшов 1948: С. 100-102]。

259) 「ほんの半日の行程のところ」(лежать за поль дне) の表現は先でも繰り返されるが、騎行して 20km ほどしか離れていないところまで近づいたということ。[Кудряшов 1948: С. 100]

260) 「誰か」とは、遠征を決めた際の「合議」(дума) に背いた (росдумавати) 者ということで、チェルニゴフ公ヤロスラフ [C412] のことを暗に指している。

ろにいる。〔これは〕大した〔馬による〕行軍ではない。われらにもたらされた知らせは正しい。兄弟よ、わしはそなたに拝礼する。わしのために、半日の行程を進軍せよ。〔そうすれば〕わしは、そなたのために、10日行程の〔馬での〕進軍をするであろう〕。

ヤロスラフはそれでも〔馬で〕行くことを望まず、こう言った。「わしは一人で〔馬で〕行くことはできない。わしの部隊は歩兵である。そなたたち〔スヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2]〕は、行軍を開始する前にわしの地元に、そこまで〔行軍することを〕知らせるべきだった」。

そして、かれら〔リューリク [J2] とスヴァトスラフ [C411:G]〕の間に諍いが起こった。リューリク [J2] は、何度もかれら〔スヴァトスラフ [C411:G] とヤロスラフ [C412]〕に言うことを聞かせようとしたが、かれらを動かすことはできなかった。スヴァトスラフ [C411:G] は、リューリク [J2] とともに行軍することを望んでいたが、弟のヤロスラフ [C412] をおいていくことはしなかった。〔かれらは〕郷国へと引き返した。

その年、ヴィシエゴロド **[655]** の公、ムスチスラフ・ダヴィドヴィチ <sup>261)</sup> [J32] が逝去した。5月のことだった <sup>262)</sup>。キエフの聖テオドロス修道院の教会 <sup>263)</sup> に埋葬〔安置〕された。

その年、〔太陽の〕しるしがあった。9月15日 <sup>264)</sup> のことである。全地は闇になり、すべての人が驚いた。太陽が欠けてしまい、天は真っ赤な雲が燃えたった。このようなしるしは不吉なことの前触れだった。この月のこの日、エルサレムは神を畏れぬサラセン人に占領されたのだった <sup>265)</sup>。

このしるしは全土に起こったのではなく、主宰〔たる神〕がこれを示そうと望んだ国で起こったのである。当時は次のように言っていた。ガーリチでは闇が襲った。日中に太陽がかげって星が見えるほどだった。キエフ地方ではこの時は、何も見なかったという。われらがこれにつ

---

261) ムスチスラフ [J32] については、この個所が初出。ヴィシエゴロドはダヴィド [J3] の拠点城市だったが、ダヴィド [J3] がスモレンスク公となって移ったあとは、息子のムスチスラフ [J32] の手に公座が移っていたことがこの記事によって分かる。

262) 1187年5月のことと推定される。

263) ムスチスラフ [D11] が1129年にキエフ城内のウラジーミル区に創建した修道院。イジャスラフ [D112] (1154年没) ウラジーミル [D115] (1171年没) などが埋葬されており、ムスチスラフ ([D11]) 一族の菩提寺としての役割を担っていた。

264) 実際に、1187年9月4日に皆既日食が観察されている ([日食・月食・星食情報データベース])。日にちに若干のズレはあるものの、このときの日蝕を指しているのだろう。

265) イスラム王朝の宰相サラディンは、1187年の7月に、ヒッティーンの戦いで十字軍の主力部隊を壊滅させ、この年の10月までにはエルサレムを占領している。

いて語るのは、われらの時代に主は、聖なるエルサレムの都を無法者のハガルの民<sup>266)</sup>に引き渡したからである。主の智慧を知る者は誰もいない、主がひそかになされたことを誰も知ることはできないのである。

〔聖書の〕士師たちについての書(судийские книги)には、エリという祭司が<sup>267)</sup>イスラエルで裁きをなしていたとき、異族がエルサレムに來襲し、主なる神の教えが記された石板を奪い取り、かれらと戦うべく武装して、押し寄せたという。このようにして神はエルサレムに対して自らの怒りを示され、イスラエル人は異族に撃ち破られ、主の教えが記された聖物が奪い取られた<sup>268)</sup>。【656】教会の書が語るところによれば、その数年後に、主は再び主の戒律の石板をエルサレムに返還し、その前で神の父祖ダビデが喜びに満たされて、踊り跳ねたという<sup>269)</sup>。

われわれは懲罰を受けて、無法の徒ハガルの民から損害を受け、神の恩寵に望みを掛けて、その尊顔を讃えるのである。

その年<sup>270)</sup>、ウラジミルコ[A121]の息子のガーリチ公ヤロスラフ[A1211]が逝去した。10月1日のことだった。翌日の2日に聖母教会<sup>271)</sup>に安置された。

この公は賢明で弁舌が立ち、神を畏れ、諸々の地で名誉をもって迎えられ、軍事遠征においては栄光を讃えられた。かれが侮辱を受けたところでは、部隊を率いて自ら遠征することはな

---

266) 本来「ハガルの民」(агаряны)はイベリア半島のイスラム勢力について使われていたことについては、[イパーチイ年代記(7):247頁,注473]を参照。

267) 「エリ」(Илья)という祭司(жрец)がエルサレムで契約の「石板」(скрижаль)(契約の聖櫃)を管理していたことについては、『サムエル記上』第1～4章に記されている。

268) 以上の、異族(ペリシテ人)による「石板」の強奪については、『サムエル記上』(4:4-11)に記されている。

269) 「石板」がエルサレムに返還されたことについては『サムエル記下』6章に記述があり、ダビデ王が契約の聖櫃の前で喜び、踊ったことについては、同6:14の記述に対応している。「神の父祖」(богоотець)呼称は、イエスの系譜上の父祖(『マタイ福音書』1:1)としてのダビデ王を指す典礼用語。

270) 記事の時系列から見て1187年のこと。

271) この「聖母教会」(церковь Святыя Богородица)は、ガーリチの首座教会で「聖母就寝」(Успение Богородицы)に献堂されており、12世紀40～50年代にガーリチの主教座が置かれたことを契機に創建されたものと推定されている。現在のガーリチ郊外のクリロス(Крылос)村に礎石の遺構が残っている([Раппопорт 1982: С. 108])。

く、自分の軍司令官たちを〔派遣した〕<sup>272)</sup>。なぜなら、かれは自分の地を善く管理し、多くの施しを行い、巡礼者を愛し、乞食たちを養い、修道の位階にある者を愛し、自分の力によって名誉を施し、あらゆる事について神の法を守り、自ら教会人のもとに出向き、善き行いをなしたのだから。

病が重くなり逝去の刻が近づき、具合が悪くなったことを知ると、自分の家臣たち、そして全ての会衆<sup>273)</sup>、修道院の者たち、乞食、強き者、弱き者などガーリチ全土の者たちを呼び寄せて、泣きながら皆に向かってこう言った。「父たちよ、兄弟たちよ、息子たちよ、見よ、わしはこの虚しき世を去り、われらが創造主のもとに行こうとしている<sup>274)</sup>。【657】 わしは誰よりも罪を犯した。それまで誰も犯したことの無いような罪を。父たちよ、兄弟たちよ、どうか罪を赦してほしい」。

こうして、〔ヤロスラフ [A1211] は〕 三日間、すべての会衆とすべての民衆の前で泣き続けた。そして、自分の財産を修道院と乞食たちに分け与えるよう命令した。このようにして、三日間ガーリチ全土に施しをなして、もはや与えるものはなくなってしまった。すると、かれ〔ヤロスラフ [A1211] は〕自分の家臣に言った。「見よ、わしはこのみすばらしい身ひとつで〔神のもとに〕行き、ガーリチ全土を養った。見よ、わしの後継には末の息子のオレーグ<sup>275)</sup> [A12112] を指名する。ウラジーミル [A12111] にはベレムイシェリ<sup>276)</sup> を与える」。

こうして、〔後継について〕合意を取り付けると、ウラジーミル [A12111] に〔合意を守るこ

---

272) これについては、1155年のユーリイ手長公 [D17] への援軍派遣 ([イパーチイ年代記 (5):284 頁]), 1158年のイジャスラフ [C35] への援軍派遣 ([イパーチイ年代記 (5):304 頁, 注 423]), 1159年のイジャスラフ [C35] への家臣イスビグネフの派遣 ([イパーチイ年代記 (6):197 頁, 注 43]), 同年のロスチスラフ [D116:J] 支援のための軍司令官トゥドル・エルチチ (Тудор Елчичь) の派遣 ([イパーチイ年代記 (6):216 頁, 注 158]), 1160年のスヴャトスラフ [C43] 支援のためと、1172年のムスチスラフ [I1] 支援のための、軍司令官コンスタンチン・セロスラヴィチ (Кстянин Сѣрославич) の派遣 [イパーチイ年代記 (6):注 179,616] などをあげることができる。

273) 「すべての会衆」(зборы вся) の「会衆」(сборы) の語は、直後に「すべての会衆とすべての民衆の前」(передо всеми сборки и предо всеми людьми) の表現の中で繰り返されるが、通常は「聖職者の中の主だった者たち」の意味で用いられる語である。ただ、フロヤノフはこの語に、ガーリチの政治における「民会」の参加者たちの広い階層を読み取り、以下に続くオレーグ追放劇も民会(ガーリチ市民)の主導によるものとしている [Фроянов 2012: С. 500-502]。

274) この、臨終の言葉の「父、兄弟、息子」は修道士の位階の上下関係を踏まえたもので、この文言は、『原初年代記』5682(1074)年の洞窟修道院典院フェオドーシイの臨終の言葉にも見ることができる ([ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 186])。

275) オレーグ [A12112] は、ヤロスラフ [A1211] の側妻で、1173年のガーリチ市民の暴動で火あぶりにされたアナスタシア(ナスターシャ)の息子だった ([イパーチイ年代記 (7):注 79, 81, 82] を参照)。

276) ベレムイシェリはガーリチの北西約 180km、ポーランド国境の城市。いわばガーリチ公国の辺境に位置し、ウラジーミル [A12111] をガーリチ公となる異母弟オレーグ [A12112] に危害を加えることのできない場所に追いやろうとした意図があるだろう。



とについての] 十字架〔接吻の誓い〕を行わせ、ガーリチの家臣たちにも、かれ〔ウラジーミル〕が弟のガーリチ〔公の〕地位を狙わないことを〔十字架接吻で〕約束させた<sup>277)</sup>。なぜなら、ナスタシカの息子オレーグ<sup>278)</sup> [A12112] は、自分の愛する息子だったからであり、他方、ウラジーミル [A12111] は、かれ〔父親のヤロスラフ [A1211]〕の意にそぐわない振る舞いをしてきた<sup>279)</sup>。そのために、かれ〔ウラジーミル〕にはガーリチが与えられなかったのである。

ヤロスラフ [A1211] の死後、ガーリチの地は大きな騒乱が起こった。ガーリチの家臣たちはウラジーミル [A12111] と協議して、十字架接吻の〔誓い〕<sup>280)</sup> に違反して、オレーグ [A12112] をガーリチから追放した。オレーグ [A12112] は、そこ〔ガーリチ〕から逃げ出して、ヴルーチイ<sup>281)</sup> (Вручии) のリュウリク [J2] のもとに身を寄せた<sup>282)</sup>。ウラジーミル [A12111] は、自分の祖父、自分の父が就いていたガーリチの公座に座した。

その年の秋<sup>283)</sup>、リュウリク [J2] に息子が生まれた。洗礼名はドミートリイと名付けられ、世俗〔の名は〕ウラジーミル [J22] だった。【658】

277) この十字架接吻の誓いは、ヤロスラフ [A12111] の死後、まもなくウラジーミル [A121111] によって破られることになる。(下注 280 参照)

278) この、オレーグ [A12112] に対する「ナスタシカの息子」(Настасьичъ) のという母親の系譜による呼び名は、かれが庶子であり、正当の後継者ではないという年代記記者の立場が含意されている [Литвина, Успенский 2006: С. 261]。

279) ウラジーミル [A12111] と父ヤロスラフ [A1211] との不和と前者の追放については上注 111 ~ 117 を参照。

280) 上注 277 のヤロスラフ [A1211] の死に際しての、オレーグ [A12112] をへの忠誠の誓いを指している。

281) 「ヴルーチイ」(Вручии) は、プリピャチ川左岸支流ウジ (Уж) 川左岸の城市で、現在のオヴルチ (Овруч) に相当する。キエフから北西方向に約 153km ほど離れ、ガーリチから東北方向へ 380km 近い遠方にある。この城市は、1170 年の記事でもリュウリク [J2] の領地として記されており [イパーチイ年代記 (6) : 274 頁, 注 521]、おそらく、リュウリク [J2] が相続した拠点城市として、かれがスヴァトスラフ [C411:G] と共同のキエフ支配 (ベルゴロドに居住していた) をしていたときにあっても、リュウリクの支配下に保持されて続けてきたのだろう。

282) リュウリク [J2] を筆頭とするムスチスラフ [D11] 一族は、12 世紀後半には一貫してヤロスラフ八智公 [A1211] と同盟関係を結んでおり、八智公と息子ウラジーミル [A12111] との諍いにおいても、息子に庇護を差し伸べたことはなかった ([イパーチイ年代記 (7) : 注 192] 参照)。今回も、スヴァトスラフ [C411:G] への対抗をもとにした同様の立場から、ヤロスラフ [A1211] が後継者に指名したが死後に後継争いに敗れたオレーグ [A12112] を、リュウリク [J2] は庇護したと考えられる。

283) 1187 年の秋のこと。ウラジーミル [J22] の洗礼名がドミートリイであることから、テサロニケの聖ドミートリオスの日 (10 月 26 日) 前後の誕生であった可能性がある [Литвина, Успенский 2006: С. 500-501]。

その年の、復活祭の日から<sup>284)</sup>、リューリク公 [J2] は、自分の義理の兄弟〔妻の兄弟〕グレーブ公<sup>285)</sup> [B3215] をその妃<sup>286)</sup> とともに、(千人長のスラヴェン (Славен) をその妻とともに<sup>287)</sup>), チュルイナ (Чюрына) をその妻とともに、また他にも多くの貴族たちをその妻とともに、〔新婦の父である〕スーズダリの大フセヴォロド公 [D177:K] のもとに派遣した。それは、〔息子の〕ロスチスラ<sup>288)</sup> [J21] に、ヴェルフスラヴァ<sup>289)</sup> (Верхслава) を娶せるためであった。

そしてボリスの日<sup>290)</sup> に、大いなる公フセヴォロド [D177:K] は、自分の娘ヴェルフスラヴァを引き渡した。同時に、数えきれぬほど非常に多くの金・銀を与えた。また、新郎の両親には多くの贈物を与え、大いなる名誉をもって〔新郎のもとへと〕送り出した。三つ目の宿営まで自分の愛娘を見送った父親と母親<sup>291)</sup> は、かの女のことを思って泣いた。なぜなら、かの女が可愛く、まだ8歳と年少だったからである。こうして、多くの贈物を与え、大いなる親愛をもって、ルーシのロスチスラフ公 [J21] のもとに嫁ぐよう送り出した。〔フセヴォロド [D177:K] は〕、

---

284) この年紀は、記事の時系列から見ると1188年のことであり、この年の復活祭は4月17日である。

285) 「自分の義理の兄弟〔妻の兄弟〕グレーブ公」(Глеб князь, шюрин свой) とは、当時、ピンスクの公だったグレーブ・ユーリエヴィチ [B3215] を指している。リューリク [J2] は、トゥーロフ公ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] の娘アンナと1172年頃に結婚しており [Войтович 2006: С. 520], グレーブ公 [B3215] は「妻の兄弟」(шурин) に当たる。

286) 前注から、この「妃」は、リューリク [J2] の姉妹のアンナを指している。

287) 丸括弧内はフレーブニコフ系列の写本にのみある読み。リューリク配下の千人長「スラヴェン」(Славен) については下注335を参照。

288) ロスチスラフは1172年4月7日に生まれていることから ([イパーチイ年代記(7): 186頁, 注102]), 結婚の時点では、16歳になったばかりだった。重要な政略結婚を担っていることから、かれはリューリク [J2] の長男(後継候補) だったのだろう。

289) 「ヴェルフスラヴァ」(Верхслава) は以下の記事で分かるように、スーズダリ公フセヴォロド [D177:K] の娘。以下に述べられるように結婚の時点で8歳だったことから、生年は1180年ということになる。かの女については、『キエフ洞窟修道院聖僧伝』の中で「アナスタシア」(Анастисие) と呼びかけられていることから ([БЛДР Т. 4: С. 360]), これが洗礼名であることが分かる。

290) 「ボリスの日に」(на Борищъ день) とは、7月24日(1188年)のボリスとグレーブの記念日を指している ([イパーチイ年代記(2): 337頁, 注305] 参照)。なお、『ラヴレンチイ年代記』6697(1189)年の並行記事では、「自分の娘ヴェルフスラヴァをベルゴロドへのロスチスラフ・リューリコヴィチ [J21] に嫁がせた」のが「7月30日」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 407] となっており、若干の日付の違いがある。

291) フセヴォロド [D177:K] の妃でヴェルフスラヴァの母親であるこの女性は、ヤース人でマリア・シユヴァルノヴァといった [イパーチイ年代記(7): 265頁, 注577]。

自分の姉妹の息子ヤコフ<sup>292)</sup>とその妻、他の貴族たちとその妻を愛娘に同行させて派遣した。

〔出迎えた者たちは〕聖エフロシニアの日<sup>293)</sup>に、かの女〔ヴェルフスラヴァ〕をベルゴロド<sup>294)</sup>まで導いた。翌日の神学者〔ヨハネの日に〕<sup>295)</sup>、聖使徒教会の木造の聖堂で、至福なる主教マクシム<sup>296)</sup>の手で戴冠式（結婚儀礼）が執り行われた。

リューリク [J2] は〔息子の〕ロスチスラフ [J21] のために非常に盛大な結婚式を催した。それは、ルーシでは未だかつてないほどで、結婚式には 20 人を超える多数の諸公が出席した。〔リューリク [J2]〕は自分の嫁に多くの贈物を与え、ブリャギン<sup>297)</sup> (Брягин) の城市を〔所領として〕与えた。〔リューリク [J2]〕は、この二人の仲人<sup>298)</sup> を貴族たちとともに、スーズダリのフセヴォロド [D177:K] のもとに帰国させた。大いなる名誉をもって、また、多くの贈物が与えられた。【659】

その同じ週〔日曜日〕<sup>299)</sup> にリューリク [J2] は、自分の娘のヤロスラヴァ (Ярослава) をノヴゴ

292) フセヴォロド [D177:K] の「姉妹の息子ヤコフ」(сестричич Яков) について、Яков の名が通常公族に命名される名ではないことから、リトヴィナとウスペンスキイは、ユーリイ手長公 [D17] が、自分の娘の一人を公族ではない人物（スーズダリもしくはノヴゴロドの高官？）に嫁がせたという仮説を立て、フセヴォロド [D177:K] はその息子（フセヴォロドにとっては甥にあたる）を自分の側近として重用し、今回は娘の嫁入りの使節団をつとめさせたと推定している [Литвина, Успенский 2006: С. 258, 333]。ここでは、ヤコフの「妻」である、フセヴォロドの姉妹（新婦にとっては伯母）が「仲人」として参加していることが重要である（下注 298 参照）。

293) 9月25日のアレクサンドリアの修道聖女聖エフロシニアの祭日。スーズダリを出発してから、およそ2ヶ月が経っている。

294) キエフに近い「ベルゴロド」は、当時、リューリク [J2] が拠点としていた城市で、息子のロスチスラフ [J21] もこの城市の父のもとに住んでいたのだろう（上注 290 の『ラヴレンチイ年代記』並行記事も参照）。

295) 9月26日の神学者ヨハネ逝去の祭日。

296) 「マクシム」(Максим) は、ベルゴロドの主教で、この2年後の1190年に没している（下注 355 参照）。かれを、一連の教会規則及び教義書の著者として比定する説もある [СККДР Вып.1: С. 253]。

297) 「ブリャギン」(Брягин) は、キエフから北方約150kmのところに位置する、ブラギンカ川 (Брагинка) 上流の城市。現在のベラルーシのブラギン (Брагин) に相当する。古くからロスチスラフ [D116:J] = リューリク [J2] 一族の領地だったと考えられる。

298) 「この二人の仲人」(такова же свата) は、「ヤコフとその妻」(上注 292 参照) を指している。この「仲人」と訳した сват は、親族関係をあらわす言葉としては、妻および娘の夫(婿)の親(とその「兄弟」たち)を指す語で、これまでは「姻戚」と訳してきた。この語は、結婚儀礼の付添人としての役割名称(「仲人」として後代に定着するが([伊賀上 2013: 188-194 頁]), ここでは「ヤコフの妻」は新婦の伯母であることから、「姻戚」(リューリク [J2] にとって)と「仲人」の二重の意味を持っていることになる。

299) 「その同じ週」(тоъ же недѣль) は、ロスチスラフ [J21] とヴェルフスラヴァの結婚式が行われた9月26日に続く週ということだろう。この10月頃は結婚式の時節だった。

ロド=セヴェルスキイのスヴァトスラフ・イーゴレヴィチ<sup>300)</sup> [C4323] に嫁がせた。

その頃<sup>301)</sup>, ウラジーミル [C4321]<sup>302)</sup> が〔妻の〕コンチャクの娘と一緒にポロヴェツ人のところから戻って来た。そして, イーゴリ [C432] は自分の息子〔ウラジーミル [C4321]〕のために結婚式を催し, かれとその子供ともども結婚式を行った<sup>303)</sup>。

その年の秋, スーズダリの大いなる公フセヴォロド [D177:K] に息子が生まれた。ピリポの斎戒期の 11 月 26 日のことで, 殉教聖者ゲオルギオス教会が献堂された日だった<sup>304)</sup>。父親のフセヴォロド [D177:K] は, 主教ルカ<sup>305)</sup> (Лука) に対して, 息子に, その祖父の名である<sup>306)</sup> ユーリイ [K3] と名付けるよう命じた。スーズダリの地全土は大いなる喜びに湧いた。

フセヴォロド [D177:K] は大いなる婚姻をととのえた。その時, ヴェルフスラヴァを送り届けたヤコフ<sup>307)</sup> がルーシから戻って来た。大いなる公〔フセヴォロド [D177:K]〕も公妃<sup>308)</sup> も大いに喜んだ。貴族たちや民衆もみな〔喜んだ〕<sup>309)</sup>。

---

300) スヴァトスラフ [C4323] は, 1176 年に生まれたイーゴリ [C432] の息子であり, この結婚の当時まで 12 歳ほどだった。(上注 118 参照)

301) 直前の記事がやはりイーゴリ [C432] の息子の結婚の記事であることに関連から見ると, スヴァトスラフ [C4323] とこのウラジーミル [C4321] の結婚式が, ノヴゴロド=セヴェルスキイで同時に行われた可能性も考えられる。

302) ウラジーミル [C4321] は, 1185 年 5 月の父イーゴリ [C432] のポロヴェツ討伐遠征に従軍して捕虜になっており (上注 189), 囚われのポロヴェツ人の地で, コンチャクの娘と結婚し, 赤子も生まれたことになる。

303) イーゴリ [C432] が, 息子ウラジーミル [C4321] のためにノヴゴロド=セヴェルスキイ (もしくはプチヴリ) で, 諸公を招いて結婚と赤子誕生の披露宴を行ったということ。

304) 11 月 26 日はロシア固有の聖ゲオルギオスの祝祭日で, ヤロスラフ賢公の守護聖人に献堂したキエフのゲオルギイ教会の祝聖 (1051-1054 年) を記念して定められたものである。

305) ロスロフ主教ルカは, キエフ府主教に対するフセヴォロド [D177:K] の強権的働きかけによって 1184 年 3 月に主教に叙任されており, フセヴォロドの側近的な存在だった (上注 69 参照)。

306) この「祖父」はユーリイ手長公 [D17] を指している。

307) 「ヤコフ」については上注 292 を参照。

308) フセヴォロド [D177:K] の妃で, ヴェルフスラヴァの母親にあたるこの公妃 (княгиня) は, 『ラヴレンチイ年代記』 1206 年の死亡記事によると, マリアという名であった [ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 424]。

309) この段落の, ヴェルフスラヴァの結婚に関する記事は, 直前の段落の記事と同様に, フセヴォロド [D177:K] の視点から書かれたスーズダリ資料を明らかに使っており, 機械的に編集したために, 前後のつながりが悪くなっている。

その年の冬<sup>310)</sup>、スヴァトスラフ [C411:G] は自分の姻戚のリューリク [J2] と協議して、二人は黒頭巾族と軍司令官ロマン・ネズディオヴィチ<sup>311)</sup> (Роман Нездилович) を、〔ポロヴェツ人の〕移動幕舎を〔掠奪すべく〕ドニエプル川対岸へと派遣した。そして、ドニエプル川の対岸で移動幕舎を掠奪し、大いなる栄光と名誉をもって帰還した。この時、ポロヴェツ人はドナウ川方面へ行っており<sup>312)</sup>、自分たちの幕舎にはかれら〔ポロヴェツ人〕がいなかったのである<sup>313)</sup>。

## 6696 [1188] 年

ウラジーミル [A12111] はがガーリチの地を公として支配したが、かれはたいそう飲酒を好み、家臣たちと協議することを好まず、司祭から妻を奪い取って自分の妻とした。その女からは二人の息子が生まれた<sup>314)</sup>。【660】

---

310) 1187/1188年の冬のこと。

311) この「ロマン・ネズディオヴィチ」は、キエフ公スヴァトスラフ [C411:G] が命じた 1185 年春のポロヴェツ人討伐遠征でも指揮をとっており（上注 141 参照）、スヴァトスラフに仕える黒頭巾族（ベレンディ人）出身の軍司令官と考えられる。

312) このポロヴェツ人のドナウ川方面行きは、その頃のブルガリアで発生した動乱に関連している。ポロヴェツ（クマン）人出身説もあるアセンとベタル兄弟の反ビザンツ蜂起（1185 から始まり第二次ブルガリア帝国の樹立につながる）の際に、ドナウ川流域に居住するポロヴェツ人は、1186 年秋以降になるとドナウ川を越えて兄弟の援軍として参加するようになり、さらに、ビザンツ帝国の支配が及ばなくなったトラキアや黒海沿岸地域に、多数のポロヴェツ人が侵入して掠奪を行った [Fine 1994: p. 15]。また、1187 年春の戦闘では、「スキチア（クマン）」人の将軍が指揮をとるまでになっていた [Vásáry 2005: pp. 42-43]。

313) ポロヴェツ人戦闘員がドナウ川を渡って出払っていたから、掠奪が成功したという文脈から見て、このロマン・ネズディオヴィチの遠征は、ドナウ川に近いドニエプル川下流・河口域（ルカモリエ地域）のポロヴェツ人居住地を襲撃した可能性が高い [Pritsak 1982: p.365]。ただし、キエフやロシ川流域から見て「ドニエプルの対岸」（за Днепро́мъ）とは、左岸を指すことから、ドニエプル左岸下流域（アゾフ海沿岸）のルカモリエ・ポロヴェツ人の冬営地を襲ったということも考えられる。

314) この「二人の息子」は長男がヴァシリコ (Василько)[A12111] で、以下の記述によればロマン [I11] の娘と結婚しており（下注 318）、次男はウラジーミル = イワン (Владимир-Иван)[A12112] で、1218 年の時点でハンガリーに亡命しているガーリチの公位の請求者として史料に言及されている [Войтович 2006: С. 351]。

ヴラジミル [=ヴォルィンスキイ] のロマン・ムスチスラヴィチ<sup>315)</sup> [I11] は、自分の娘<sup>316)</sup> をかれ〔ウラジーミル [A12111]〕の年長の息子<sup>317)</sup>〔ヴァシリコ [A12111]〕に嫁がせて、かれ〔ウラジーミル〕の姻戚となった<sup>318)</sup>。

ところが見よ、ロマン [I11] は、ガーリチの家臣たちが、自分たちの公〔ウラジーミル [A12111]〕とその横暴さのゆえに良い関係を結んでいないことを知った。なぜなら、かれ〔ウラジーミル〕は、誰かの妻や娘を気に入ると、これを暴力で奪い取っていたからである<sup>319)</sup>。ロマン [I11] は、恐れることなくガーリチの家臣のもとに使者を派遣し、かれらが自分の公〔ウラジーミル〕に反抗するよう教唆した。かれ〔ウラジーミル〕がその父の地から追放され、自分が公として迎え入れられることを望んだのである。

ガーリチの家臣たちは、ロマン [I11] の助言を受け入れ、自分たちの部隊を集めると、十字架〔接吻をして〕誓いを立て、自分たちの公を討つべく立ち上がった。しかし、公を捕らえたり、殺したりまでするつもりはなかった。なぜなら、このはかりごとには全員が参加したわけではなく、ウラジーミル [A12111] の味方〔の家臣たち〕もいたからである。

こうして、〔家臣たちは〕合意すると、自分たちの公〔ウラジーミル [A12111]〕に使者を遣ってこう言った。「公よ、われらはあなたを討つために立ち上がったのではありません、われら

---

315) ロマン [I11] は、1170 年にそれまで公支配していたノヴゴロドを退去し、ヴラジミル=ヴォルィンスキイへと向かった〔イパーチイ年代記 (7) : 注 47〕。それ以来、本年代記にはかれの消息は記されていないが、ヴラジミル=ヴォルィンスキイで着実に公として支配を固めていたと考えられる。

316) ロマン [I11] は、この時点で 40 歳弱の年齢であり、結婚年齢に達した娘もいたことが分かる。以下に見るように娘の名は「フェオドラ」である (下注 324 参照)。

なお、ウラジーミル [A12111] は 1173 年に父ヤロスラフ [A1211] に追放されて各地を転々としていたときに、ロマン [I11] の支配するヴラジミル=ヴォルィンスキイにも亡命先を求めたが、断られた経緯がある (上注 110 参照)。そのため、ウラジーミル [A12111] はロマン [I11] にとりわけ好感を持ってはいなかったはずであり、この結婚は、ロマン [I11] の側から積極的に働きかけたものだろう。

317) ウラジーミル [A12111] は 1166 年 (もしくは 1167 年) にスヴァトスラフ [C411:G] の娘ボレスラヴァと結婚しているが〔イパーチイ年代記 (6): 242 頁, 注 315〕二人の間に子供はいなかったようである。この、「かれ〔ウラジーミル〕年長の息子」(сын его... старший) とは文脈から見て、側妻とした「司祭の妻」との間の「二人の息子」(上注 314) のうちの長男と考えることができる。この長男は、後の年代記の記述でヴァシリコ (Василько)[A12111] と呼ばれることになる。

318) のちの、ロマン [I11] による積極的なウラジーミル [A12111] 追放工作を見ると、この結婚は、ロマン [I1] が娘の結婚による姻戚関係を利用して、ガーリチの支配権を奪う意図から、あらかじめ仕組まれたものと考えてもよいだろう。

319) ウラジーミル [A12111] の暴政については、『ヴィンセント・カドゥベクのポーランド年代記』にも詳しく描写されており、ウラジーミルの教会への瀆聖の行為について触れ「聖なる聖母就寝の日〔8 月 15 日 (1188 年)〕でさえも聖母を侮辱する神をも恐れぬ汚辱の行為がなされた」としている [Древняя Русь-Хрестоматия Т. 4: С. 313]。



は、司祭の妻だった女などに拝礼することは嫌です<sup>320)</sup>。この女を殺したい<sup>321)</sup>。そして、われらは、あなたが望むところから、〔結婚相手に相応しい〕女を連れて来ましょう。このように言ったのは、〔家臣たちが〕、かれ〔ウラジーミル〕が司祭の妻を手放さないことを知った上で、何とかかれを追放しようとして、このような脅しをかけたのだった。かれ〔ウラジーミル〕は恐ろしくなっていて、多くの金・銀を持つと、従士たちとともに、妻と二人の息子<sup>322)</sup>を連れて、ハンガリーの王<sup>323)</sup>のもとへと逃げて行った。

ガーリチ人は、ウラジーミル・ヤロスラヴィチ [A12111] から、フェデラ・ロマノヴナ (Федера Романовна) を取り上げ<sup>324)</sup>、ロマン [I11] を〔ガーリチの公として〕招請するための使者を派遣した。ロマン [I11] は、兄弟のフセヴォロド<sup>325)</sup> [I12] に **【661】**〔ヴォルニニの〕ヴラジミルを完全に譲り渡して、かれに十字架接吻の〔誓約〕して「自分はもはやヴラジミルは要らない」と言った。そして、ロマン [I11] はガーリチに入城し、ガーリチの公座に就いた<sup>326)</sup>。

ウラジーミル [A12111] は、〔ハンガリー〕王のもとに到着した。王はウラジーミル [A12111]

320) この記述からみて、「司祭の妻」(попадья)は身分は低いとはいえ、ウラジーミル [A12111] の正式な妃であり、かれの最初の妻ボレスラヴァ (上注 317) は、この時点では亡くなっていたようである。

321) ガーリチでは、1171年に、ウラジーミル [A12111] の父親ヤロスラフ八智公 [A1211] の側妻「ナスターシカ」が市民の手で火刑の処された経緯があり (〔イパーチイ年代記 (7) : 182 頁, 注 80]), この発言をしたガーリチの家臣たちに、この時の事件のことが念頭にあったことは確かである。

322) 「妻と二人の息子」については注 314 を参照。

323) 当時のハンガリー王はベーラ三世 (在位 1173 ~ 1196 年) で、ウラジーミル [A12111] の父方の祖母はハンガリー王家の出身 (カールマン一世の娘) であり、さらに、ウラジーミル [A12111] の姉妹は、ハンガリーの先王でベーラ三世の兄イシュトバン三世 (1172 年没) の王妃だった。ウラジーミル [A12111] このような親族・姻族関係を頼って、ハンガリーへと亡命したのである。

324) 「フェデラ・ロマノヴナ」(Федера Романовна) は、女性名「フェオドラ (テオドラ)」(Феодора) の民間的呼称で、ロマン公 [I11] が、ウラジーミル [A12111] の息子 (ヴァシリコ [A12111]) に嫁がせた自分の娘 (上注 317) を指している。「取りあげた」(отняша) とあることから、ガーリチの在地貴族たちは、かの女とウラジーミル [A12111] の息子 (ヴァシリコ [A12111]) との結婚を解消させ、かの女の身柄を保護したということだろう。

325) このフセヴォロド・ムスチスラヴィチ [I12] については本年代記初出。かれは、それまではヴラジミル=ヴォルィンスキイから南へ 54km ほどのところにある付属城市ベルズ (Белз) に公座を持っていたが、豊かな城市を獲得したことになる。1195 年にヴラジミルで没している [Войтович 2006: С. 490]。

326) このガーリチからのウラジーミル [A12111] 追放劇はロマン [I11] とガーリチ貴族の陰謀が成功したものとして描かれているが、同時代に記されたポーランドの『ヴィンセント・カドウバクのポーランド年代記』(Chronica seu originale regum et principum Poloniae) では、カジミェシュ王がロマンに「ガーリチ王国を恵与した」として、ポーランドの支援によるものとして描いている [Древняя Русь-Хрестоматия Т. 4: С. 313]。以下に見るようにロマンは追放されたのちに、ポーランドに向かっていくことから、カジミェシュ王の支援の可能性も否定できない。

を受け入れ、全軍を率いてガーリチへと軍を進めた。

ロマン [I11] は、王がすでに〔カルパチア〕山脈を越えようとしていることを聞くと、かれ〔王〕に対抗することができず、ウラジーミル [A12111] から奪い取った財産を持って〔ヴラジミル=ヴォルィンスキイへ向けて〕逃げ出した。〔ロマンは〕ガーリチ人とともに、ガーリチからヴラジミル [=ヴォルィンスキイ] へと向かった。

〔ロマンの〕兄弟のフセヴォロド [I12] は、かれ〔ロマン〕を受け入れずヴラジミル [=ヴォルィンスキイ] の城内に立て籠もった。そこで、かれ〔ロマン〕自身はポーランド人のもとへと向かった<sup>327)</sup>。〔ロマンは〕その妻<sup>328)</sup>を、ガーリチ人とともにヴルーチイ (Вручии)<sup>329)</sup> へ、さらにピンスク<sup>330)</sup> (Пинеск) へと行かせた。ロマン [I11] はポーランドにおいては支援を得られず、自分の岳父である<sup>331)</sup> リューリク [J2] のいるベルゴロドへと向かった。〔ロマンが〕ガーリチに移るときに連れてきた家臣たちも同行した。

〔ハンガリー〕王はガーリチ〔の城市〕に入城した。かれは、ウラジーミル [A12111] をこの公として据えず、すべての権限をガーリチ人に与えると、自分の息子の **【662】** アンドラーシュ<sup>332)</sup> [二世] を代官として置いた。そして、〔王は〕ウラジーミル [A12111] を再びハンガリー

---

327) ロマンはまず、姻戚であるポーランド大公カジミェシュ三世 (下注 338) を頼ったが、この時点では援助を得られなかったと解釈できる。

328) このロマン [I11] の「妻」(жена) はリューリク [J2] の娘のこと。以下に、リューリク [J2] はロマン [I11] の「岳父」(тесть) とあり (下注 331)、また本年代記 1196 年の記事で「リューリクの婚 (зять) であるロマン・ムスチスラヴィチ [I11]」という記述からそのように推定される。

なお、ロマン [I11] とリューリクの娘の結婚は、1170 年～1180 年の間に成立し、ロマン [I11] が、ヴラジミル=ヴォルィンスキイからさらに支配地を拡大するために、スモレンスク諸公 (ロスチスラフ一族) の支持を得る意図から行われたとされている [Войтович 2006: C. 472]。

329) このオヴルチ (ヴルーチイ) はリューリク [J2] の拠点城市だったことから (上注 281)、ロマン [I11] の妻 (リューリク [J2] の娘) は父親の庇護と援助を求めて、この城市に亡命したのだろう。なお、このオヴルチには、ガーリチを追放されたオレーグ [A12112] がすでに亡命していたことから (上注 282) 落ち着くことができず、すぐにこの地を離れたのではないか。

330) ピンスク (Пинеск) は、プリピャチ川の支流ピナ (Пина) 川河口に位置する城市で、当時はヤロスラフ・ユーリエヴィチ [B3212] と兄弟のグレーブ [B3215] が公支配をしていた。二人はリューリク [J2] の義理の兄弟 (шурин) だったことから上注 285 参照)、リューリクの姻戚関係をたよって、ロマン [I11] は妻の庇護を依頼したのだろう。

331) 上注 328 を参照。

332) 「アンドラーシュ」(Андрѣи) は、ハンガリー王ベーラ三世の年少の息子で、生年が 1177 年と推定されており、当時は 11 歳ほどと幼年だった。かれの代官 (посадник) としての統治は名目的なもので、実際にガーリチに滞在した痕跡もなく、王が派遣した軍司令官が実権を握っていたと思われる。

へと連れ帰り、その財産を實力で取り上げ、かれをその妻<sup>333)</sup>とともに塔の中に閉じ込めた<sup>334)</sup>。

このようにして、〔ハンガリー〕王は大いなる罪を犯した。ウラジーミル [A12111] に十字架接吻で〔助けることを誓った〕にもかかわらず〔違反したのである〕。だが、神はかれ〔ウラジーミル〕をそのような苦境から救った。

ロマン [I11] は自分の岳父リューリク [J2] に対して、ガーリチへの討伐遠征を申し入れてこう言った。「ガーリチ人は、わたしに公座に就くよう呼びかけています。あなたの息子ロスチスラフ [J21] とともに、わたしを〔ガーリチへの〕遠征に行かせて下さい」。リューリク [J2] は、かれ〔ロマン [I11]〕を、自分の息子〔ロスチスラフ [J21]〕および軍司令官スラヴェン・ポリソヴィチ<sup>335)</sup> (Славен Борисович) とともに〔ガーリチへと〕派遣した。

ロマン [I11] は、戦いの前にプレスネスク<sup>336)</sup> (Прѣсньск) へ使者を遣り、プレスネスク人を先に〔軍を進めるように〕と言った。かれら〔プレスネスク人〕は自分たちの城内に立て籠もった。ハンガリー人とガーリチ人は、プレスネスクに攻撃を仕掛けて〔住民を〕捕虜に獲った。〔捕虜にされなかった者たちは〕逃げ出した。

ロマン [I11] はこのことを聞いて、自分の義理の兄弟〔ロスチスラフ [J21]〕を帰郷させ<sup>337)</sup>,

333) 上注 314 の「司祭の妻」を指している。

334) ウラジーミル [A12111] 投獄の経緯については、『ヴィンセント・カドウベクのポーランド年代記』も「王〔ベーラ三世〕は亡命者〔ウラジーミル〕への同情の念からというより、〔ガーリチの〕王国を占有しようという望みから、就位した王〔ウラジーミル〕を追放して、みづから領有し、自分の息子を〔代官に〕据えた。そして、この亡命者に邪魔されないようにと、鎖を掛けて、ハンガリーの牢獄に閉じ込めた」[Древняя Русь-Хрестоматия Т. 4: С. 313] とほぼ同じ描き方をしている。なお、幽閉されたのはハンガリーの首都ブダ城の城塔と考えられる [Войтович 2006: С. 350]。

335) 「スラヴェン・ポリソヴィチ」(Славен Борисович) はリューリク配下の千人長で、1188 年にリューリクが息子ロスチスラフ [J21] の嫁取りのためにスーズダリに派遣した使節団の一人だった (上注 287)。そのような経緯もあり、まだ年少 (17 歳) のロスチスラフ [J21] の補佐役として派遣されたのだろう。

336) 「プレスネスク」(Прѣсньск) はフレーブニコフ写本では Плѣсньск と綴られており、こちらが正しい。西ブグ川源流に近い場所にあった城砦で、ガーリチからだと北北東に 90km ほど離れた、現在のリヴィウ州ピドギリツィ (Підгірці) 村近くのプリスネンスコ (Пліснесько) に同定されている。ヴラジミル=ヴォルィンスキイ公領とガーリチ公領の境界地点にあった。

337) 「義理の兄弟」(шюрин) は、ここではロマン [I11] にとっての妻の兄弟を意味し、ロスチスラフ [J21] を指している (上注 328 参照)。ロスチスラフ [J21] は、前年に結婚したのち、トルチェスクを所領として得たか (下注 340)、あるいは父親リューリク [J2] のベルゴロドにとどまっていたと考えられる。

自分はポーランドのカジミェシュ<sup>338)</sup> [二世] のもとに行った。そして、ポーランドからヴラジミル [=ヴォルィンスキイ] の城市へと向かった。[しかし], かれの兄弟 [フセヴォロド [I12]] は, かれ [ロマン] をヴラジミル [=ヴォルィンスキイ] へと入れなかった。ロマン [I11] は, ポーランド人と自分の母方の伯叔父ミェシコ<sup>339)</sup> (Межъко) とともに [ヴラジミルへと] やって来たのだった。しかし, 何も成功するすることはなかった。

[そこで, ロマンは]自分の岳父リューリク [J2] のところへ行った。リューリク [J2] は, かれ [ロマン] にトルチェスク (Торцькыи) [の城市を] 与えた<sup>340)</sup>。

他方, [リューリクは], [ロマンの] 兄弟であるフセヴォロド [I12] に対して, 威嚇のための [大部隊を] 派遣した。フセヴォロド [I12] はリューリク [J2] を恐れて, 兄弟のロマン [I11] にヴラジミル [=ヴォルィンスキイ] を譲り渡した。こうして, ロマン [I11] はヴラジミルへ行き, フセヴォロド [I12] はベルズ<sup>341)</sup> (Белз) へと行った。

## 6697 [1189] 年

[ハンガリー] 王 [ベーラ三世] は, [キエフ公] スヴァトスラフ [C411:G] に使者を遣って言った。「兄弟よ, そなたの息子をわしのところに派遣せよ。わしは約束したことを実行するつも

---

338) 「カジミェシュ二世」(Казимир) は, 当時ポーランド大公 (在位: 1177 年 ~ 1190 年) で, ロマン [I11] にとっては, 母方の伯叔父であった (ロマンの父ムスチスラフ [I1] は, カジミェシュ二世の姉妹アグネシカと 1151 年に結婚している [イパーチイ年代記 (6): 261 頁, 注 430]) ことから, 親族関係を頼って, カジミェシュのいるクラコフへ身を寄せたのである。

339) 「母方の伯叔父ミェシコ」(Межъко уи) とは, ミェシコ三世 (老公) (1126/27 年 ~ 1202 年) のことで, ロマン [I11] にとっては, カジミェシュ二世と同様に母方の伯叔父にあたる。当時は 60 歳を超えた高齢だった。かれは, 1177 年に弟カジミェシュ二世の手でポーランド大公位を追われた後は, ヴィエルコポルスカ公としてポーランドを分立統治していた。おそらくロマンは, ミェシコが派遣した援軍を連れてヴラジミル=ヴォルィンスキイに来たのだろう。

340) ロシ川流域の城市トルチェスクは, 1175 年にそれまで拠点としていたミハルコ [D175] が (ロスチスラフ一族) に追い出されて以降 [イパーチイ年代記 (7): 221 頁, 注 330] は, リューリク [J2] の支配下にあったと考えられる。リューリク [J2] はここでロマン [I11] にこの城市を「与えて」(да ему) いるが, これは避難所としての一時的なもので, その後, トルチェスクはリューリクの息子ロスチスラフ [J21] の所領となっている (下注 375)。

341) 「ベルズ」については上注 325 を参照。フセヴォロド [I12] は, 豊かな城市ヴラジミル=ヴォルィンスキイをあきらめて, 本来の拠点城市 (おそらく相統領地) へ引き返したことになる。

りだ。わしがそなたに十字架接吻で〔誓った〕のだから<sup>342)</sup>。スヴァトスラフ [C411:G] はこのことをリュウリク [J2] には伝えなかった。自分にガーリチが与えられることを望んでいたからである。そして、自分の息子グレーブ<sup>343)</sup> [G3] を〔ハンガリー〕王のもとへと派遣した。

しかし、リュウリク [J2] はこのことを知って、かれ〔グレーブ [G3]〕を追うようにとスヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ<sup>344)</sup> [D1154] に命令を発し、これに自分の家臣たちを同行させた。また、スヴァトスラフ [C411:G] を非難する使者を派遣して、こう言った。「なぜそなたは自分の息子〔グレーブ [G3]〕を、〔ハンガリー〕王のもとに送ったのか、**[663]** わしの了解も得ずに。そなたは約束を破ったのだ」。

このようにして、大きな紛争となった。しかし、真に福なる神は悪魔を喜ばせることはなく、〔二人は〕十字架接吻〔の誓いを〕するために会合を持った。〔その会合で〕スヴァトスラフ [C411:G] はこう弁明した。「兄弟にして姻戚〔のリュウリク [J2]〕よ、わしが自分の息子〔グレーブ [G3]〕を派遣したのは、〔ハンガリー〕王をしてそなたに敵対させようとの意図からではない。わしは、自分の仕事のために〔息子を〕派遣したのだ。もし、そなたが<sup>345)</sup>、ガーリチへ〔ハンガリー勢の討伐に〕行くのなら、見よ、わしもそなたとともに〔行く〕用意がある」。それは、府主教<sup>346)</sup> がスヴァトスラフ [C411:G] とリュウリク [J2] の双方にこう言ったからだだった。「そなたたちの父の地を異族ども<sup>347)</sup> が奪い取っているのに、そなたたちが紛争をしているのは正しいことでしょうか」。

342) ハンガリー王ベーラ三世の、キエフ公フセヴォロド [C411:G] に対する「約束」については、これまで何の記述もない。ウラジーミル [A12111] を幽閉してガーリチを実質統治したベーラ三世は、ガーリチ領有を執拗に狙っているロマン [I11] =リュウリク [J2] 陣営に対抗するために、ルーシ内でこの陣営に対立的な立場にあるキエフ公スヴァトスラフ [C411:G] に接近し、かれとの同盟によってガーリチ支配を安定させようと策したのだろう。他方、スヴァトスラフ [C411:G] の側から見れば、長期的にはガーリチを領有するための好機でもあった。

343) グレーブ [G3] は、1181年にリュウリク [J2] の娘と結婚しているが（上注5）、父スヴァトスラフ [C411:G] のもとに、キエフか近郊の附属城市に住んでいたと考えられる。

344) この「スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ」（Святослав Володимирч）についての詳細は不明。もし諸公の一人だとすれば、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] の息子（その場合は [D1154]）である可能性がもっとも高いが、かれの活動についての記録はこの記事以外にはない。

345) 「そなたが～するのなら」はフレーブニコフ写本の読みを採用した。

346) 当時のキエフ府主教はニキフォル（Никифор）（在位1183年～1198年）だった。

347) 「異族ども」（иноплемьнци）はハンガリー人のことを指している。この語は通常は遊牧民について使われるが、ガーリチにハンガリーが攻めてきたときについてはハンガリー人にも用いられている。1152年にウラジミルコ [A121] 治下のガーリチにゲーザ二世率いるハンガリー人が攻めてきたときも、同様の用法がある（〔イバーチイ年代記（5）：242頁、注103〕参照）。

そこで、〔二人は〕協議をして、スヴァトスラフ [C411:G] は自分の息子たち<sup>348)</sup>とともに、リューリク [J2] は兄弟たちとともにガーリチへと出発した。全員がひとつの場所に集まると、ガーリチの領地について約定を行おうとした。スヴァトスラフ [C411:G] はリューリク [J2] にガーリチを引き渡し、自分はキエフ周辺のすべてのルーシの地を取ることを主張した。しかし、リューリク [J2] は自分の父の地<sup>349)</sup>を失うことが気に入らず、また、ガーリチを分割することも望まなかった。結局、〔二人は〕約定を結ばないまま、帰郷した。

その年、ガーリチの家臣たちは、ロスチスラフ・ベルラドニチチ (Берладничичь) [A12211] のもとに使者を派遣して、かれをガーリチ公として招聘した<sup>350)</sup>。かれ〔ロスチスラフ [A12211]〕はこれを聞いて喜び、ダヴィド [J3] に〔ガーリチの公となることについて〕許可を求めた。ダヴィド [J3] はかれを受け入れ〔て庇護していた〕からである<sup>351)</sup>。

〔ロスチスラフ [A12211] は〕急いでスモレンスクを發つと、ガーリチ地方の境界のところまでやって来て、ガーリチの二つの **〔664〕** 城市を占拠した。かれら〔ガーリチの家臣たち〕の助言を受けて、そこからガーリチへと向かった。ガーリチの家臣たちの考えは一つにまとまっていたわけではなかった。ある者たちの息子や兄弟たちは〔ハンガリー〕王〔ベーラ三世〕の側につき、別の者たちは王の息子〔アンドラーシュ〕を固く支持していた。

その時、〔ハンガリー〕王〔ベーラ三世〕は多数のハンガリー人部隊を息子〔アンドラーシュ〕の援軍のために派遣していた。ルーシの諸公を恐れていたのである。見よ、王子〔アンドラーシュ〕とハンガリーの軍司令官たちは、ロスチスラフ [A12211] が、ガーリチの家臣たちの助

---

348) 年少の息子たち、すなわちグレーブ [G3] とムスチスラフ [G1] を指すのだろう。

349) 「キエフ周辺のすべてのルーシの地」(вся руская земля около Киева)におけるリューリク [J2] にとっての「父の地」(отчина)とは、かれが拠点としていたベルゴロド及び、弟ダヴィド [J3] の息子もしくは自身の配下にあったヴィシエゴロドの城市を指している。また、やや離れたトルチェスク (上注 340) も含むかもしれない。リューリク [J2] は、これを失えば、キエフに対する影響力が低下し、スヴァトスラフ [C411:G] 亡き後に、キエフの公位を狙うことができなくなると考えたのだろう。

350) 「ロスチスラフ・ベルラドニチチ」(Берладничичь) は、1161 年にテッサロニキで没した (毒殺された) ([イパーチイ年代記 (6): 234 頁, 注 269]) イワン・ベルラドニク (Берладник)[A1221] の息子であり、父親とともに亡命生活を余儀なくされ、当時はスモレンスク [J3] のダヴィドの庇護を受けていた。ガーリチ人がかれを公として招聘したのは、ヤロスラフ八智公 [A1211] の血縁者 (従兄弟の息子) でありながら権力基盤がないことから、ガーリチの貴族層にとってはコントロールしやすい存在と考えられたのだろう。

351) ダヴィド [J3] は、1173 年にアンドレイ敬神公 [D173] によって「ベルラド」(Берладь) への追放を命じられており ([イパーチイ年代記 (7): 195 頁, 注 168])、おそらく、この追放の地でロスチスラフ [A12211] と知り合い、スモレンスクに帰国したときに引き取った可能性が高い。



言によってガーリチに進軍しているという報を受けた。王子はかれら〔ガーリチの家臣たち〕に忠誠を誓わせていなかったの、十字架接吻〔の自分への忠誠の誓いを〕かれらにさせようとした。正義の〔家臣たちは〕〔ロスチスラフが来ていることを〕知らずに十字架接吻〔による忠誠の誓い〕をし、不義の〔家臣たちは〕ハンガリー人を恐れて〔忠誠の誓い〕をした。

ロスチスラフ [A12211] はガーリチの部隊へ向かって行っただけ、小勢の従士団を連れただけであり、裏切りがあることを知らなかった。〔ロスチスラフは〕〔ガーリチの家臣たち〕が自分に約束したように、〔ガーリチの家臣たちは〕かれ〔ロスチスラフ〕の部隊を目にすれば、王子から離反するだろうと考えていたのである。ところが、かれの部隊へと駆けつけたのは、少数のガーリチの家臣にすぎなかった。そして、この〔家臣たち〕ですら、仲間〔の家臣たち〕が裏切ったのを見ると、自分の部隊をかれ〔ロスチスラフ〕のもとに近づけたものの、かれのところから離れ去ってしまった。

かれ〔ロスチスラフ〕の従士たちは、かれにこう言った。「公よ、かれらの裏切りをご覧なさい。退却しなさい」。かれ〔ロスチスラフ〕は言った。「兄弟たちよ、かれら〔ガーリチ貴族たち〕がわしに対して十字架接吻して何を〔誓ったか〕、お前たちは知っているはずだ。もし、かれらがわしの身柄を捕らえるようなことがあれば、神とかの十字架がかれらを裁くであろう。〔その十字架に〕かれらわしへ〔の忠誠を〕誓ったのだから。【665】 わしは、他人の地で〔義について〕迷うようなことをしたくない。自分の父の地で戦いに斃れることを望む」。〔ロスチスラフは〕こう自分の従士たちに語ると、ガーリチの部隊めがけて突進して行っただ。

ガーリチの部隊とハンガリー人は、かれ〔ロスチスラフ [A12211]〕を取り囲むと、馬から突き落とした。そして、重傷を負って息絶え絶えのかれを捕まえて、ガーリチへと運んで行っただ。

ガーリチ人たちは荒れ騒いでいた。ハンガリー人のもとからかれ〔ロスチスラフ [A12211]〕を奪い返して、かれを自分たちの公として受け入れることを望んでいたのである。ハンガリー人はこれを見て、かれ〔ロスチスラフ〕の傷口に毒薬を塗りつけた。そのためにかれは死んだ。そして、その遺体は修道院の聖ヨハネ教会<sup>352)</sup>に安置され、自分の祖父、自分の父のもとで〔眠った〕。

ハンガリー人は、ガーリチ人がルーシの公を求めているという、ガーリチ人の裏切りを知って、すべてについて暴力をもって行い始めた。そして、ガーリチの家臣の妻や娘たちを捕らえ

352) 「聖ヨハネ教会」(церковь святого Иоана)は現存せず、その所在については定説はないが、現在のクルイロス(Крылос)村の聖母就寝教会(上注271)と同じ場所とするもの、現在のモズレヴィイ川(Мозолевиий)右岸の「イヴァノスケ」と通称されている丘にあったとする説などがある[Пастернак 1998: С. 28-29]。

てきて、自分たちの寝所へ引き入れた。また、神の御堂や住居を馬小屋にするなど、他にも様々な暴力を振るった。ガーリチ人はこれをひどく嘆き始め、自分たちの公〔ロスチスラフ [A12211]〕を追い出したことを大いに後悔した。

## 6698 [1190] 年

ユーリイ [B321] の息子で、リューリク [J2] の義理の兄弟にあたるスヴァトポルク<sup>353)</sup> [B3213] が逝去した。4月19日のことだった。かれの曾祖父である大いなる公スヴァトポルク [B3] が創建した **【666】** 黄金の円蓋の聖ミハイル教会<sup>354)</sup> に〔遺体は〕安置された。

その年、ベルゴロドの主教マクシム<sup>355)</sup> が逝去した。リューリク [J2] は、かれの代わりに、自分の聴罪司祭でありヴィドフイチの聖ミハイル〔修道院の〕典院アドリアンを主教として任命した<sup>356)</sup>。

その年、ウラジーミル・ヤロスラヴィチ [A12111] が〔幽閉されていた〕石塔から脱出して<sup>357)</sup>、ハンガリーから逃げ戻ってきた。王がかれを、司祭の妻とかれらの二人の子供とともにそこに監禁していたのである。石塔の中に天幕を張って住んでいたのだった。かれ〔ウラジーミル〕はその天幕を切り裂き、その端切れで縄をなつて、それにぶら下がって地上へと降りたのだった。警備兵の中にかれの味方が二人おり<sup>358)</sup>、この二人がかれ〔ウラジーミル〕をドイツ

---

353) スヴァトポルク [B3213] は当時トゥーロフ公。リューリク [J2] は、ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] の娘アンナ (スヴァトポルクの姉妹にあたる) と 1172 年頃に結婚しており [Войтович 2006: C. 520] (上注 285, 286 も参照)、リューリクにとってはスヴァトポルクは「義理の兄弟 (妻の兄弟)」(шюрин) に当たっている。

354) キエフの教会で大スヴァトポルク [B3] の一族にとって菩提寺になっていた ([イパーチイ年代記 (1): 253 頁, 注 55] 参照)。

355) ベルゴロド主教マクシムについては、上注 296 を参照。

356) この典院アドリアンのベルゴロド主教叙任によって、キエフのミハイル修道院の新しい典院としてモイセイが就任し、本年代記の編集に着手することになる。

357) ウラジーミル [A12111] と妻がハンガリー (おそらくブダ城内の) の塔に幽閉されるに至る経緯については、上注 334 を参照。

358) ウラジーミル [A12111] が逃亡に際して警備兵を味方につけたことについては、『ヴィンセント・カドウバクのポーランド年代記』に「かれ〔ウラジーミル〕は警備兵を贈物によって惑わし、ついに密かに逃亡した」と同様の記述がある [Древняя Русь-Хрестоматия Т. 4: С. 313]。

の地のドイツの皇帝<sup>359)</sup>のところに連れて行った。皇帝は、かれ〔ウラジーミル〕がスーズダリの大公フセヴォロド [D177:K] の姉妹の息子であることを知って、かれを大いなる親愛と名誉をもって受け入れた。そして、自分の家臣をかれに同行させて、ポーランドのカジミェシュ王のもとへかれを送り出した。〔皇帝は〕かれ〔カジミェシュ王〕にガーリチを〔ウラジーミルのために〕取り戻すよう命じた。それは、毎年、銀 2000 グリヴナを皇帝に献上するという約束を〔ウラジーミルが〕自らの意志でしたからだった。

カジミェシュ〔三世〕は、かれ〔ウラジーミル〕に自分の家臣ミクライ (Миклай) を同行させ<sup>360)</sup>、かれ〔ウラジーミル〕をガーリチへと送り出した。ガーリチの家臣たちは、大いなる喜びをもって自分たちの公で祖父の代からの後継者である〔ウラジーミル〕を出迎えた。そして、〔アンドラーシュ〕王子を自分たちの地から追放した。ウラジーミル [A12111] は自分の祖父と**[667]** 自分の父の公座に座した。主の変容の祭日<sup>361)</sup>のことだった。

かれ〔ウラジーミル [A12111]〕はスーズダリの自分の母方の叔父<sup>362)</sup>のフセヴォロド [D177:K] のもとに使者を遣って、請願した。「主人なる父よ、ガーリチをわたしの支配下に置いて下さい。わたしは、全ガーリチとともに、神のもの、あなたのものです。わたしは、いつもあなたの御意のままです」。

スーズダリのフセヴォロド [D177:K] は、すべての諸公とポーランド王に使者を派遣して、自分の姉の息子〔ウラジーミル〕に対して、その支配下〔の領地を〕要求しないことを、十字架接吻で〔誓わせた〕。こうして、ウラジーミル [A12111] はガーリチの〔公座〕を確固たるものとした。そのときから、かれ〔ウラジーミル〕に反対する者はいなかった。

その年、ドイツの皇帝は全土の軍隊を率いて、主の墳墓を守る戦いのために遠征を始め

359) 「ドイツの地のドイツの皇帝のところ」(земля немѣчкыя ко цевеви нѣмѣцкому) は、神聖ローマ皇帝フリードリヒ一世バルバロッサ (赤髭王) (在位 1155-1190 年) を指している。なお皇帝フリードリヒは、第三次十字軍の遠征の途上の 1189 年夏頃にハンガリーに滞在しており、皇帝とウラジーミルの会見は、ハンガリーで行われたと考えられる (下注 363 も参照)。

360) この「ミクライ」(Миклай) は、『ヴィンセント・カドウベクのポーランド年代記』(«Польская хроника» Винцентия Кадлубека) では、カジミェシュ王のクラコフの宮廷における「筆頭の宮廷官ニコラウス」(palatii princeps Nicolaus) として、ウラジーミル [A12111] のガーリチ行き (遠征) に同行したことが記されている ([Древняя Русь-Хрестоматия Т. 4: С. 312, 314])。

361) 「主の変容祭」(на Спасовъ день) は (1190 年) 8 月 6 日に相当する。

362) フセヴォロド [D177:K] がウラジーミル [A12111] の母方の叔父にあたることについては上注 114 を参照。

た<sup>363</sup>)。かれ〔皇帝〕のもとに主が天使の姿で現れ、遠征をするよう命じたのである。かれらは〔遠征地に〕到着すると、神を侮辱するハガルの民〔イスラム教徒〕と激しく戦った。これは、神が自らの世界の全体に向けて怒りを発したからだった。なぜなら、全土がわれらの悪行に満ち、われらの罪ゆえに、〔神が〕われらにこれらすべて〔の悪〕をこうむらせ、真の裁きをなしたからである。その裁きは正しく、〔神は〕ご自身の聖物がある場所を異族に引き渡したのだから。

このドイツ人たちは、あたかも聖なる殉教者のように、自分たちの皇帝とともに、キリストのために自らの血を流したのだった。

これについては、われらの主なる神はしるしを顕し給うた。誰かが異族どもとの戦いの中でかれらの手で殺されたときでも、三日後にその遺体は棺から主の天使によって取り上げられて姿を消したというのである。【668】他の者たちもこれを見て、キリストのために苦しみを受けようと努めた。こうして、主の御心は実現され、かれらは殉教者の尊顔を得て、選ばれた〔聖人たちの〕群れに加わることができたのである。

これも主がわれらの罪ゆえになしたことであり、すべての世界に懲罰を与えて、再び〔われらに〕警告したのである。われらが、罪を犯し、法を犯したのであり、かれ〔主〕の前で弁明することはできないことを。なぜなら、神の智慧を知ることは何人もできず、その神秘の御業を知ることもできないのだから。

その年、スヴァトスラフ [C411:G] は、自分の孫ダヴィド・オリゴヴィチ<sup>364</sup> [G51] をイーゴ

---

363) フリードリヒ一世赤髭王 (バルバロッサ) を総指揮官として 1189 年に開始された第三次十字軍は、この年の春にラチスボンからドナウ川に入り、陸路ハンガリー、セルビア、ブルガリアの領土を通過して (この時、皇帝はベラ三世に遠征への参加をもちかけ、2000 人のハンガリー軍が加わっている)、夏にはビザンツ領に入った。秋にはコンスタンティノポリスに向かうが、ビザンツ皇帝イサキオスとの交渉が決裂して、コンスタンティノポリスを破壊。1189 年 11 月末にアドリアノポリスを占領したのちビザンツと和解した。その後、陸路パレスチナへ向かい、アナトリア (現トルコ領) にはいると、アクシェヒル、キルキア・アルメニア王国領内に入る。途上、サラジン等のイスラム騎馬部隊の迎撃にあい苦戦しながら進み、1190 年 5 月 18 日には現トルコのコンヤを占領。6 月 10 日にセリフ川に到着し、渡河していたときに、フリードリヒ一世は川に落ちて溺死したとされている [ドイツ史 (1)1998 : 224 ~ 226 頁]。

364) ダヴィド [G51] の父親オレーグ [G5] は、1176 年の記事で、ムーロム公アンドレイ=ユーレイの娘と結婚していることが確認でき [イパーチ年代記 (7) : 231 頁, 注 392]、かりにこの年に息子が生まれていたらとすれば、ダヴィド [G51] はこの頃およそ 14 歳ということになり、ぎりぎりの結婚年齢ということになる。

なお、ダヴィド [G51] は 1196 年 3 月のヴィテブスクの戦いで若くして戦死している (下注 495 参照)。

リ [C432] の娘と結婚させた<sup>365)</sup>。

その年、スヴァトスラフ [C411:G] は、自分の姻戚のリューリク [J2] とともに、ルーシの地を安んじ、自らの意志のとおり、ポロヴェツ人と和を結んだ<sup>366)</sup>。

そして、二人は合議して、船でドニエプル川を〔下って〕テスメニ川<sup>367)</sup> (Тесмень) 河口まで狩猟に出かけた。そこで狩猟を行い、多くの獣を捕獲した。このように遊興をして親愛を深め、何日も宴を張って、帰郷した。

その年の秋、スヴァトスラフ [C411:G] は誣告を真に受けて、トルク人の侯クントウヴディ<sup>368)</sup> (Кондудый) を逮捕した。しかし、〔スヴァトスラフの〕姻戚のリューリク [J2] が、かれ〔スヴァトスラフ〕に使者を遣ってそのことについて抗議した。なぜなら、〔クントウヴディは〕剛胆で、ルーシにとって有用な人物だったからである。スヴァトスラフ [C411:G] は自分の姻戚であるリューリク [J2] の言を聞き入れて、かれ〔クントウヴディ〕に誓約をさせてから解放した。

かれ〔クントウヴディ〕は、自分が受けた辱めを我慢することなく、ポロヴェツ人のもとへ、ポロヴェツ人の侯トグリイ<sup>369)</sup> (Тоглый) のもとへと行った。ポロヴェツ人はかれ〔の到来を〕喜び、【669】ルーシの地のどこを攻めるべきかについて、かれとともに協議し始めた。そして、かれ〔クントウヴディ〕はかれら〔ポロヴェツ人〕を導いて、掠奪するようけしかけた。それほどスヴァトスラフ [C411:G] に対して、自分が受けた辱めの報復を行いたかったのである。

---

365) スヴァトスラフ [C411:G] は、キエフ公としての自分の地位を固めるために、息子たちを周辺諸公の公女たちと結婚させて (ムスチスラフ [G1] はスーズダリ公国、グレーブ [G3] はスモレンスク公国) 姻戚関係をつくってきた。このノヴゴロド=セヴェルスキイ公イーゴリ [C432] の娘と自分の孫 (ダヴィド [G51]) との政略結婚も、そのようなスヴァトスラフの婚姻政策の一環である。

366) 以下の記事の展開から見て、ルコモリエ=ポロヴェツ (右岸ポロヴェツ人) 部族の族長トルグイ (Толгый) (下注 369) の一族と和を結んだと考えられる。和議を行った場所は、これまでのポロヴェツ諸部族との和議の慣習から見て、カーネフの城市と考えられる ([イパーチイ年代記 (5): 283 頁, 注 304] などを参照)。

367) テスメニ川 (Тесмень) は、ドニエプル右岸の支流で、現在のチャスミン川 (Тясмин) に相当する。その河口は、ドニエプル川を下ってキエフのから 230km も離れた場所にあり、カーネフからも 120km ほど下流にある。フセヴォロド [C411:G] とリューリク [J2] の一行は、ポロヴェツ人と和議を結んだあと、その足でドニエプル川を下って良好な狩場であるテスメニ川河口に至ったと考えられる。

368) 「クントウヴディ」 (Кондудый) は、黒頭巾族 (トルク人) の軍司令官。前注 64 を参照。

369) 「トグリイ」 (Тоглый) は、Толгыи, Игоглыи などとも表記されるルコモリエ・ポロヴェツ人 (ドニエプル川=ブク川河口地帯) の有力な族長。クントウヴディは、ドニエプル川河口地帯まで逃げたのだろう。上注 100 を参照。

ポロヴェツ人はかれ〔クントウヴディ〕との協議に従って、かれ〔クントウヴディ〕のために誓約<sup>370)</sup>を踏みにじった。そして、〔ポロヴェツ人たちは〕乗馬すると、進軍して、チュルナエフ<sup>371)</sup> (Чюрнаев) の城砦を襲撃した。そして、防柵を撃ち破って、居館を焼き払い、かれ〔クントウヴディ〕の財産を奪い、かれ〔クントウヴディ〕の二人の妻を捕まえて<sup>372)</sup>、多くの奴隷を捕獲した。それから、〔ポロヴェツ人たちは〕ヴィシ川<sup>373)</sup> (Вись) を遡行し、そこで自分たちの馬を休ませてから、さらにポロヴィ<sup>374)</sup> (Боровый) へと向かった。しかし、トルチェスク (Торський) にロスチスラフ・リユーリコヴィチ [J21] 〔が居るということを〕聞くと<sup>375)</sup>、自分たちの一団のもと<sup>376)</sup> へと引き返した。

そして、〔ポロヴェツ人は〕その場所から襲撃をしては、クントウヴディとともに、頻繁にロシ川河岸で掠奪を行うようになった。

それは、この年の秋、スヴァトスラフ [C411:G] はキエフにいなかったからだった。かれ〔スヴァトスラフ〕は自分の兄弟と会合して協議するためにドニエプル川の対岸に行っていたのである<sup>377)</sup>。他方、リユーリク [J2] は、自分の息子のロスチスラフ [J21] をトルチェスク (Торцький)

---

370) トグリイ侯が1190年夏頃にスヴァトスラフ [C411:G] (およびリユーリク [J2]) と結んだ和議のときになした誓約 (pora) (おそらくロシ川一帯に掠奪を行わないという内容) のことを指している。上注 366 を参照。

371) 「チュルナエフ」(Чюрнаев) は、カーネフから80kmほどドニエプル下流の右岸にあった城砦で、キエフ公にとっては、ポロヴェツ人の地との境界に築いた軍事拠点だった。正確な場所は不明だが、チャスミン川 (上注 367) 左岸の現在の Cholnyafkay (Чорнявка) に同定する説などがある。

以下の叙述から見て、このチュルナエフは、クントウヴディが拠点としていた城砦で、かれはここに家族とともに住んでおり、かれの財産もここにあったのではないか。

372) 前後関係が分かりにくいのが、クントウヴディがポロヴェツ人のもとに亡命したときにチュルナエフに残していた、クントウヴディの二人の妻を取り戻した (引き取った) というのではないか。

373) 「ヴィシ川」(Вись) は、現在のヴェリーカヤ・ヴィシ川 (Великая Вись) にあたり、シニューハ川 (Синюха) の左岸支流に相当する。チュルナフからだど、川伝いに南南西方向に80kmほど進んだことになる。

374) 「ポロヴィ」(Боровый) は、ロシ川右岸近くで、現在のポロヴィチ川 (Боровиці) の河口付近にあった黒頭巾族の城砦。現在のステプリウ村 (Стеблів) に同定されている。ここからトルチェスクへは、さらに北西方向へ50kmほど進まなければならない。ポロヴェツ人とクントウヴディの連合軍は、さらに北方へと掠奪遠征を試みたのである。

375) この時点で、ロスチスラフ [J21] はトルチェスクを、所領として父リユーリク [J2] から受けていたことがわかる。

376) この「自分たちの一団」(ватаги свои) には、「家族、一族」を意味するチュルク語起源の語 *vataga* が用いられているが、ここではルコモリエ=ポロヴェツ人の拠点であるドニエプル下流・河口域を指している。

377) これは、弟であるチュルニゴフ公ヤロスラフ [C412] との会合のために城市チュルニゴフへ行っていたということ。会合の内容については下注 380 を参照。



に残して、自らはヴルーチイ (Вручий) へ自分の仕事のために行っていた<sup>378)</sup>。これは、リユーリク [J2] は、クントゥヴデイが、スヴァトスラフ [C411:G] への報復を目論んで、ルーシへ掠奪のためにやって来ることを知っていたからである。

〔リユーリクは〕、同様の考えをもって<sup>379)</sup>、スヴァトスラフ [C411:G] のもとに使者を遣って、かれ〔スヴァトスラフ〕にこう言った。「見よ、われら二人は〔それぞれ〕自分たちの仕事を〔してルーシの地を不在に〕するにしても、ルーシの地を無防備にしておかないようにしましょう。わしは、自分の息子とその部隊をあとに残しておいた。そなたも、自分の息子を残すが良い」。

かれは〔スヴァトスラフ〕かれ〔リユーリク〕のもとに【670】息子のグレーブ [G3] を派遣することに同意していたが、結局派遣しなかった。なぜなら、かれ〔スヴァトスラフ〕と、リユーリク [J2]、ダヴィド [J3]、およびスモレンスクの地との間に、紛争が発生したからだった。そのために、かれ〔スヴァトスラフは〕は自分の兄弟〔ヤロスラフ [C412]〕と会合していたのであり、それは、どのようにしたら自分〔スヴァトスラフ〕がそれ〔ルーシの地〕から離れずにすむか〔ということの話〕だったのである<sup>380)</sup>。

リユーリク [J2] は、自分の姻戚である<sup>381)</sup> フセヴォロド [D177:K]、自分の兄弟ダヴィド [J3] と使者を交換して〔協議を重ねた上で〕、スヴァトスラフ [C411:G] のもとに自分の家臣たちを派遣して、かれにこう言った。「兄弟よ、そなたはかつてロマン [J1] の約定において、十字架に接吻して、われらに誓ったではないか。われらの兄弟ロマン [J1] がキエフの公座に座してい

378) 「自分の仕事のために」(своих дѣля орудѣи)の「仕事」とは、以下の記述によれば、リトアニアへの遠征を指している(下注393)。リユーリク [J2] は自分の所領である拠点都市ヴルーチイで部隊を編成して、北西のグロドノ方面へ、リトアニア人に対する(на литву)遠征を計画したのである。

379) ルーシの地を守るという考え(дума)のことで、以下のリユーリク [J2] の言葉の内容を意味している。

380) 「どのようにしたら自分はそこから離れずにすむか」(како бы ему ея не ступити)の「そこ」(ея)が何を指すか解釈が難しいが、文脈から判断して「ルーシ」(Русь)を意味すると理解した。ウクライナ語訳も同様の解釈をしている[Літопис руський, 1989: С. 350]。その場合、スヴァトスラフ [C411:G] は、弟のチェルニゴフ公ヤロスラフ [C412] のもとを訪問して、自分の亡き後にはキエフ公位を弟に譲る方策について相談したという解釈が可能になる。

381) フセヴォロド [D177:K] は、1188年に自分の娘をロスチスラフ [J21] に嫁がせたことによって(上注)、リユーリク [J2] にとっての姻戚(сват)になった。二人の姻戚関係についての本年代記での言及はここが初出である。

たときである<sup>382)</sup>。もし、そなたがその約定を守るといふなら、そなたはわれわれにとっての兄弟である。あるいはまた、ロスチスラフ [D116:J] の治世に起こった以前の紛争を覚えていないのか。[そのとき]そなたは約定に違反したのだ<sup>383)</sup>。われらは、そのことを容赦はしない。見よ、ここに、そなたの十字架接吻文書がある」。

スヴァトスラフ [C411:G] は、文書を受け取った<sup>384)</sup>。かれは十字架接吻〔の誓いを〕しようとはせず、〔使者であるリューリク [J2] の〕家臣たちと、多くのことについて弁明し言い争った。こうして、いったんはかれら〔使者たち〕に帰るように言ったが、再び引き返させて、結局、〔スヴァトスラフは〕、かれら〔リューリク [J2] とダヴィド [J3]〕に対して、何事についてもかれらの意に沿う旨の十字架接吻〔の誓約〕を行った。

---

382) 1176 年 7 月、スヴァトスラフ [C411:G] は、キエフ公だったロマン [J1] を武力で威嚇して、キエフの公座に就くが、たちまちロスチスラフ一族のムスチスラフ [J5] の反攻を受けて、いったんキエフから逃げ出し、ポロヴェツ人の援軍を待ったが、得ることをはできなかった。その後、「ロスチスラフ一族は、ルーシの地を滅ぼすこともキリスト教徒の血を流すことを望まなかつたので、評議をした上で、キエフをスヴァトスラフ [C411:G] に与えた。ロマン [J1] はスモレンスクへと向かった」(『イパーチイ年代記 (7) : 235 頁注 414) のように、リューリク [J2] を含むロスチスラフ一族諸公は、キエフの公座をスヴァトスラフ [C411:G] に譲り渡している。「ロマンの約定」(Романов Ряд) とは、そのときに行った、ロスチスラフ一族の盟主ロマン [J1] とスヴァトスラフ [C411:G] の間に結ばれた約定のことであり、ここではおそらく、スヴァトスラフ [C411:G] がキエフ公位から退いた後には、ロスチスラフ一族が公位に就くことが取り決められていたのだろう。

383) 「ロスチスラフ [D116:J] の治世に起こった以前の紛争」(давняя тяжба, которые были при Ростиславѣ) とは次のことを指している。ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ [D116:J] がキエフ公 (在位 1161-1167 年) だった 1164 年に、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] の死後のチェルニゴフの公座を巡って、その息子オレーグ [C431] と甥スヴァトスラフ [C411:G] が争った。結局約定を結んで、スヴァトスラフ [C411:G] は、自らチェルニゴフの公座を獲得する代わりに、オレーグ [C431] の弟たちイーゴリ [C432] とフセヴォロド [C433] にチェルニゴフの領地の一部を分与することを約束したが、結局その約束を守らなかった [『イパーチイ年代記 (6) : 244-245 頁] 。

さらに、1167 年には、スヴァトスラフ [C411:G] はオレーグ [C431] と再びヴシチジの領有を巡って紛争を起こして、実力でヴィシチジを占拠した。キエフ公ロスチスラフ [D116:J] はスヴァトスラフ [C411:G] に占領地の引き渡しを求めたが、スヴァトスラフ [C411:G] は従おうとしなかった [『イパーチイ年代記 (6) : 249-250 頁, 注 358] という経緯も「以前の紛争」に含まれるかもしれない。

これらの事件は、この時点から 20 年以上前の出来事ではあるが、スヴァトスラフ [C411:G] は誓約違反の常習犯だとする悪評が、ロスチスラフ一族の間で知られていたのだろう。

384) 使者たち (リューリク [J2] の家臣) は、上注 382 の「ロマンの約定」のときにスヴァトスラフ [C411:G] がロスチスラフ一族に与えた誓約内容が記された「十字架接吻文書」(крестные грамоты) を持参して、これを破棄して同盟関係を解消するか否かを迫ったのである。スヴァトスラフが「文書受け取った」(приемъ грамоты) ことによって、いったんは破棄が承知されたが、かれは考え直して使者を呼び返したことになる。

このような十字架接吻文書破棄の儀礼は、1152 年にイジャスラフ [D112:I] がガーリチ公ウラジミルコ [A121] のもとに派遣した使者ピョートル・ボリスラヴィチの一連の行動にも見ることができる (『イパーチイ年代記 (5) : 258 頁, 注 174] 参照)。

その年の冬、黒頭巾族の要人たちが相談の上、トルチェスクのロスチスラフ・リューリコヴィチ [J21]のもとにやって来て、かれにこう言った。「見よ、この冬に、ポロヴェツ人が何度もわれらのもとに掠奪に来ました。われわれは理解できません。いったい、われらはドナウ川沿岸の民なのですか<sup>385)</sup>。そなたの父[リューリク [J2]]は遠くにいます<sup>386)</sup>。今では、われらはスヴァトスラフ [C411:G] に対して〔援助を求める〕使者を出すつもりはありません、無駄ですから。かれ〔スヴァトスラフ〕は、クントゥヴデイのことでわれらに悪意を持っているのです」。

ロスチスラフ・リューリコヴィチ [J21] は **[671]**、かれら〔黒頭巾族の要人たち〕と自分の家臣たちとの合意が心に適った。そこで、かれ〔ロスチスラフ [J21]] は、ロスチスラフ・ウラジーミロヴィチ<sup>387)</sup> [D1151] に宛てて使者を派遣して、かれに言った。「兄弟よ、わしはポロヴェツ人の幕舎を襲撃しようと思っているが、われらの父〔リューリク [J2]] は遠くにおり、他に年長者はいない。われら二人が年長者の代わりとなろう。速やかにわしのもとに来たれ」。

こうして、かれら〔ロスチスラフ [J21] とロスチスラフ [D1151]] は黒頭巾族と合流して、軍を進めると、たちまちプロトルチャ<sup>388)</sup> (Протоглия) へ急襲を仕掛けた。そして、このドニエプル川河岸の草地で多くのポロヴェツ人の家畜の群れを捕獲した。しかし、ドニエプル川を〔右岸から左岸へと〕渡ることはできなかった。ドニエプル川の氷が割れていたのである。そこで、草地に残されていた多くの家畜と幕舎を掠奪し、それらを獲得して帰途についた。

ポロヴェツ人は、自分たちの家畜、女たちや子供たちが奪われたことを知って、吃驚して、ドニエプル川を渡渉して〔追いかけ〕、イヴラ川<sup>389)</sup> (Ивла) でかれらに追い付いた。ドニエプル川〔を離れて〕から3日目のことだった。そのとき、ポロヴェツ人の部隊には3人の侯がい

385) ロシ川流域に居住する黒頭巾族の要人(лѣшши мужи)たちは、前年(1188/1189年)の冬にルカモリエのポロヴェツ人が大挙して、ドナウ川流域を掠奪したこと(上注313)を引き合いに出して、自分たちを掠奪された「ドナウ川の民」と同様の運命に晒すのかと言って、息子ロスチスラフ [J21] を通じてリューリク [J2] に対して、強い調子で援軍を要請しているのである。

386) このときリューリク [J2] はリトアニアへの遠征を行っていた(下注393)。

387) ロスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1151] は、当時、トルチェスクから北へ50kmほど近いストゥグナ川河口の城市トレポリの支配公だった。(上注90参照)。かれは、キエフ公の指揮下にあり、スヴァトスラフ [C411:G] が1184年に組織したオレリ川へのポロヴェツ討伐遠征にも参加している。

388) 「プロトルチャ」(Протоглия)はドニエプル川下流域の早瀬(пороги)の一角をあらわす地名。ここでは、ドニエプル右岸の草地ということになる。

389) この「イヴラ川」(Ивла)を、クドリャシヨフは、イングレッツ川(Ингулец)と同定している[Kудряшов 1940: C. 131]。その場合、イングレッツ川の上流域ということになる。

た<sup>390</sup>。〔それは〕コルデチ (Колдеч) とコバン (Кобан) の二人のウルソバ族〔の侯〕<sup>391</sup> (Урусовича оба), およびベグバルス・アコチャエフティチ (Бѣгъбарс Акочаевтичь) だった。さらに、四番目〔の侯である〕ヤロポルク・トムザコヴィチ<sup>392</sup> (Ярополк Томзаковичь) も、別方面から自分の部隊を引き連れてやって来た。

ロスチスラフ [J21] は、ポロヴェツ人の大軍を見ると、神を仰ぎ見て望みを掛け、かれらめがけて出撃した。そして、自分の下級従士からなる射撃手たちを先行させた。射撃手たちは敵を迎えて、射合いがはじまった。ポロヴェツ人はロスチスラフ [J21] の軍旗を見て、旗下のロスチスラフ [J21] 軍を待たずに、馬を走らせて〔逃げた〕。【672】ルーシの射撃手と黒頭巾族は、かれら〔ポロヴェツ人〕に襲いかかり、600 人を生け捕りにし、他の多くを撃ち殺した。黒頭巾族は、ポロヴェツ人の侯コバンを捕虜に獲った。しかし、ロスチスラフ [J21] との〔約定を〕守って、かれ〔コバン〕を自分の部隊へと連行せず、身代金についてかれ〔コバン〕と取り決めた上で、かれを解放した。こうして、異教徒に対する勝利を神から得て、一同は帰還した。

こうして、ロスチスラフ [J21] は、ポロヴェツ人に勝利し、大いなる栄光と名誉をもって、自分の〔城市〕トルチェスクに到着した。

それから〔ロスチスラフ [J21] は〕すぐに、父親〔リューリク [J2]〕の〔領地である〕オヴルチへと向かった。なぜなら、かれの父はリトアニアに遠征<sup>393</sup> に行った〔帰路に〕、ピンスク

---

390) プレトニョヴァはこの「3 人の侯」(три князя) を以下に記されるトルグレイ、アクーシ (下注 399, 399) とクントウヴェイ (上注 368) を指すとしているが [Плетнева 1990: С. 148], この解釈に無理があるだろう。

391) 原文の Урусовичи は「ウルソバ族」(Урусоба) の侯と解釈すべきであり、ブリツァクによれば、トルグレイの部族と並ぶ、ドニエプル川草原 (プロトルチャの南方) 右岸の有力な部族グループである [Pritsak 1981: p. XIII-1620]。この部族の名は、1103 年 4 月 4 日のスーテニ川の合戦で殺されたポロヴェツ人首長の名としても記されている [ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 278]。なお、リトヴィナとウスペンスキも同様の解釈をしている [Литвина, Успенский 2013: С. 191-192]。

392) この「第 4 の」ポロヴェツ侯のヤロポルク (Ярополк) の名については、リトヴィナとウスペンスキが浩瀚な考察を行っており、キエフ公としてポロヴェツ人と何度も戦ったヤロポルク・ウラジーミロヴィチ [D15] の権威にいわばあやかっ、首長としての政治的な権威付けのためにヤロポルクという名を名乗った可能性を指摘している [Литвина, Успенский 2013: С. 190-208]。なお、プレトニョヴァはこの侯がイトグレイやウルソバ族とは異なった、特別の独立した権威を持っていたことに注目している [Плетнева 1990: С. 148]。

393) リューリク [J2] はヴィスワ川及びネマン川の上流域に向かったと思われるが、このリトアニア遠征の目的は不明。ポロツク公の紛争に介入した可能性もあるが、単なる掠奪遠征だった可能性もある。

の自分の義理の母と自分の義理の兄弟〔妻の兄弟〕たちのもと<sup>394)</sup>に滞在していたからである。なぜなら、ちょうどその時〔ピンスクでは〕、ヤロボルク<sup>395)</sup> [B3214]の結婚式があったのである。

その頃は暖かく、雪が融けて、かれらの地へ到達することができなかった<sup>396)</sup>。そこで、かれ〔ロスチスラフ [J21]〕は自分の土地〔トルチェスク〕へと戻った。

その年の冬、ポロヴェツ人は、ロスチスラフ [J21]の遠征路を進んで進入してきた<sup>397)</sup>。それは、トグリイ<sup>398)</sup> (Итогды)がアクーシ<sup>399)</sup> (Акушь)を伴っていた。かれらは〔ルーシの〕地への襲撃をくわだて、奇襲をかけて情報をとるための捕虜を捕まえた。そこで聞き出したのは、スヴァトスラフ [C411:G]が陣を張っており、クルドューロフ<sup>400)</sup> (Кульдерев)で〔諸公と〕合流していることだった。そこで、〔トグルイ等は〕軍を引き返して、軍旗や槍を投げ捨てて逃げ出した。

スヴァトスラフ [C411:G]はその場所〔クルドューロフ〕からキエフへと向かった。自分の息子グレーブ [G3]はカーネフに残した。

ポロヴェツ人はスヴァトスラフ [C411:G]がキエフへと向かっていることを聞き知ると、ク

394) 「自分の義理の母と自分の義理の兄弟〔妻の兄弟〕たちのもと」(у тещи своєю у шурья своєю)の「義理の母」(теща)はリユーリク [J2]の妻(アンナ)の母親を指している。かの女はトゥーロフ公ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321]の寡婦であり、1144年に結婚していることからみて(〔イバーチイ年代記(2) : 333頁, 注279])相当な高齢だったと考えられる。

次の「義理の兄弟〔妻の兄弟〕たち」(шурья)は、おそらく、かの女の息子たちのピンスク公グレーブ・ユーリエヴィチ [B3215]とその兄弟のヤロスラフ [B3212]の二人を指すと考えられるが(上注284, 329参照)、次注のヤロボルク [B3214]も含むかもしれない。

395) ヤロボルク・ユーリエヴィチ [B3214]についてはここが初出。ピンスク公ヤロスラフ [B3212]及びグレーブ [B3215]の年少の弟で、兄たちとともにピンスクに住んでいたと考えられる。

396) 河川の増水あるいは陸路の泥濘によって行路が遮断されたということ。

397) 前年(1190/1191年冬)にロスチスラフ [J121]がトルチェスクから、ドニエブル右岸沿いに下流に向けて進軍し、早瀬(プロトルチャ)の一带でポロヴェツ人の幕舎に襲撃を仕掛けた遠征路のこと(上注388参照)。ポロヴェツ侯トグリイとアクーシは、この行程を逆に、キエフ方面に向けて進軍したのである。

398) 「トグリイ」はここでは、Итогды(イトグディ)と綴られているが、上注369のルコモリエ・ポロヴェツ人部族の族長と同一人物。

399) 「アクーシ」(Акушь)はルコモリエ・ポロヴェツ人部族の族長のひとり(下注422参照)。

400) 「クルドューロフ」(Кульдерев)の城砦は、黒頭中族の侯(軍司令官)「クルドューリ」(Кулдьорь)の名を冠したものであり、かれはスヴァトスラフ [C411:G]配下の有力な軍人だった(上注63参照)。かれが拠点とした城砦だったのである。その所在地ははっきりしないが、ウクライナ語訳の注と索引では、テスマニ川左岸で遊牧民族の墳丘がある現在のスミラ市(Сміла)を推定しており、その場合、トルチェスクから南東に100kmほどの、ドニエブル川に近い場所になる。

ントゥヴデイとともに方向転換して、トヴァロフ<sup>401)</sup> (Товаров) へと向かった。【673】そこで、グレーブ [G3] に対して命令が出され、グレーブ [G3] は [カーネフの城市を] 出撃して、かれら [ポロヴェツ人] をトヴァロフで襲撃した。ポロヴェツ人は [トヴァロフの] 城市から逃げ出し、[その道中で] ロシ川の氷が割れて [落ちた]。他の者たちは捕虜となり、他の者たちは撃ち殺され、また溺れ死んだ者もいた。クントゥヴデイは逃げ去った。

## 6699 [1191] 年

イーゴリ [C432] は兄弟たちと協議して、ポロヴェツ討伐の遠征に出発した。進軍して、家畜と馬を捕獲し帰郷した<sup>402)</sup>。

そして、冬に、オレーグ一族 [諸公は] 再びポロヴェツ討伐の遠征をした。[参加したのは] イーゴリ [C432] とその弟フセヴォロド [C433] だった。スヴァトスラフ [C411:G] は三人の息子、フセヴォロド [G4]、ウラジミール [G2]、ムスチスラフ [G1] を行かせた。ヤロスラフ [C412] は自分の息子ロスチスラフ [C412I] を出征させ、オレーグ・スヴァトスラヴィチ<sup>403)</sup> [G5] は息子のダヴィド [G5I] を出征させた。一同はオスコル川 (Оскол) まで到達した<sup>404)</sup>。

ポロヴェツ人のところに討伐軍が来るという報がもたらされ、かれらは幕舎を背後へと引き上げさせ、自分たち [ポロヴェツ人] は集合して、かれら [討伐軍] を待ち受けた。オレーグ

---

401) 「トヴァロフ」 (Товаров) は、現在のウクライナのチェルカスク州カーネフ区メジリチ村 (Межиріч) (旧名はトヴァロフ Товаров) に相当し、カーネフからは南方向へ 14km ほどしか離れていない。おそらく、黒頭巾族の前線城砦として、依然としてクントゥヴデイの支配下にあったのだろう。そうすると、トグリイとクントゥヴデイの部隊は、南からロシ川を渡ってカーネフ = キエフ方面へと、ルーシの軍隊を追撃したことになる。

402) 1191 年の春から夏にかけての遠征と推定される。ここでは遠征地についての記載はないが、次の記事の、この年の冬の遠征が「再び」 (опять) とあることから、おそらくオスコル川からセヴェルスキイ・ドネツ川中流域への小規模な掠奪遠征であろう。

403) スヴァトスラフ [C411:G] の息子のうちオレーグ [G5] だけ自身の息子を派遣していることから見て、オレーグ [G5] は独立した公座を有していたのだろう。ヴォイトヴィチは、根拠は不明ながら、1190 年 ~ 1198 年のあいだ、オレーグ [G5] はスタロドゥーブ (Стародуб) 公だったとしている ([Войтович 2006: С. 404])。

404) 「オスコル川」 (Оскол) はセヴェルスキイ・ドネツ中流左岸の支流で、その上流はノヴゴロド = セヴェルスキイ公領とポロヴェツ人の地の境界にあたっている。おそらく、遠征軍はセイム川の上流域から、オスコル川上流域に入ったのだろう。ここは、1185 年のイーゴリ [C432] の敗北した遠征のときにも、諸公の集合地点になっており (上注 160)、ここで隊列を整えて、ドネツ川 (おそらく左岸) 流域のポロヴェツ人幕舎への奇襲的な掠奪を狙ったのだろう。



一族〔の諸公〕はかれら〔ポロヴェツ人〕と戦うことができなかった。かれら〔諸公は〕夜陰に紛れて、逃げ去った。明るくなったとき、ポロヴェツ人はかれら〔諸公軍〕を見つけることができず、かれらのあとを追いかけたが、追い付くことはできなかった<sup>405)</sup>。

## 6700〔1192〕年

スヴァトスラフ公[C411:G]は自分の姻戚のリューリク[J2]および兄弟たちと集合して、カーネフ近郊で夏じゅう陣を構えて、ルーシの地の守りに備えた。こうして、自分の地を邪教徒どもから守り、それから解散して帰郷した<sup>406)</sup>。

その年の秋、黒頭巾族の要人たちは協議して、リューリク[J2]に請願を行った。その息子ロスチスラフ[J21] **〔674〕**をポロヴェツ人討伐〔の遠征〕に出して欲しいというのである<sup>407)</sup>。なぜなら、ポロヴェツ人はドナウ川へと出かけていたからである。ロスチスラフ[J21]もまた、ログヴォロド<sup>408)</sup>を父親〔リューリク[J2]〕のもとに派遣して、自分を黒頭巾族とともにポロヴェツ討伐遠征に行かせて欲しいと頼んだ。しかし、父親〔リューリク[J2]〕はかれ〔ロスチスラフ[J21]〕を〔遠征に〕行かせなかった<sup>409)</sup>。

他方、スヴァトスラフ[C411:G]は、兄弟のロスチスラフ・ウラジーミロヴィチ<sup>410)</sup> [D1151]

---

405) オレーグ一族諸公の大規模な遠征についての情報がポロヴェツ側に伝わり、ポロヴェツ人はすぐさま幕舎を退避させ、遠征軍に対抗するための部隊を編成して待ち受けた。諸公軍はもはや遠征の目的である掠奪は不可能であり、戦う意味がなくなったことから、速やかに部隊を撤退させたのである。

406) このように、ポロヴェツ人に対する予備的防衛のためにカーネフへ諸公を召集することは、1168年にロスチスラフ[D116:J]が、交易商人の保護のために行っている（〔イパーチイ年代記(6)〕：255頁、注394参照）。今回も、同様の目的のための召集ではないか。

407) 前後の文脈から見て、ドニエプル川河口近く、さらにルカモリエのポロヴェツ人に対する掠奪遠征を意味していると考えられる。

408) 「ログヴォロド」(Рогъволод)の名はポロツク公国では公族の名として用いられているが、ここでは、文脈から見てロスチスラフ[J21]に仕える貴族であろう。ウクライナ語、ポーランド語訳もそのように注記している。

409) 以下の記事によって、リューリク[J2]は、スヴァトスラフ[C411:G]とクントゥグデイとの紛争を和議によって解決することを考えていたことが分かる。そのため、クントゥグデイを庇護していたルコモリエ=ポロヴェツ人と争いを起こしたくなかったのである。

410) 当時はトレボリの公。上注385を参照。

と二人で、黒頭巾族を引き連れて、ドニエプル<sup>411)</sup>川まで到達した。しかし、黒頭巾族はドニエプル川を渡ってさらに進軍しようとはしなかった。ドニエプル川を渡った近くのところに、自分たちの姻族たちがいたからだった<sup>412)</sup>。こうして、口論の末、〔黒頭巾族は〕引き返してしまった。

その年の冬、リユーリク [J2] は、クントゥヴデイ (Кунтувдѣи) を呼び寄せるために、使者をポロヴェツ人たちのところに派遣した。ポロヴェツ人たちはこの使者を受け入ると、自らリユーリク [J2] のもとにやって来た。リユーリク [J2] は、多くの贈物をポロヴェツ人に与え、誓約の儀式を行わせ、かれらを帰郷させた。〔リユーリク〕はクントゥヴデイを自分のもとに留め置き、かれにはロシ川沿いの城市ドヴェレン<sup>413)</sup> (Дверен) を与えた。これは、ルーシの地を〔守る〕ためだった。

その年、大いなる公フセヴォロド [D177:K] は、自分の息子ヤロスラフ<sup>414)</sup> [K4] に剃髪と乗馬〔の儀式〕を施した<sup>415)</sup>。主の血縁者シモンの祭日のことだった。ヴラジミルではみなが大いに

---

411) 原文は доѡхаша Добра だが、これは доѡхаша Донепра の間違いだろう。スヴァトスラフ [C411:G] の軍は、ドニエプル川沿いに右岸を進軍して、おそらくヴォルスクラ川もしくはオレリ川の河口付近でドニエプル川を渡河して、左岸のポロヴェツ部族 (いわゆるブルチェヴィチ族 (下注 423 を参照)) に対する掠奪を計画したのである。

412) 「自分たちの姻族たちがいた」 (бяхуть бо сватове имъ) とは、1187 年の記事 (上注 241) にもあるように、黒頭巾族の支配層が、ポロヴェツ人の支配層 (この場合はドニエプル左岸の部族) と姻戚関係を結んでいたことによっている ([Плетнева 1990: С. 89] も参照)。

413) ドヴェレン (Дверен) はロシ川左岸にあった城砦で、現在のデレンコヴェツ村 (Деренковецъ) の対岸に位置していた。カーネフから南方に 35km ほどの場所になる。

414) ヤロスラフ [K4] については本年代記では初出。『ラヴレンチイ年代記』 6698(1190) 年の記事に、「その年に (… ) フセヴォロド [D177:K] のもとに息子が生まれた。2 月 8 日の預言者聖ザカリアの記念日だった。聖なる洗礼名をフョードルと名づけた。そのとき大いなる公〔フセヴォロド〕はペレヤスラヴリ [=ザレスキイ] に巡回徴貢に行っていた」 [ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 408-409] とあり、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の同年の並行記事 [ПСРЛ Т. 7.; 2001: С. 101] では「ヤロスラフと呼ばれた」 (а прозвань бысть Ярославъ) として、この「フョードル」がヤロスラフ [K4] であることが分かる。生年は 1191 年 2 月 8 日である。

415) 「剃髪」 (постѣги) と「乗馬」 (всадити на конь) の儀式は、公族 (スーズダリの方セヴォロド一族) の間の家庭儀礼で、年代記ではこの個所が初出。前注と後注によれば、満 2 歳を過ぎたばかりの幼児に施されたことになる。「剃髪」の儀は、おそらく幼児の髪を生まれて初めて切るときの儀式で、その後、父親の馬に乗せること (乗馬の儀) によって、幼児を一族の一員として迎え入れる儀礼的な意味があったと考えられる ([Славянские древности Т. 4: С. 212 (пострижины)] 参照)。

喜んだ<sup>416)</sup>。

その年、大いなる公フセヴォロドはヴラジミルで内城を定礎した<sup>417)</sup>。

そして、ヴラジミルで聖なる聖母教会<sup>418)</sup>を石灰で修復した。

そして、スーズダリで聖母教会を修復して、新築のようになった<sup>419)</sup>。

その年、大いなる公フセヴォロド [D177:K] は息子が生まれた。聖ドミートリイの祝祭日<sup>420)</sup>の早課が始まる前のことだった<sup>421)</sup>。その名の日はその日になった。【675】フセヴォロド [D177:K] は自分の息子に、自分の〔洗礼〕名であるドミートリイを洗礼名として与えるよう命じた。公としての名は、自分の祖父であるウラジーミル・モノマフからとって、ウラジーミル [K5] とした。

---

416) 『ラヴレンチイ年代記』の6702(1194)年の並行記事には、「4月26日の主の血縁者聖シモンの記念日」「福なる主教イオアンの在世のとき」であることなどの追加情報が記されている [ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 411]。ただし、「馬に乗せた」(на конь его посади)ことは『ラヴレンチイ年代記』の記事にはなく、本年代記の独自の情報である。これによると、儀式は1193年4月26日に行われたことが分かる。

なお、これ以降スーズダリ公フセヴォロド [D177:K] 関連の記事が続くが、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、6702(1194)年の項に記されている。年代記の比較研究によると、出典に近い『ラヴレンチイ年代記』のこの年代の記事は「超3月法」によっており、そこから、ウラジーミル＝スーズダリでの一連の事件は、1193年に起こったと考えるべきである ([Бережков 1963: С. 85])。

417) ヴラジミル＝ザレスキイの「内城」(дѣтинѣць)とは、城市の南端に、首座教会(次注)を巡るようにして建設された城壁と城門を指している [Раппопорт 1982: С. 52-53]。定礎の日については、『ラヴレンチイ年代記』の6702(1194)年の並行記事では「6月4日のコンスタンティノポリス総主教聖ミトロファノス(Митрофан)の記念日」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 411]としている。

418) ヴラジミル＝ザレスキイの首座教会である聖母就寝教会(Успенский собор)の聖堂は1184年4月に大火で焼けており(上注71)、その聖堂の修復のことを指している。『ラヴレンチイ年代記』の6702(1194)年の並行記事では「8月に修復された(…)。これは、大火によって灰になったものだった」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 411]としている。

419) このスーズダリの「聖母教会」(церковь святая Богородица)は現存していないが、13世紀以降の首座教会である「聖母生誕教会」(Рождество Богородицы)の前身の首座教会として、ウラジーミル・モノマフ [D] の手で1101年～1105年頃に創建された「聖母就寝教会」を指すと考えられる [Раппопорт 1982: С. 59]。『ラヴレンチイ年代記』の6702(1194)年の並行記事にはこの聖堂修復について、「その年の9月にスーズダリで聖なる聖母の教会が修復された。これは、老朽化と保全の悪さから崩れ落ちたものだった。やはり、同じ福なる主教イワンの手による〔修復で〕、頂上から円蓋張り出しや啓蒙所の屋根まで錫で葺かれた」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 411]とより詳しい記述がなされている。

420) テッサロニキの殉教聖人ディミトリオス(ロシア語でドミートリイ)の記念日は10月26日。

421) ウラジーミル [K5] の誕生した日について、『ラヴレンチイ年代記』の6702(1194)年の並行記事では「10月25日の聖マルキアノス(Маркиан)とマルティリオス(Мартурья)の日、聖ディミトリオスの日の前日」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 412]とより明確な書き方がされている。

## 6701 [1193] 年

スヴァトスラフ [C411:G] は、リユーリク [J2] のもとに使者を遣って、かれに言った。「見よ、そなたは、ルコモリエのポロヴェツ人<sup>422)</sup>と会合を行った。今度は、すべてのポロヴェツ人を〔呼び出すための〕、すなわち、二人のブルチェヴィチ族<sup>423)</sup> (Бурчевича)〔の侯も呼び出すための〕使者を遣らうではないか<sup>424)</sup>」。そこで、リユーリク [J2] はルコモリエのポロヴェツ人であるアクーシ (Акуш) とトグリイ (Итогли) を呼び出す使者を遣った<sup>425)</sup>。スヴァトスラフ [C411:G] は、ブルチェヴィチ族 (Бурчевич) のオソルク<sup>426)</sup> (Осолук) とイザイ<sup>427)</sup> (Изай) を呼び出す〔ための使者を遣った〕。

422) 「ルコモリエのポロヴェツ人」 (половци лукоморьскии) の「ルコモリエ」は文字どおりは「海の入江」を意味し、通常はポロヴェツ人の本拠地であるドニエプル川及び南ブク川河口域一帯を指している ([イパーチイ年代記 (7) : 173 頁, 注 23] 参照)。その有力な族長は下注 425 にあるようにトグリイとアクーシだった。

423) 「二人のブルチェヴィチ族」 (Бурчевича) は、次注の「オソルク」と「イザイ」を指している。「ブルチェヴィチ」 (Бурчевич) の名はモノマフ公の『教訓』に、かれが討伐したポロヴェツ侯のひとりとして記されており [ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 250], ドニエプル川左岸に展開する部族 (連合) の名であり、リユーリク [J2] の岳父であるベルーク侯はその有力な指導者だった。[Pritsak 1981: XIII pp.1619-1620]。

424) スヴァトスラフ [C411:G] を代表とするオレーグー族諸公は、ドニエプル川左岸を居住地とするポロヴェツ人 (いわゆるブルチェヴィチ族ポロヴェツ人) とは常に対立関係にあり、たとえば、1166/1167 年冬には、ヤロスラフ [C412] は、ブルチェヴィチ族の首長ベルークの幕営地を掠奪している ([イパーチイ年代記 (6) : 261 頁, 注 427, 428]), また、1184 年のスヴァトスラフ [C411:G] によるオレリ川遠征、イーゴリ [C432] によるメルル川遠征も基本的には、ドニエプル川左岸のポロヴェツ人に対する掠奪遠征だった。そのため、ルーシの地を保全を確かにするために、キエフ公のスヴァトスラフ [C411:G] は、ブルチェヴィチ族との和議 (捕虜や贈物の交換) が必要だったのである。

425) ルカモリエのポロヴェツ人の族長トグリイ (イトグリイ) とアクーシは、1191/1192 年冬にルーシの地に侵入して失敗しているが (上注 398, 399 参照)、その後、捕虜交換などのための和議は行われていない。リユーリク [J2] は、スヴァトスラフ [C411:G] の呼びかけに応じて、ルカモリエ・ポロヴェツ人との和議を試み、そのための使者として息子のロスチスラフ [J21] を派遣したのである。下注 429 を参照。

426) この「オソルク」 (Осолук) は、1184 年 7 月のオレリ川の戦いで敗北して、スヴァトスラフ [C411:G] 率いる諸公連合軍の捕虜となっている (上注 101)。その後、買い戻されて釈放され、帰郷したと考えられる。

427) 「イザイ」 (Изай) もまたオレリ川の戦いで捕虜となっている (上注 99)。かれは、リユーリク [J2] の岳父であるポロヴェツ侯ベルーク (Белук) の息子であり、リユーリクの義理の兄弟 (妻の兄弟) にあたっている。

秋になって、スヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2] はカーネフで会合した<sup>428)</sup>。リューリク [J2] は自分の息子のロスチスラフ [J21] を、ルコモリエの〔ポロヴェツ人〕のもとに派遣した<sup>429)</sup>。〔ロスチスラフ [J21]〕はトグリイ (Итогли) とアクーシ (Акуш) をカーネフに連れてきた。

ブルチェヴィチ族はドニエプル川の向こう岸<sup>430)</sup> を進んでやって来て、カーネフの対岸で立ち止まった。しかし、こちら側にやって来ず、スヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2] に〔使者を通じて〕「望むなら、そなたたちがこちら側のわれらのもとに来るがよい」と言った。二人の公は相談して、かれらに答えた。「われらの祖父たち、われらの父たちの誰一人として、お前たちにとりに出向いた者はいない。おまえたちが必要なら、われらのもとに来るがよい。そうでなければ、お前たちには必要でないということだ。お前たちが選ぶがよい」。

ブルチェヴィチ族は合意しようとせずに<sup>431)</sup>、〔対岸へ〕行かなかった。かれらのところには黒頭巾族の拘留捕虜たちがいたからである<sup>432)</sup>。こうしてどこかへ去ってしまった。

他方、ルコモリエの〔ポロヴェツ人〕は和を望んでいた。しかし、スヴァトスラフ [C411:G] はそれを気に入らなかった。リューリク [J2] は、スヴァトスラフ [C411:G] に強いて **【676】** 和を結ばせようとした。スヴァトスラフ [C411:G] は言った。「わしは、かれら〔ポロヴェツ人〕の半分だけと和を結ぶつもりはない」。こうして、和議は成立せず、かれらは〔スヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2] はカーネフから〕帰郷した。

〔その後〕リューリク [J2] は自分の家臣たちと協議をして、スヴァトスラフ [C411:G] のもとに使者を遣って、こう言った。「兄弟よ見よ、そなたは和を結ぶことを気に入っていない。しかし、われらはもはや武装せずにいることはできない。兄弟よ、自分たちの地〔ルーシの地〕のことを考えようではないか。もし、われらが冬に向けて遠征をしようというのなら、そのことをわれらにも公言せよ。わしが、自分の従士たちに対して、また兄弟たちに対して武装するよう命じられるように。また、もしわれらが自分の地を防衛することを望むなら、そのことをわれら

428) カーネフはポロヴェツ人と会合するためには最適の地であり、1155 年にもキエフ公だったユーリイ手長公 [D17] が会合のためにカーネフにやって来ている ([イパーチイ年代記 (5):283 頁, 注 304] 参照)

429) 上注 425 を参照。

430) ここではキエフから見て「向こう岸」だから、ドニエプル川左岸を指している。

431) 「合意しようとせずに」(не хотячи дати билинча) の「合意」と訳した билинч はおそらくテュルク系起源の語で、中世文献ではこししか見いだせない語である。文脈からみて「自分たちにとって有利な条件」を意味していると考えられる [Goranin 1994: p. 255]。

432) ポロヴェツ人たちは、これまでの戦闘で捕虜交換のための拘留捕虜 (колодники) を多数確保しており、より有利な条件が可能だと考えたのだろう。

に告げよ」。

スヴァトスラフ [C411:G] は〔答えて〕言った。「兄弟よ、今は遠征をするときではない。なぜなら、われらの土地では今はまだ穀物が実っていないからだ<sup>433)</sup>。今は自分の土地を防衛すべきだろう」。

リューリク [J2] は、〔これに答えて〕かれ〔スヴァトスラフ〕に言った。「兄弟よ、姻戚の者よ、もし、そなたが遠征に行けないのなら、わしはそなたに告げよう。わしはリトアニアに遠征に行くことを<sup>434)</sup>。わしはこの冬に、自分の仕事を行いたいのだ」。

スヴァトスラフ [C411:G] はこれを気に入らず、かれ〔リューリク〕に言った。「兄弟よ、姻戚の者よ、もしそなたが自分の仕事のために自分の父の地を離れるのなら、わしもまた自分の仕事のためにドニエプル川の向こうへ〔遠征に〕行くことにしよう<sup>435)</sup>。その場合、ルーシの地には、われらのうち誰が残ることになるのか」。この言葉によって、かれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕はリューリク [J2] の遠征を止めさせた。

その年の冬、黒頭巾族の要人たちが協議して、ロスチスラフ・リューリコヴィチ [J21] のもとにやって来て<sup>436)</sup>、かれにこう言い始めた。「公よ、われらとともにポロヴェツ人の幕舎へ〔掠奪遠征に〕行きましょう。〔今が〕まさにその時機です。【677】われらはかつて、〔あなたの〕父親〔リューリク [J2]〕にあなたとともに〔遠征〕する許可を求めました。しかし、あなたの父親はリトアニア討伐に行くつもりだと聞きました。そして、あなたを遠征には行かせなかったのです。そのような時機はもはや訪れないでしょう」。

ロスチスラフ・リューリコヴィチ [J21] は、この言葉が気に入って、かれらと協議して、父親に知らせることなく、狩猟を装ってチェルノブイリ<sup>437)</sup> (Чернобыль) からトルチェスク

---

433) 秋の収穫期を控えており、農民を兵士として遠征に動員（遠征における черные люди のこと（上注 174 参照））できないことを、現時点で遠征しない理由として挙げている。

434) リューリクは 1190/1191 年冬にも、リトアニア人に対する掠奪遠征を行っており（上注 393）、この時期（1193/1194 年冬）のリトアニア遠征は、かれにとって冬期に行う重要な「仕事」（上注 145）になっていたのだろう。

435) これはリューリク [J2] に対する牽制の発言であって、実際に実行するつもりはなかったのだろうが、ひとまずスヴァトスラフ [C411:G] はここで、ドニエプル左岸ポロヴェツ人の幕舎への、小規模な掠奪遠征のことをほのめかしている。

436) この時、ロスチスラフ [J21] は、父の拠点地の所領であるヴルーチに滞在していた。

437) 「チェルノブイリ」(Чернобыль) はウジ川 (Уж) がプリピャチ川に注ぐ河口にあった城砦で、当時はリューリク [J2] の支配下にあったのだろう。ヴルーチ (オーヴルチ) からだと東へ 100km ほど行ったところにある。



(Торцькыи)へと速やかに進んだ。それから、自分の従士たちを呼び寄せる使者を発して、自分の従士に言った。「われらの時機が来た。ポロヴェツ人討伐に出かけよう。もし、わが父が遠征に出るといふならば、われらはそこに合流しよう」。

こうして、かれ〔ロスチスラフ [J21]〕は三日目に自分の従士たちと合流した。それから、トレポリ (Треполь) へ、自分の〔父方〕伯叔父の息子のムスチスラヴィチ<sup>438)</sup> [D1152] に宛てて使者を派遣して、かれを呼び出して、〔遠征に〕同行させた。かれ〔ムスチスラフ・ムスチスラヴィチ [D1152]〕はすぐに自分の家臣であるズディスラフ・ジロスラヴィチ<sup>439)</sup> (Здеслав Жирославич) を連れて出発し、ロシ川を越えたところで、自分の兄弟のロスチスラフ [J21] に追い付いた。また〔ロスチスラフ軍は〕黒頭巾族と合流し、襲撃に取りかかった。ポロヴェツ人〔支配地の〕イヴラ川<sup>440)</sup> (Ивла) では、ポロヴェツ人の斥候部隊を捕獲して情報を得た。ポロヴェツ人は一日行程離れたところにおり、幕舎や家畜の群れはドニエプル川のこちら側、ルーシが支配する側<sup>441)</sup> にいるとのことだった。

かれら〔ロスチスラフ軍〕は夜を徹して馬を進め、夜明けにかれら〔ポロヴェツ人の幕舎〕を襲撃した。ロスチスラフ [J21] と黒頭巾族は戦利品を獲た。多くの家畜、馬、奴隷、拘束捕虜を捕獲した。〔ポロヴェツ〕侯の息子たち、**[678]** 要人たちを捕らえた。拘束捕虜たち、馬、家畜、奴隷など、あらゆる捕虜たちを〔を獲て〕、〔あまりの多さに〕数え切れないほどだった。かれら〔ロスチスラフ軍〕はすべてに慈しみ深い神を讃美し、邪教徒に対する勝利を神から受け取り、大いなる栄光と名誉をもって帰郷した。

ポロヴェツ人たち〔の軍〕は自分たちの蓄えた財産が奪われ、自分たちの兄弟たち、女子供たちが捕らえられたを見て、合流すると、ロスチスラフ・リューリコヴィチ [J21] に追い付いたが、かれら〔ロスチスラフ軍〕の軍隊〔が強力であることを〕見ると、これを襲撃すること

438) ロスチスラフ [J21] にとって「〔父方〕の伯叔父の息子」(строичич)の「ムスチスラヴィチ」(Мьстиславич)とは、伯叔父ムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [J5] の息子のムスチスラフ・ムスチスラヴィチ [J51] を指すことになり、ウクライナ語訳、ポーランド語訳もそのように注記している。しかしながら、1191年頃にはトレポリはムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1151] が公支配していることから(上注387)が、この「ムスチスラフ」は、ムスチスラフ・ムスチスラヴィチではなく、ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1151] を指している可能性もある(次注も参照)。

439) この「ズディスラフ」は、6680(1180)年の記事では、ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチに仕える貴族としてその名が記されている〔イパーチイ年代記(7):262頁,注566〕。そのことから、前注に触れたように、このトレポリの公は、実際にはムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1151] だった可能性が高い。

440) イングレツ川(Ингулец)の上流域を指している。上注388を参照。

441) ドニエプル川の右岸に相当する。

はできず、ロシ川まで<sup>442)</sup>かれらの後を付いて行くだけだった。ロスチスラフ [J21] はトルチェスクに到着すると、栄光をもって、この別のポロヴェツ人たちにも勝利した<sup>443)</sup>。帰還したのは、主の降誕祭の時<sup>444)</sup> だった。

そこから、〔ロスチスラフ [J21] は〕戦利品を手にもオヴルチの父親〔リユーリク [J2]〕のもとに速やかに向かった。かれの父親がリトアニアへ〔遠征に〕行こうとしていたからである。

スヴァトスラフ [C411:G] はリユーリク [J2] に使者を派遣して、かれに言った。「見よ、そなたの息子〔ロスチスラフ [J21]〕がポロヴェツ人への掠奪を始め、戦争を始めた。ところが、そなたは、自分の地を放っておいて、別の所に〔遠征に〕行こうとしている。今はルーシに来たれ、自分の地を守るのだ<sup>445)</sup>」。そこで、リユーリク [J2] は遠征をあきらめて、自分の全部隊を引き連れてルーシへと向かった。

ロスチスラフ [J21] は父親〔リユーリク [J2]〕に対して、スモレンスクの自分の叔父ダヴィド [J3] のところに、戦利品を持って行かせてほしいと頼んだ。こうして、大いなる栄光をもってポロヴェツ人を撃ち破ったロスチスラフ [J21] は、自分の叔父のところへやって来た。

かれ〔ロスチスラフ [J21]〕の岳父であるフセヴォロド [D177:K] はこのことを聞いて、かれを自分のもとに呼び出した。ロスチスラフ [J21] は岳父のいる【679】スーズダリへ、戦利品を手にもやって来た。かれの岳父はかれ〔ロスチスラフ〕を冬の間ずっと留め置いた。それから、自分の婿と娘に多くの贈物を与え、大いなる名誉をもって、かれを帰郷させた。

その年の冬、ダヴィド [J3] に息子が生まれた。洗礼名をフョードルと名付け、公としての名はムスチスラフ [J32] と名付けた<sup>446)</sup>。

その年の冬、ポロヴェツ人は〔ロシ川の〕河岸地帯 (убережь) で掠奪を行い、トルク人た

---

442) 原文は до Руси となっているが、ここは具体的な地名を指していることから、до Роси (ロシ川まで) の誤りと解釈した。

443) 後を付いてきたポロヴェツ人の部隊に襲撃を仕掛けて、これを撃破したということ。

444) 1193 年 12 月 25 日に相当する。

445) スヴァトスラフ [C411:G] は、リユーリク [J2] に対して、ポロヴェツ人の反撃に備えて、かれの軍隊をキエフとその近郊の城市 (「自分たちの地」(своя земля)) 周辺に動員することを呼びかけたのである。下注 447 も参照。

446) ヤーニンは、このムスチスラフ [J32] は、ダヴィド [J3] の長子で 1187 年に亡くなったムスチスラフ [J34] と同じ名を、その死後に生まれた末子に付けたと推定しており、リトヴィナ、ウスペンスキイもこの説を支持している [Литвина, Успенский 2006: С. 583]。

ちを捕獲した。スヴァトスラフ [C411:G] とリュウリク [J2] は、大軍をもってヴァシーレフ (Василев) で布陣して、自分たちの地の守っていた<sup>447)</sup> が、〔その後〕スヴァトスラフ [C411:G] はドニエプル川を越えてコラチェフ (Карачев) に向かい<sup>448)</sup>、他方、リュウリク [J2] は、自分の領地へと行った<sup>449)</sup>。このことを聞いて、ポロヴェツ人は〔ロシ川の〕河岸地帯で掠奪を行ったのである。

## 6702 [1194] 年

スヴァトスラフ [C411:G] は自分の兄弟たち、すなわちヤロスラフ [C412]、イーゴリ [C432]、フセヴォロド [C433] をコラチェフ (Корачев)<sup>450)</sup> に呼び出した。そして、かれらと協議して、リャザンの諸公を討伐する遠征を行おうとした。かれら〔リャザン諸公〕が領地を要求し始めたからである。〔スヴァトスラフ [C411:G] は〕スーズダリのフセヴォロド [D177:K] にも使者を派遣して、リャザン討伐に参加するよう要請した。しかし、フセヴォロド [D177:K] はかれら〔スヴァトスラフ等オレーグ一族諸公〕の意向を無視した。〔結局〕スヴァトスラフ [C411:G] はゲオルギオスの日<sup>451)</sup> にコラチェフから引き上げた。

そして、夏なのに櫓で移動した。かれの足が何か不調だったからである。それから、川船でデスナ川を出発した。スヴァトスラフ [C411:G] はキエフに戻り、金曜日には聖人たち〔聖ボリスと聖グレーブ〕に拝礼するためにヴィシエゴロドへ向かった。かれは教会堂<sup>452)</sup> に入ると、涙を流しながら聖なる棺に接吻した。それから父親の墓所のところに向かった<sup>453)</sup>。【680】いつ

447) リトアニア遠征をあきらめたリュウリク [J2] は (上注 445 参照)、引き連れていた「全部隊」(вси свои полкы) を、ストウグナ河畔のキエフ防衛の拠点ヴァシリエフ近郊の駐留させて、ポロヴェツ人の襲撃に備えた。スヴァトスラフ [C411:G] もキエフの部隊をここに派遣した。これは、1194 年 1 月～3 月のあいだ続いたと考えられる。

448) スヴァトスラフ [C411:G] は、1185 年の 4 月にも、自分の所領であるコラチェフへ行っているが (上注 144)、今回も同じ目的 (ヴァティチ人からの徴税・掠奪) で遠征したものだだろう。おそらく、春になって川の氷結が緩み、ポロヴェツ人の大規模な襲撃の心配がなくなったことが理由だろう。

449) 「自分の領地」(своя волость) とは、リュウリクの拠点都市であるヴルーチイを指している。上注 378 を参照。

450) イパーチイ写本では「ロゴフ」(Рогов) になっているが、フレーブニコフ写本では「カラチェフ」(Карачев) となっている。ここでは文脈から判断して、後者の読みを採用した。

451) この「ゲオルギオスの日」(Юрьев день) は 1194 年 4 月 23 日に相当する。

452) 1115 年に献堂された、ヴィシエゴロドの聖ボリス＝グレーブ教会のこと。

453) フセヴォロド [C41] が埋葬されている聖キリル修道院の教会へ向かったということ。この教会は、ヴィシエゴロドか 3km ほど南に下ったところ (キエフの丘から北へ 2km ほど) のドロゴジシチ (Дорогожичь) にあり、ヴィシエゴロドからキエフへの途上に位置している。

もの通り、〔墓所に〕入ろうとしたが、司祭たちは鍵を持ったままどこかに行ってしまった。スヴァトスラフ [C411:G] は待ちきれずに出発したが、頭の中では父の棺に拝礼できなかつたことを無念に思っていた。こうして、〔スヴァトスラフは〕キエフに帰った。

〔スヴァトスラフは〕土曜日に聖なる殉教者たちのところ〔ヴィシエゴロドへ向けて〕に出かけた。それは、聖キリル修道院の教会<sup>454)</sup> (у святого Кюрила) の〔殉教者たちのもと〕で、ちょうどそれは自分にとっての最後の奉事となった。

主日〔日曜日〕の祭日になると、〔スヴァトスラフは〕新しい館<sup>455)</sup> から出ることができなくなった。しかし、館で聖なる殉教者たちの祭日<sup>456)</sup> を祝った。翌日の月曜日<sup>457)</sup>、かれ〔スヴァトスラフ〕のもとにかれの姻戚<sup>458)</sup> から知らせがもたらされた。スヴァトスラフ [C411:G] の孫娘オフィミア・グレーボヴナ<sup>459)</sup> (Гльбовна Офимья) が〔ビザンティンの〕皇子<sup>460)</sup> に嫁ぐという。スヴァトスラフ [C411:G] はかれらに対して、キエフの家臣たちを差し向けた。

この人物〔スヴァトスラフ [C411:G]〕はひどく消耗して、言葉も朦朧としていた。しかし、気を取り直して、自分の妃に言った。「マカバイの聖人たちの祭日<sup>461)</sup> はいつになるのか」。かの女〔公妃〕は言った「月曜日です」。かれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕は言った。「ああ、わ

---

454) 「聖キリル修道院の教会」の場所については前注参照。この教会は、おそらくフセヴォロド [C41] 自身が自らの守護聖人を記念して建てたものである ([Литвина, Успенский 2006: С. 504-505])。スヴァトスラフの死を伝える『ラヴレンチイ年代記』6703(1195)年の並行記事には「その年キエフ公スヴァトスラフ [C411:G] が逝去した。かれの父〔フセヴォロド [C41]〕が創建した修道院の聖キリル教会に安置された」([ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 412])とあり、この「キリル修道院 (教会)」はフセヴォロド [C41] 一族の菩提寺と考えられていたことがわかる。ちなみに、この修道院には1179年にはフセヴォロドの妃 (スヴァトスラフの母親) も埋葬されている ([イパーチイ年代記 (7):247 頁, 注 470] 参照)。

455) 「新しい館」(Новый двор) はキエフにおけるスヴァトスラフ [C411:G] の宮廷にあたる場所で、コプイレフ区にあったと推定されるが詳細は不明。オレーグ一族出身のスヴァトスラフは、モノマフ一族出身の歴代のキエフ公が宮廷としていた「ヤロスラフの館」には住めなかったのだろう。

456) 1194年7月24日の聖ボリスとグレーブの祝祭日のこと。この日は確かに「主日」(日曜日)に相当している。

457) 1194年7月25日の月曜日のこと。

458) リューリク [J2] のことを指している。

459) これは、グレーブ [G3] の娘のエフィーミア (Евфимия) を指している。グレーブ [G3] は1182年にリューリク [J2] の娘と結婚しており (上注5参照)、すぐに生まれた長女だとしてもエフィーミアは10歳ほどだったと考えられる。

460) この時のビザンツ皇帝は、アンゲロス朝イサアキオス二世 (在位1185-1195年) であり、エフィーミアが嫁いだ「皇子」(цесаревич) は、その息子のアレクシオス四世のこと [Древняя Русь 2015: С. 272]。

461) 「マカバイの聖人たち」(святыя Маковьи) とは、旧約統編 (外典) 『マカバイ記二』第7章に記されている七人兄弟の殉教者の記念日で、ルーシでは8月1日が祝祭日で、1194年は確かに月曜日に相当している。この日はスヴァトスラフ [C411:G] の父親フセヴォロド [C41] の命日であり (下注462参照)、スヴァトスラフは命日の行事について心配したのだろう。

しはその日まで〔生きて〕待つことはできまい」。なぜなら、かれの父フセヴォロド [C41] はマカバイの聖人たちの祭日に神のもとに召されたからだった<sup>462)</sup>。

公妃はかれの公がなにか夢見を見たのだと考えて、問いただし始めた。かれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕はそのことをかの女に告げることなく、こう言った。「わしは唯一の神だけを信仰している」。そして、自分に剃髪を施して修道士とするように命じた。それから、姻戚のリューリク [J2] のもと<sup>463)</sup> に使者を派遣した。

そして、〔スヴァトスラフ [C411:G] は〕7月に逝去した<sup>464)</sup>。かれ〔の遺体は〕かれの父の聖キュリロス修道院に安置された。**【687】** スヴァトスラフ公 [C411:G] は賢明で、神の戒律を守って過ごし、肉体の清廉を守り、修道士と司祭たちを愛し、乞食に施しをなす人だった。

リューリク [J2] は、キエフへと出発した。〔キエフでは〕府主教、すべての典院たち、貴賤をとわず全てのキエフ人が、大いなる喜びをもって、城を出てかれを出迎えた<sup>465)</sup>。リューリク [J2] は聖ソフィア教会に入り、聖なる救世主と聖母に拝礼し、自分の祖父と自分の父の公座に、大いなる栄光と名誉をもって座した。ルーシの地の全土は、リューリク [J2] の〔キエフ公〕就位を喜んだ。キエフ人、キリスト教徒たち、異教徒たちも〔喜んだ〕。なぜなら、〔リューリクは〕キリスト教徒たちも異教徒もみな親愛をもって受け入れ、誰も排斥することはしなかったからである。

## 6703 [1195] 年

リューリク [J2] は自分の兄弟のダヴィド [J3] を呼び出すための使者をスモレンスクに派遣して、かれにこう言った。「兄弟よ、見よ、われら二人はルーシの地において、誰よりも年長

462) スヴァトスラフ [C411:G] の父フセヴォロド [C41] の命日が1146年8月1日であることについては、〔イパーチイ年代記(2) : 339頁, 注319〕を参照。

463) このときリューリク [J2] は、ヴルーチイにいたと考えられる。

464) スヴァトスラフ [C411:G] が没した日付は記されていないが、テキストを素直に理解すれば、妃と会話をした7月25日のうちに没したと考えられ、それが定説になっている ([Войтович 2006: С. 400])。ただし、マフノヴェツは7月27日と特定している [Літопис руський, 1989: С. 354]。

465) リューリク [J2] のキエフの公座就位について、『ラヴレンチイ年代記』6703(1195)年の並行記事は「大いなる公フセヴォロド [D177:K] は自分の家臣たちをキエフに派遣した。そして、キエフ〔の公座に〕リューリク・ロスチスラヴィチ [J2] を据えた (посади)」 ([ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 412]) のように、リューリクのキエフ公座の就位は、フセヴォロドの主導によるものであるような書き方がなされている。

になった<sup>466)</sup>。キエフのわがもとに来たれ。ルーシの地で協議を行おう。われらの兄弟について、ウラジーミル [D1] の一族<sup>467)</sup> について。そして、われら二人はすべてを合意しよう。われら自身が健やかに会合しようではないか」。

ダヴィド [J3] は、スモレンスク人を引き連れて、船でスモレンスクを出発した。そして、ルサリアの週の水曜日<sup>468)</sup> にヴィシエゴロドに到着した。リユーリク [J2] はかれ〔ダヴィド〕を昼食に招待した。ダヴィド [J3] は、リユーリク [J2] のところに昼食にやって来た。**[682]**〔二人は〕大いなる親愛を交わし、大いに楽しんだ。そして、〔ダヴィド [J3] に〕多くの贈物を与え、かれ〔リユーリク [J2]〕はかれ〔ダヴィド [J3]〕と別れた。

そこからさらに、かれ〔ダヴィド [J3]〕の甥のリユーリク・ロスチスラヴィチ [J21] が、かれ〔ダヴィド [J3]〕をベルゴロドの自分のところに<sup>469)</sup>、昼食に招待した。ダヴィド [J3] はベルゴロドにやって来た。そこで大いに楽しみ、大いに親愛を交わした。ロスチスラフ [J21] は、多くの贈物を与えて、かれ〔ダヴィド〕を帰した。

他方、ダヴィド [J3] は、自分の兄弟で大公のリユーリク [J2] とその息子たちを、自分のもとに昼食に招待した。そこでも、大いに楽しみ、大いなる親愛を交わした。ダヴィド [J3] は自分の兄弟のリユーリク [J2] に多くの贈物を与え、帰した。その後、ダヴィド [J3] は、修道院の者たちを全員食事に招待した。そしてかれらとともに楽しみ、多くの施しをかれらと乞食たちに与えて帰した。

その後、ダヴィド [J3] は黒頭巾族を全員招待した。かれ〔ダヴィド〕のもとでは黒頭巾族はみな大いに飲んだ。かれ〔ダヴィド〕はかれらの多くの贈物を与えて帰した。

キエフ人もまたダヴィド [J3] を宴席に招待し始め、かれに大いなる名誉と沢山の贈物を与えた。

---

466) 「われら二人はルーシの地において、誰よりも年長になった」(въ осталася старѣиши всѣхъ в руськой землѣ)の言葉は、フセヴォロド [D177:K] による以下の抗議の言葉(下注 473 参照)に対応しており、年代記記者がリユーリク [J2] とダヴィド [J3] の言葉として、紛争の論点を明示し、フセヴォロド [D177:K] の権利をあらかじめ排除したものだろう。

467) 「ウラジーミルの一族」(Володимере племя)の用語もまた、フセヴォロド [D177:K] の抗議の言葉の中にもあらわれるが(下注 473)、ウラジーミル・モノマフ [D1] の子孫たちを意味しており、ここでは、スーズダリ公フセヴォロド・ユリエヴィチ [D177:K] のことを第一に念頭に入れている。なお、この用語によって、「オレーグ一族」のルーシの地における権利をあらかじめ排除していることも重要である。

本年代記におけるこの用語については、[イパーチ年代記(3):353頁,注98]も参照。

468) 「ルサリアの週」(русальная неделя)は、移動祭日である五旬節(пятдесятница)の翌日から始まる一週間を指す。1195年では、ルサリアの週の水曜日は5月24日に相当する。

469) リユーリク・ロスチスラヴィチ [J21] は、これまではトルチェスクの支配公だったが、父リユーリク [J2] のキエフ公就位にともない、それまでリユーリクの拠点城市だったベルゴロドに、支配公として移ったことが分かる。



ダヴィド [J3] は、キエフ人を自分のところの昼食に呼んだ。そこでかれらとともに大いに楽しみ、大いに親愛を結んで帰した。

それから、〔ダヴィド [J3] は〕兄弟のリューリク [J2] とともに、ルーシの地、自分たちの兄弟、ウラジーミル [D1] 一族などについてすべての約定を結び終えた。そして、ダヴィド [J3] は自分のスモレンスクへと向かった。

その年、ムスチスラフ [I1] の息子フセヴォロド [I12] が逝去した<sup>470)</sup>。【683】かれは〔臨終のときに〕修道士として得度していた。かれの遺体は布でくるまれ、ヴラジミル〔・ヴォルィンスキイ〕の主教、すべての典院と司祭たちが、棺のところまで見送って行った。そして、聖母教会<sup>471)</sup>に安置された。4月のことだった。

その年、スーズダリの公フセヴォロド [D177:K] は、自分の使者たちを、自分の姻戚であるリューリク [J2] のもとに派遣して、かれにこう言った。「かつてそなたたち<sup>472)</sup>は、わしのことを、われらウラジーミル [D1] 一族の中の年長者と呼んだ<sup>473)</sup>。ところが、今そなたは、キエフ〔の公座に〕座しているが、ルーシの地における然るべき部分をわしに与えず、他の自分の年少の兄弟たちに分け与えている。そのため、わしにはその〔ルーシの地の〕分け前がない。そなたの〔分け前として〕キエフとルーシの地を取ったとして、それでは、ルーシの地を守り、警戒するための分け前をそなたは誰に与えたのか。どうやってそれ〔ルーシの地〕を保持しようと

470) フセヴォロド [I12] は 1189 年に兄弟のロマン [I11] にヴラジミル＝ヴォルィンスキイを譲り渡して、死去したときにはベルズ(Белз)の公だった(上注 341)。

471) 「聖母教会」(святыи Богородиць)は、ヴラジミル＝ヴォルィンスキイの聖母就寝首座教会(Успенский собор)のこと。6680(1172)年のヴラジミル公ムスチスラフ [I1] 逝去についての記事に、かれが「聖母教会」に安置(納棺)されたとあり、1160年の数年前にムスチスラフ自身が石造りの聖堂を建てた教会のことを指している。[イパーチイ年代記(7):175頁,注32][Раппопорт 1982: C. 105-106]を参照。

ベルズ公フセヴォロド [I12] の遺体がヴラジミル＝ヴォルィンスキイに運ばれたのは、この城市がムスチスラフ [I1] 一族の拠点的な城市であり、「聖母教会」が一族の菩提寺だったからである。

472) 「そなたたちは(…)呼んだ」(вы есте нарекли...)となっているのは、それまでルーシの地を実質的に共同支配していた、亡きスヴァトスラフ [C411:G] とリューリク [J2] の二人を指しているからである。

473) フセヴォロド [D177:K] とリューリク [J2] との関係を見る限り、年代記では二人は互いに「姻戚」と呼び合っており、リューリクがフセヴォロドを、モノマフ一族における「年長者」(старѣиший)、すなわち年長の兄弟と見なしたという記録はない。また実年齢を比べれば、リューリクは 1145 年前後と推定されるのに対して、フセヴォロドの生年は 1154 年頃であり、明らかにリューリクのほうが年長者である。ここでは、『ラヴレンチイ年代記』1195 年の記事の「フセヴォロドがリューリクをキエフ公に据えた」(上注 464)の表現に見るような、フセヴォロド側のルーシの地の権益要求の強引な態度を読み取るべきだろう。

いうのか。それを見届けてやろうではないか。もう、わたしにはかかわりのないことなのだから」。

リューリク [J2] は、フセヴォロド [D177:K] の使者たちから、自分が最良の領地を娘婿のロマン・ムスチスラヴィチ [I11] に与えたことなど<sup>474)</sup>、領地についての抗議がなされたことを聞いた。そして、リューリク [J2] は自分の家臣たちと、フセヴォロド [D177:K] は自分に領地を要求しているが、どのようにかれに領地を与えるべきかについて評議した。

その時フセヴォロド [D177:K] は、トルチェスク (Торьцкий), トレポリ (Треполь), コルスン (Корьсунь), ボグスラヴリ<sup>475)</sup> (Богуславль), カーネフ (Канев) をかれ [リューリク [J2]] に要求していた。これら [の城市] は、[リューリク [J2] が] すでに自分の娘婿ロマン [I11] に与えたものであり<sup>476)</sup>、かれ [ロマン] への十字架接吻によって、かれ [ロマン] の支配下にある [これらの城市を], 他の誰にも引き渡さないことを [誓った] ものだった。**[684]** リューリク [J2] は十字架接吻 [の誓い] を遵守することを望み、ロマン [I11] の支配下にある領地を引き渡すことを望まず、頑強にこの領地を [ロマンのものとする] を支持して、かれ [フセヴォロド [D177:K]] には他の領地を渡そうとした。しかし、かれ [フセヴォロド [D177:K]] はこれを受け入れず、自分が要求していたロマン [I11] 支配下の領地を求めた。二人のあいだに大いなる紛争と争議が起こった。二人のあいだに戦争が起こる勢いだった。

リューリク [J2] は府主教ニキーフォル (Микифор) を呼んで、ロマン [I11] に与えた領地についての十字架接吻 [の誓い] について語り、またフセヴォロド [D177:K] と戦争が起ころうとしていることを語った。すると、府主教はリューリク [J2] にこう言った。「公よ、われらは神から使命を与えられています。それは、ルーシの地でそなたたちが流血を起こさないよう引き留めることです。どうかそのことで、ルーシの地でキリスト教徒の血が流れることがないよう

---

474) ロマン [I11] は、1188 年にガーリチから逃げ出し、リューリクの拠点地であるベルゴロドに亡命していた (上注 331 参照)。1194 年にリューリクがキエフ公になり、ベルゴロドがその息子ロスチスラフ [J21] に譲渡される (上注 469) と、ロマンは、それまでロスチスラフが公支配していたトルチェスク等のキエフ周辺の諸城市を与えられたのである。

475) 「ボグスラヴリ」(Богуславль) は本年代記では初出で、ロシ川左岸の現在のボグスラフ市 (Богуслав) に相当する。トルチェスクからだど、南東方向に 23km ほどしか離れていない。

476) リューリク [J2] が娘婿のロマン [I11] に与えた 5 つの城市のうちトレポリは、ストグナ川河口に位置し、キエフの付属城市としてロスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1151] が公支配していたが (上注 385, 409), リューリクがかれから取りあげロマンに与えたのだろう。残りの 4 つの城市はすべてロシ川沿岸にあり、ポロヴェツ人からのルーシ地防衛のための重要拠点であった。この時までには、リューリクの息子ロスチスラフ [J21] が公支配していたと考えられる (上注 474 参照)。

なお、トルチェスクについては、ロマン [I11] は、1180 年代の末に短期間この城市を公として支配している。

にして下さい。あなたは、年長の者に対する過ちを犯して、年少の者に領地を与え、かれ〔年少の者〕に十字架接吻の〔誓い〕までしました。今、わたしはあなたから十字架接吻〔の誓いの義務を〕を赦免し、その罪を自分が負います。さあ、わたしの言うとおりにしなさい。自分の娘婿から領地を取り上げて、これを年長の者に引き渡しなさい。ロマン [I11] にはその代わりに他の〔領地を〕与えなさい」。

リユーリク [J2] は、ロマン [I11] のもとに使者を遣って<sup>477)</sup>、フセヴォロド [D177:K] がかれ〔ロマン〕の領地を要求しており、かれ〔ロマン〕のことで自分に抗議していることを伝えた。ロマン [I11] は、リユーリク [J2] に使者を遣って言った。「父よ、わたしについて、あなたは娘婿としての扱いをされていないし、親愛を示していない。〔もし領地を取り上げるのなら、〕その代わりに、わたしには他の領地を与えるか **[685]**、代償としてどのようなかたちであれ金銭を与えて下さい」。

リユーリク [J2] は、兄弟たち、自分の家臣たちと評議して、フセヴォロド [D177:K] のもとに使者を派遣して、かれにこう言った。「兄弟よ、そなたが要求している領地については、わしのもとに〔ロマンから〕抗議があった」。そして、リユーリク [J2] はフセヴォロド [D177:K] に五つの城市、すなわち、トルチェスク、コルスン、ボグスラヴリ、トレポリ、カーネフを引き渡した。そして、十字架接吻によって、親愛をもってこれを確認した。

フセヴォロド [D177:K] は、トルチェスクを自分の娘婿であるロスチスラフ・リユーリコヴィチ [J21] に与え、他の城市には自分の代官を派遣した。

ロマン [I11] は、フセヴォロド [D177:K] が、自分がリユーリク [J2] から譲り受けた領地を奪い取り、支配地になったトルチェスクをさらにかれ〔ロマン〕の義理の兄弟<sup>478)</sup> (шурин) に引き渡したことを聞いた。そこで、ロマン [I11] は自分の岳父〔リユーリク [J2]〕に何度も使者を派遣して、領地について抗議を申し入れた。かれ〔リユーリク [J2]〕が自分の息子〔ロスチスラフ [J21]〕の利益のためにフセヴォロド [D177:K] と話を付けて、自分から領地を取り上げたと考えたのである。そして、そのことについて、十字架接吻〔の誓い〕をもちだして、自分の岳父を非難した。

リユーリク [J2] は、これに答えて言った。「すべてが起こる前には、わしはこの領地をそなたに与えた。しかし、フセヴォロド [D177:K] が何度もわしに使者を寄越して、そなたのこと

477) このときロマン [I11] は、自らの拠点城市であるヴラジミル＝ヴォルィンスキイに居たと考えられる。

478) ロスチスラフ [J21] を指している。ロマン [I11] はリユーリク [J2] の娘を妻としていることから、かれにとってロスチスラフは「義理の兄弟」(шурин) に当たっている。

を抗議し、わしはかれの名誉を重んじていないと言ったのだ。以前にも、わしはそなたにかれ〔フセヴォロド [D177:K]〕の言葉をすべて伝えていた。そなたはその言葉に背いた行動をとったのだ。われらはかれに対してどうすればよいのか。われらは、フセヴォロド [D177:K] なしでやっていくことはできない。われらはかれを **[686]**、ウラジーミル [D1] 一族のすべての兄弟の中で年長者として認めたのである。そなたはわしの息子ではないか。また、そなたには他の同等の領地を与えているではないか」。

しかし、ロマン [I11] は、この〔別の〕領地を受け取ろうとせず、自分の岳父に対する中傷を真に受けて、かれと和解しようとしなかった。そして、自分の家臣たちと評議して、オレーグ一族のもとへ、チェルニゴフのヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [C412] のもとへ使者を派遣して、十字架接吻〔の誓い〕によってかれらと結んで、かれらをキエフの自分の岳父に敵対させようと謀った。

リューリク [J2] は、ロマン [I11] が離反してオレーグ一族と結び、ヤロスラフ [C421] に年長者の地位を与えようと画策していることを聞き知った。リューリク [J2] は自分の兄弟たち、家臣たちと評議を始めた。そして、フセヴォロド [D177:K] のもとに、自分の家臣を派遣して、ロマン [I11] がオレーグ一族と連絡を取り合って、かれらをキエフに、すべてのウラジーミル [D1] 一族に敵対させようとしている旨をかれ〔フセヴォロド〕に伝えて、さらにこう言った。「兄弟よ、そなたはウラジーミル [D1] 一族の中でわれらよりも年上である。評議して、ルーシの地のこと、自らの名誉、われらの名誉について考えられよ」。さらに、〔リューリク [J2] は〕、自分の娘婿ロマン [I11] のもとに家臣を派遣して、かれの罪を述べ立てて、十字架接吻文書の破棄を通告した。

ロマン [I11] は、自分の岳父が自分に対して十字架接吻を破棄したことに衝撃を受けて、支援を求めてポーランドのカジミェシュの息子たち<sup>479)</sup>のもとへと出発した。カジミェシュの息子たちはかれ〔ロマン [I11]〕に言った。「われらは喜んでそなたを助けたいのだが、今、われらの叔父のミェシコ<sup>480)</sup>がわれらを侮辱し、われらの土地を狙っている。もっと早く要請してくれたなら、すべての **[687]** ポーランド人がバラバラではなく、一挙にそなたとともに戦いに参加し、そなたの侮辱に報復できたのだが」。

---

479) カジミェシュ二世〔正義公〕(ポーランド大公在位 1177 ~ 1190 年) の息子たちで、レシエク一世〔白公〕(Leszek Biały) とマゾフシエ公コンラート一世 (Konrad I Mazowiecki) を指している。1194 年にカジミェシュ二世が没すると、二人とも年少だったが、叔父ミェシコ三世 (次注) とポーランド大公の座をめぐる争っていた。

480) カジミェシュ二世の兄弟にあたるミェシコ三世〔老公〕のこと。

ロマン [I11] はかれらの助言を気に入って、これを聞き入れた。そして、自分の甥たちを引き連れて、カジミェシュの息子たちとともにミェシュコを討伐する遠征に加わった。そして、〔ロマン [I11] は〕自分の家臣たちと評議して言った。「もし、わしがこれらを堪え忍べば、神はかれら〔ミェシュコ〕との戦いでわしを助けてくれるだろう。そのときには全員を一つの場所に集合させて、かれらとともに自分の名誉を回復させ、自分の意図を実現させよう」。〔ロマン [I11]〕はそのような思いを胸に抱いて、ミェシュコと戦うために出陣した。

ミェシュコはかれ〔ロマン [I11]〕に使者を派遣した。かれと戦いたくなかったのである。そのかわり、ロマン [I11] に対して、自分とかれの甥たちとの和議を仲介するようにと命じた。ロマン [I11] は、かれらの言うことを聞き入れず、自分の家臣たちの言葉も聞かず、かれ〔ミェシュコ〕と戦った。

こうして、ポーランド人はルーシ人と撃ち合い、ポーランド人はルーシ人を粉砕し、ミェシュコはロマン [I11] に勝利した。かれ〔ミェシュコ〕は戦いにおいて多くのルーシ人を撃ち殺し、また、自分たちポーランド人も〔撃ち殺した〕。ロマン [I11] 自身はカジミェシュの息子たちの城市〔クラクフ〕へと逃げ込んだ。

かれ〔ロマン〕の従士たちは、かれ〔ロマン〕を捕らえると、そこからかれをヴラジミルへと運んで行った<sup>481)</sup>。そして、そこから〔ロマンは〕自分の岳父であるリューリク [J2] のところに自分の使者を派遣し、かれに拝礼して懇願し、自分にすべての罪があると書いた。同時に、〔ロマンは〕府主教ニキーフォルにも使者を遣り、すべての罪は自分にあるので、自分について懇願し、拝礼して、〔リューリク [J2] が〕自分を受け入れ、怒りを収めてもらえるよう取りなして欲しいと言った。

キエフ府主教のニキーフォルは **[688]**、リューリク [J2] にロマン [I11] からの頼みを取り次いだ。リューリク [J2] は府主教の言うことを聞き入れ、かれ〔ロマン〕への怒りを収めた。流血を見ることを望まなかったのである。そして、自分の家臣たちと相談して、かれらにこう言った。「もし、わしに懇願して、自分の全ての罪を悔い改めるのなら、わしはかれ〔ロマン〕を受け入れ、かれに十字架接吻〔の誓い〕をさせ、応分の財産〔領地〕を与えることにしよう。かれ〔ロマン〕はこれに満足し、わしを信義によって正しく父として見なし、わしの善行に期待するようにせよ。そのときは、わしはかれ〔ロマン〕を息子と見なすだろう。それ以前に、

---

481) ロマンの従士たちが、負傷して動けなくなったロマン [I11] を、クラクフからヴラジミル=ヴォルィンスキイまで移送したということ。ポーランドの歴史書によれば、この戦闘ではロマン [I11] は一方面的指揮をとり、クラクフの筆頭宮廷官ニコラウスが別方面の軍の指揮をとって、終日戦いが続いた。結局ミェシュコ側が勝利し、ロマンは深手を負ったという。〔Карамзин Т. II-III, 1991: С. 406〕

わしがかれを〔息子と〕見なし、善行を施したように」。

そして、〔リューリクは〕すべてのことを自分の家臣たちと評議して、かれ〔ロマン〕のもとに自分の使者を派遣して、かれに「そなたへの怒りは収める」と言った。そして、かれ〔ロマン〕に十字架接吻をさせて、すべてについて自分の意志に従うことを〔誓わせた〕。それから、かれ〔ロマン〕にポロニイ<sup>482)</sup> (Полоны)〔の城市〕とコルスン地方の税収<sup>483)</sup>の半分を与えた。

その年、イナゴがルーシの地を襲来した。

その年の秋、リューリク [J2] は、自分の姻戚のフセヴォロド [D177:K] および自分の兄弟のダヴィド [J3] と使者のやり取りをして協議した上で、ヤロスラフ [C412] とすべてのオレーグ一族の諸公のもとに自分の家臣を派遣して、次のように言った。「そなたは、自分の兄弟たちとともに、われらに十字架接吻をして〔誓え〕。すなわち、われらの父の地で、われらとわれらの子供たち、すべてのウラジーミル [D11] 一族の支配下にあるキエフとスモレンスクの領有を要求しないことを。われらが祖父ヤロスラフ [13] がわれらにドニエプル川沿岸〔地方〕を分け与えたのであり、そなたたちにとって、キエフはかかわりがないのだ<sup>484)</sup>」。

オレーグ一族の諸公は、評議して、これを無念に思い、フセヴォロド [D177:K] にこう返答した。**[689]**「もしそなたが、われらにキエフ〔の支配権〕を認めるのなら、つまり、それ〔キエフの支配権〕をそなたのあとに、そなたの姻戚のリューリク [J2] のあとに、われらに対して保証するのなら、そのことについて、われらは同意しよう。もし、そなたが、それ〔キエフの支配権〕をわれらから完全に剥奪することを命ずるのであれば、われらはハンガリー人やポーランド人とは違う、われらは一人の祖父〔ヤロスラフ [13]〕をもつ孫たちである。そなたたち

---

482) 「ポロニイ」 (Полоны) は、ホモラ川 (Хомора) 右岸の城市で、キエフから西南西方向に 220km ほど離れた城市。現在のポロンネ市 (Полонне) に相当する。

483) 「コルスン地方の税収」 (търгак Корьсунский) の「税収」 (търгак) は古テュルク語で「貢税」を意味する言葉で、コルスン地方 (ロシ川流域の諸都市。上注 476 参照) の黒頭巾族などの異族から徴集している貢税の徴税権を意味している。

484) この言葉はリューリク [J2] が発したように書かれているが、以下のようにフセヴォロド [D177:K] に対して返答がなされているところから、もっぱらフセヴォロドの意見を代弁したものだろう。ヤロスラフ賢公 [13] の遺言にあたる言葉に、ウラジーミル・モノマフ一族にキエフ公位を独占させる内容のものはもちろん無く、明らかに虚偽である。また、スヴァトスラフ・ヤロスラヴィチ [C] の末裔 (広義のオレーグ一族) から、これまでに 4 人のキエフ公 (フセヴォロド [C41], イーゴリ [C42], イジャスラフ [C35], スヴァトスラフ [C411:G]) が出ていることから見ても、この要求に歴史的な根拠はない。この強引な要求は、スーズダリ公フセヴォロド [D177:K] の政治的意図を強く反映したものと見るべきだろう。



〔フセヴォロド [D177:K] とリューリク [J2]〕が存命のうち、われらはそれ〔キエフの支配権〕を要求しないにしても、そなたたちの後に誰が〔キエフを支配する〕のかは、神の御心によるのだ。このようにして、かれらの間には大いなる紛争が発生し、多くの論争があり、和解はしなかった。

フセヴォロド [D177:K] は、ウラジーミル [D11] 一族が正しいことを示すために、その年の冬に、かれら〔オレーグ一族の諸公〕を討伐する遠征を企てた。オレーグ一族はこれを恐れて、自分たちの家臣と典院ディオニシイ<sup>485)</sup>をフセヴォロド [D177:K] のもとへと派遣した。〔使者たちは〕かれ〔フセヴォロド〕に拝礼して、すべてについてかれの意志に服従することを受け入れた。かれ〔フセヴォロド〕はかれら〔使者たち〕の言葉を信じて、馬から降りた〔遠征をやめた〕。

オレーグ一族は、リューリク [J2] のもとに別に使者を派遣して、かれにこう請願した。「兄弟よ、われらとそなたは、これまでいかなる時であれ悪い関係であったことはない。この冬には、われらは、フセヴォロド [D177:K] とともに、そなたとも、そなたの兄弟ダヴィド [J3] とともに約定を結ぶに至っていないが、そなたはわれらと近い関係にある。われらと〔十字架〕接吻して〔誓え〕。もしわれらが、フセヴォロド [D177:K] やダヴィド [J3] と和解するか、和解しないかにかかわらず、そなたはわれらと戦わないことを」。

リューリク [J2] は、自分の家臣たちと評議して、ヤロスラフ [C412] のもとに使者を派遣した。かれ〔リューリク〕は、かれ〔ヤロスラフ〕をフセヴォロド [D177:K] およびダヴィド [J3] と和解させようと望み、かれ〔ヤロスラフ〕に、約定を結ぶまでは戦争を始めない旨の十字架〔接吻の誓い〕をさせた。かれ〔リューリク〕自身も、このことについてかれ〔ヤロスラフ〕に対して【690】十字架接吻をし〔て誓った〕。

そして、かれ〔リューリク〕は自分の従士たち、兄弟たち、子供たちを解散した。また、〔リューリクは〕原野のポロヴェツ人<sup>486)</sup>に対しても、多くの贈物を与えて、かれらの幕営地へと引き返させた。そして、かれ〔リューリク〕自身は自分の仕事<sup>487)</sup>のためにヴルーチイへと向かった。

485) この「典院ディオニシイ」(игумен Деонисий)については不詳だが、重要な使節団であることから、チェルニゴフの内城にあった聖ボリス＝グレーブ修道院の典院(修道院長)をヤロスラフ [C412] が派遣したと推定することができる。

486) リューリク [J2] は、フセヴォロド [D177:K] とともにオレーグ一族討伐遠征をする準備として、同盟していた「原野のポロヴェツ人」(дикие половыцы), すなわちドニエプル右岸のポロヴェツ人部族を援軍として呼び寄せていたことがわかる。

487) 「自分の仕事」とはリューリクが冬季に定期的に行っていたリトアニアへの掠奪遠征のこと(上注434参照)。

その年の冬、テオドロスの主日に続く火曜日<sup>488)</sup>の第9時<sup>489)</sup>にキエフ地方の全土で大地が揺れた。キエフでは石造、木造をとわず教会堂が崩れた。人々はみなこれを見て、恐怖のために立っていることができず、倒れて体を伏せる者、体を震わせる者などがいた。福者なる〔洞窟修道院の〕典院〔ヴァシーリイ〕が言った。「見よ、神が現れたのである。われらの罪ゆえにその力を示されたのである。われらが、おのれの悪の道から離れるようにと」。また次のように言いあう者もいた。「これは善き事のしるしではない。ルーシの地で多くの者が斃れたり、血が流されたり、騒乱が起きたりする前触れである」。そして、この前触れは現実のものとなった。

その年の冬、ヤロスラフ [I2] の末の息子であるイジャスラフ [I21] 公が逝去した。2月のことだった。その遺体は、〔キエフの〕聖テオドロス教会の父親の棺の傍らに安置された。

その年の冬の大齋の時<sup>490)</sup>、チェルニゴフ公のヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [C412] は兄弟たちとともに、十字架接吻〔の誓いを〕を破った。その〔約束と〕は、フセヴォロド [D177:K] とダヴィド [J3] が使者を派遣し合い、会合して約定を結ぶまでは戦争を起こさないという約束であり、かれ〔ヤロスラフ〕がリュウリク [J2] と合意して、かれ〔リュウリク〕に対して十字架接吻〔の誓いを〕したものだ。【691】

ところが、ヤロスラフ [C412] は約定〔の締結〕を待つことなく、自分の二人の甥たち<sup>491)</sup>を、娘婿ダヴィド<sup>492)</sup> [J3] を討つべくヴィテプスクへ派遣した。

そのとき、リュウリク [J2] はキエフにいなかった。自分の仕事のためにヴルーチイへと向かっており、〔ヤロスラフの〕十字架接吻〔の誓い〕を信じて、自分の兄弟たち、自分の従士団は解散していた。

オレーグ一族〔の諸公〕はヴィテプスクに到着する前に、道中でスモレンスクの領地を掠奪

---

488) 「テオドロスの主日」(Федорова недѣля)は大齋(великий пост)第一週の最終日の日曜日(主日)で1196年3月10日に相当し、それに続く火曜日(大齋第二週の)は3月12日である。

489) 修道院における「九時課」の祈禱の時刻のことを指し、およそ現在の15時から18時までの時間帯に相当する。以下に「昼食時」(下注494)とあることから、15時前後だったのだろう。

490) この年(1196年)の大齋(великое говение)は3月4日から4月13日まで続いた。遠征は大齋に入るとともに開始されたのだろう。

491) 原文では、с **ыновця своя** と双数形になっており、以下の叙述から、遠征に派遣されたのは、ヤロスラフ [C412] の甥のオレーグ [G5] とその息子のダヴィド [G51] であることが分かる。

492) この記事から、ダヴィド [J3] はチェルニゴフ公ヤロスラフ [C412] の娘と結婚していたことが分かる。なお、ダヴィド [J3] は、1175年頃からヴィテプスクの城市を公支配していたと考えられる(『イパーチイ年代記』(7): 241頁、注442)参照)。

した。

ダヴィド [J3] は、オレーグ一族がやって来ることを聞いて、自分の甥のムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12] とロスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [J221] に自分の部隊を率いさせて派遣した。さらに、リヤザン公の息子で自分の娘婿であるグレーブ<sup>493)</sup> [H41] をスモレンスク人とともに派遣して、かれら〔オレーグ一族の諸公〕を迎え撃たせた。

大斎の第二週目の火曜日の昼食時に大地が揺れた<sup>494)</sup>。その日に、両軍は遭遇した。オレーグ一族〔の諸公は〕警戒して、自分たちの部隊に戦闘準備をさせて、敵に向かって布陣した。かれらは雪を踏み固めていた。大雪が降ったのである。

ムスチスラフ [J12] とかれの従士たちはかれら〔オレーグ一族の軍〕を発見した。近くに森があり〔そこに敵兵がいたから〕である。そこで、〔ムスチスラフは〕自分の部隊に戦闘準備をさせる暇もなく、急いで敵に向かって突進して行った。こうして、オレーグ [G5] の部隊と激突し、オレーグ [G5] の軍旗を踏みにじり、その息子ダヴィド<sup>495)</sup> [G51] を斬り殺した。

ダヴィド [J3] の千人長ミハルコ<sup>496)</sup> とスモレンスク人の部隊はすでに戦闘準備をととのえて、ポロツク人部隊に戦いを仕掛けようとしていた。なぜなら、ポロツクの諸公はオレーグ一族を支援していたからである。**[692]** ところが、スモレンスク人は、かれら〔ポロツク人部隊〕のところまに到達せずに、逃げ出し始めた。

ポロツク人は、ムスチスラフ [J12] がオレーグ [G5] 〔軍を〕圧倒しているのを見て、スモレンスク人の後を追わずに、方向転換して、ムスチスラフ [J12] の部隊を背後から攻撃して、これをさんざんに踏み散らした。なぜなら、ムスチスラフ [J12] は、そこにはいなかったからである。かれ〔ムスチスラフ〕は前衛部隊を率いてオレーグ [G5] の部隊のあとを追いかけていたのである。それからすでにオレーグ [G5] を撃ち破ったと考えて、〔ムスチスラフは〕自軍に戻って来たが、自分の〔部隊が〕撃ち破られていることを知らなかった。〔ムスチスラフは〕自分の〔部隊を立て直して〕戦闘に参加した。ポロツク人はかれ〔ムスチスラフ〕がいることに気がついて、かれを捕まえた。

ロスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [J221]、ダヴィド [J3] の従士たち、ダヴィド [J3] の娘婿であるリヤザン公の息子〔グレーブ [H41]〕は、オレーグ一族〔の諸公〕を追いかけたが、自

493) グレーブ [H41] は、当時のリヤザン公ウラジーミル・グレーボヴィチ [H4] の息子。この記事によって、かれがダヴィド [J3] の娘と結婚していたことがわかる。

494) 上注 488, 489 の地震と、同じ地震をさしている。

495) ダヴィド [G51] は 1190 年にノヴゴロド＝セヴェルスキイ公イーゴリ [C432] の娘と若くして結婚しており（上注 364）、戦死したときはおよそ 20 歳ほどだった。

496) 「千人長」(тысячский) は都市民からなる兵団の最高司令官であることから、ミハルコ (Михалко) は、スモレンスクからスモレンスク人部隊を率いて参戦したのだろう。

分の陣営に戻ってきた。そして、[かれらは] 自軍の軍旗がポロツク人の手で踏みにじられたのを見た。かれらは混乱して、スモレンスクへ、ダヴィド [J3] のもとへと逃げ出した。他の者たちもかれらとともに [逃げ出した]。

オレーグ・スヴァトスラヴィチ [G5] は、ポロツク人がムスチスラフ [J12] の軍旗を踏みにじているのを見て、かれらのもとに戻って来た。到着して、ムスチスラフ [J12] が捕虜となったのを見て喜んだ。そして、かれ [オレーグ] はドルツク公 (Дрюютьский князь) のボリス<sup>497)</sup> [L1111] にムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12] の身柄を引き立たすよう求めた。

それから、かれ [オレーグ] はチェルニゴフの自分の [父方の] 伯叔父ヤロスラフ [C412] と兄弟たちに使者を遣って報をもたらし、かれらにこう伝えた。「わたしはムスチスラフ [J12] を捕虜としました。そして、わたしはかれの部隊を撃ち破りました。すなわち、ダヴィド [J3] の部隊とスモレンスク人たちです。捕虜としたスモレンスク人がわたしに語ったところによれば、かれら [スモレンスク人] の兄弟 [同胞] たちはダヴィド [J3] と良い関係にない<sup>498)</sup> のことです。ですから、父よ、今 **[693]** 以上の機会にはもう訪れないでしょう。どうか、自分の兄弟たちと合流して、時を逸することなく出陣されよ。今こそわれらは、自らの名誉を回復しようではありませんか」。

ヤロスラフ [C412] と全てのオレーグ一族 [の諸公] は、これを聞いて喜んだ。そして、スモレンスクを襲撃すべく出発した。

リューリク [J2] は、これを聞いて、使者に十字架接吻文書をもたせて、ヴルーチイから派遣して、かれ [ヤロスラフ [C412]] を非難して、こう言った。「そなたは、わしの兄弟 [ダヴィド [J3]] を討ち殺すために出発し、これを喜んでいるという。これは、そなたが約定と十字架接吻 [の誓い] にすでに違反しているということだ」。

ヤロスラフ [C412] はこれを聞くと、スモレンスクへの [遠征] を取りやめて、再びチェルニゴフへと戻って来た。そして、リューリク [J2] のもとへ使者を派遣して、十字架接吻 [の誓いの違反] について弁明を行った。

他方、[ヤロスラフ [C412] は] ダヴィド [J3] に対して、ヴィテプスク [での戦い] について、

---

497) この「ボリス」は、オレーグ一族側に味方した「ポロツクの諸公」の一人で、ムスチスラフ [J12] を捕虜とした人物だが、文脈なしの名だけが記されているため、確かな同定は難しい。ヴォイトヴィチは、ログヴォロド [L11] の孫にあたり、ドルツクの支配一族出身の「ボリス・フセスラヴィチ」[L1111] のことを指すとしており [Войтович 2006: С. 291]、ここでもこれを採用した。

498) 『ノヴゴロド第一年代記』 6694(1186)年の記事によれば、ダヴィド [J3] は暴動を起こしたスモレンスク人を弾圧し、貴族たちを捕らえている ([НПЛ: С. 38, 229][ノヴゴロド第一年代記 XIII: 33 頁])。10年を経たこのときにも、ダヴィド [J3] とスモレンスク人の間に敵対的な関係が続いていたことがわかる。

かれ〔ダヴィド [J3]〕が自らの娘婿〔グレーブ [H41]〕を援軍として動員した<sup>499)</sup>ことを非難した。

〔これに対して〕リューリク [J2] はかれ〔ヤロスラフ [C412]〕にこう言った。「わしは、ヴィテプスクをそなたに譲ったではないか。自分の使者を兄弟のダヴィド [J3] に派遣して、自分がヴィテプスクをそなたに譲り渡したことを伝えたのだ<sup>500)</sup>。ところが、そなたはそれを待たずに、自分の甥〔たち〕をヴィテプスクに派遣した。そして、そなたの甥たちは進軍してスモレンスクの領地を掠奪したのだ。ダヴィド [J3] は戦争になったことを聞いたからこそ、甥のムスチスラフ [J12] **【694】** を派遣したのだ」。

このようにして両者のあいだでは多くの争議と大いなる諍いが起こり、合意することはなかった。

その年の冬、リューリク [J2] の義理の兄弟にあたる<sup>501)</sup>、ユーリイ [B321] の息子であるトゥーロフ公、篤信のグレーブ<sup>502)</sup> [B3215] が逝去した。3月のことだった。かれ〔の遺体〕はキエフへと運ばれた。キエフ府主教〔ニキーフォル〕とすべての典院たち、大いなるキエフ公リューリク [J2] は、かれ〔の遺体〕を出迎えた。然るべき聖歌を唱いながら、かれ〔の遺体〕は送られていった。リューリク [J2] は自分の義理の兄弟を憐れんだ。かれ〔グレーブ [B3215]〕に親愛を抱いていたからだった。〔リューリクは〕遺体を布で巻くと、黄金の円蓋の聖ミハイル教会に安置した<sup>503)</sup>。

499) 上注 493 を参照。

500) 1195/1196 年の冬の、ヤロスラフ [C412] に対するリューリク [J2] の「調停」において、ダヴィド [J3] が有していたヴィテプスクの支配権をヤロスラフ [C412] に引き渡すことが、合意されていたことがわかる。

501) リューリク [J2] は、トゥーロフ公ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] の娘を妻としていることから（上注 353）、かれにとってグレーブ [B3215] は「義理の兄弟（妻の兄弟）」（шюрин）に相当する。

502) グレーブ・ユーリエヴィチ [B3215] は、トゥーロフ公だった兄弟のスヴァトボルク [B3213] が 1190 年に死去したことにともない、「ドゥロヴィツァ」（Дубровица）からトゥーロフに移り（上注 89）、公支配を行っていた。

503) キエフの「黄金の円蓋の聖ミハイル教会」（церковь святого Михаила Златовѣрнаго）は、スヴァトボルク・イジャスラヴィチ [B3] が 1108 年に定礎して、1113 年にかれ自身が埋葬されている（〔イパーチイ年代記（1）：253 頁、注 55〕）。それ以降、この教会は、スヴァトボルク一族にとっての菩提寺の役割を果たしていた（上注 354 を参照）。

## 参考文献

- Адрианова-Перетц 1968 — Адрианова-Перетц В. П. «Слово о полку Игореве» и памятники русской литературы XI—XIII веков / АН СССР. Ин-т рус. лит. (Пушкин. дом); Ред. кол.: М. П. Алексеев, Д. С. Лихачев, О. В. Творогов (отв. ред.). Л., 1968.
- Бережков 1963 — Бережков Н.Г. Хронология русского летописания. М., 1963.
- БЛДР Т. 4 — Библиотека литературы Древней Руси. Т. 4: XII век. СПб., 1997.
- Борисенков, Пасецкий 1988 — Борисенков Е. П., Пасецкий В. М. Тысячелетняя летопись необычайных явлений природы. М., 1988.
- Вилинбахов 1960 — Вилинбахов В.Б. К истории огневого оружия в древней Руси // Советская археология №1, 1960. С. 284-288.
- Войтович 2006 — Войтович Леонтій, Княжа доба: Портрети еліти. Біла Церква, 2006.
- Гетманец 1989 — Тайна реки Каялы: "Слово о полку Игореве". - 2-е изд., перераб. и доп. Харьков, 1989.
- Головко 2001 — Головко Олександр. Князь Роман Мстиславич та його доба: Нариси історії політичного життя Південної Русі XII – початку XIII століття. К., 2001.
- Голубовский 1888 — Голубовский П. В. Болгары и хазары, восточные соседи Руси при Владимире Святом: Историко-этнографический очерк. Киев, 1888.
- Древняя Русь-Хрестоматия Т. 4 — Древняя Русь в свете зарубежных источников: Хрестоматия. Т. 4: Западноевропейские источники. М., 2010.
- Древняя Русь 2015 — Древняя Русь в средневоековом мире. М., 2015
- Каргер 1958 — Каргер М. К. Древний Киев : очерки по истории материальной культуры древнерусского города. Т. 1. М.:Л. 1958 .
- Каргер 1961 — Каргер М. К. Древний Киев: очерки по истории материальной культуры древнерусского города. Т. 2: Памятники Киевского зодчества X - XIII вв. М.; Л., 1961.
- Книга Большому Чертежу— Книга Большому Чертежу. под ред. К. Н. Сербиной. М., 1950.
- Кудряшов 1948 — Кудряшов К. В. Половецкая степь. М., 1948.
- Куза 1996 — Куза А.В. Древнерусские городища X-XIII вв: Свод археологических памятников. М., 1996.
- Литвина, Успенский 2013 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Русские имена половецких князей; Междинастические контакты сквозь призму антропонимики М., 2013.
- Літопис руський, 1989 — Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. Є. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К.: Дніпро, 1989. (<http://litopys.org.ua/litop/lit.htm>)
- Нерознак 1983 — Нерознак В. П. Название древнерусских городов. М., 1983.
- НПЛ — Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М.;Л., 1950.
- Пастернак 1998 — Пастернак Я. Старий Галич: археологічно-історичні досліді у 1850-1943 рр. Івано-Франківськ, 1998.
- Плетнева 1990 — Плетнева С. А. Половцы. М., 1990.
- Поппэ 1996 — Митрополиты и князья Киевской Руси / А. Поппэ // Подкальски Г. Христианство и богословская литература в Киевской Руси (988 - 1237 гг.). СПб., 1996. С.443-497.
- Православная энциклопедия Т. 1 - 45 — Православная энциклопедия: Т. 1-45, М., 2000-2015. (Электронная версия <http://www.pravenc.ru/>)
- ПСРЛ Т. 1, 1997 — Лаврентьевская летопись. (Полное собрание русских летописей. Том первый). М., 1997.



- ПСРЛ Т.7, 2001 — Летопись по Воскресенскому списку. (Полное собрание русских летописей. Том VII) М., 2001.
- ПСРЛ Т.9, 2000 — Летописный сборник, именуемый Патриаршей или Никоновской летописью (Полное собрание русских летописей. Т. 9). М., 2000.
- Расовский 2012 — Расовский Д. А. Половцы. черные клобуки: печениги, торки и берендеи на Руси и в Венгрии (работы разных лет). М., 2012.
- Раппопорт 1982 — Раппопорт П. А. Русская архитектура X-XIII вв. М., 1982.
- Робинсон 1988 — Робинсон А. Н. Побег князя Игоря из половецкого плена (причины и последствия) // Литература и искусство в системе культуры. М., 1988.
- СККДР Вып.1 — Словарь книжников и книжности Древней Руси Вып.1 (XI - первая половина XIV в.). Л., 1987.
- Рыбаков 1971 — Рыбаков Б.А. «Слово о полку Игореве» и его современники. М., 1971.
- Рыбаков 1972 — Рыбаков Б.А. Русские летописцы и автор «Слова о полку Игореве». М., 1972.
- Славянские древности Т. 4 — Славянские древности Т. 4: П - С. М., 2001.
- Слово сб. 1947 — Слово о полку Игореве: сборник статей / Под ред. И.Г. Клабуновского и В.Д. Кузьминой. М, 1947.
- СПИ 1950 — Слово о полку Игореве: Сб. исслед. и ст. / Под ред. В. П. Адриановой-Перетц. М.; Л., 1950.
- Срезневский I-III — Срезневский И. И. Материалы для словаря древне-русского языка по письменным памятникам. Т. I-III. дополнения. СПб., 1893-1903. Репринт: Graz, 1971.
- Халиков 1989 — Халиков А. Х. Татарский народ и его предки. Казань, 1989.
- Чернов, Дыбо 2006 — Слово о полку Игореве; Стихотворный перевод, комментированный прозаический перевод и послесловие А. Ю. Чернова; Примечания А. В. Дыбо. СПб., 2006
- Энциклопедия СПИ-3 — Энциклопедия «Слова о полку Игореве»: Т. 3 (К - О). СПб., 1995.
- Энциклопедия СПИ-4 — Энциклопедия «Слова о полку Игореве»: Т. 4 (П - Слово). СПб., 1995.
- Энциклопедия СПИ-5 — Энциклопедия «Слова о полку Игореве»: Т. 5 (Слово Даниила Заточника—Я, Дополнения. Карты. Указатели). СПб., 1995.
- Dimnik 2003 — Dimnik, Martin. The Dynasty of Chernigov - 1146-1246. Cambridge University Press, 2003.
- Fine 1994 — John V. A. Fine, John Van Antwerp Fine. The Late Medieval Balkans: A Critical Survey from the Late Twelfth Century to the Ottoman Conquest. University of Michigan Press, 1994
- Goranin 1994 — Goranin E. Latopis kijowski 1159-1198. przełożył i komentarzami opatrzył Edward Goranin (Slavica Wratislaviensia 40). 1994, Uniwersytetu Wrocławskiego in Wrocław.
- Pritsak 1981 — O. Pritsak, 'Non-'Wild' Polovtsians', Studies in Medieval Eurasian History, London, 1981.
- Pritsak 1982 — O. Pritsak The Polovcians and Rus' Archivum Eurasiae medii aeivi. vol 2, 1982. p. 321-380.
- Vásáry 2005 — Vásáry, István. Cumans and Tatars: Oriental Military in the Pre-Ottoman Balkans, 1185—1365. Cambridge University Press, 2005.
- 伊賀上 2013 — 伊賀上菜穂『ロシアの結婚儀礼－家族・共同体・国家』, 彩流社, 2013年。
- イパーチイ年代記(1) — 中沢敦夫「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(1) — 『原初年代記』への追加記事(1110～1117年)」『富山大学人文学部紀要』(61号, 2014年8月) 233～268頁
- イパーチイ年代記(2) — 中沢敦夫, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(2) —

- 『キエフ年代記集成』 (1118 ~ 1146 年) 『富山大学人文学部紀要』 (62 号, 2015 年 2 月) 287 ~ 353 頁  
イパーチイ年代記 (3) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (3) — 『キエフ年代記集成』 (1146 ~ 1149 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (63 号, 2015 年 8 月) 329 頁 ~ 389 頁  
イパーチイ年代記 (4) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (4) — 『キエフ年代記集成』 (1149 ~ 1151 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (64 号, 2016 年 2 月) 321 頁 ~ 372 頁。  
イパーチイ年代記 (5) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (5) 『キエフ年代記集成』 (1151 ~ 1158 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (65 号, 2016 年 8 月) 221 ~ 308 頁。  
イパーチイ年代記 (6) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (6) 『キエフ年代記集成』 (1159 ~ 1172 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (66 号, 2017 年 2 月) 191 ~ 298 頁。  
イパーチイ年代記 (7) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (7) 『キエフ年代記集成』 (1172 ~ 1180 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (67 号, 2017 年 8 月) 169 ~ 268 頁。  
梅田 1959 — 梅田良忠 『ヴォルガ・ブルガール史の研究』 (関西学院大学論文叢書 2) 弘文堂, 1959 年。  
木村 1957-1979 — 木村彰一 「イーゴリ遠征譚 (① No. 1-56)」 『スラブ研究』 (1 号 1957 年) 1-7 頁, 「イーゴリ遠征譚 (② No. 57-78)」 『スラブ研究』 (2 号 1958 年) 105-110 頁, 「イーゴリ遠征譚 (③ No. 79-110)」 『スラブ研究』 (3 号 1959 年) 85-92 頁, 「イーゴリ遠征譚 (④ No. 111-139)」 『スラブ研究』 (15 号 1971 年) 93-101 頁, 「イーゴリ遠征譚 (⑤ No. 140-148)」 『スラブ研究』 (21 号 1976 年) 51-54 頁, 「イーゴリ遠征譚 (⑥ No. 149-166)」 『スラブ研究』 (23 号 1979 年) 87-94 頁, 「イーゴリ遠征譚 (⑦ No. 167-218)」 『スラブ研究』 (24 号 1979 年) 11-20 頁。(なお参照は, 本論文中的カッコ内に示した作品行番号 (No.) で行う)  
木村 1983 — 木村彰一訳 『イーゴリ遠征物語』 岩波文庫, 1983 年。  
スズダリ年代記訳・注 [III] — 「スズダリ年代記訳注 [III]」 『古代ロシア研究』 22 号, 2010 年。13 ~ 37 頁。  
スズダリ年代記訳・注 [V] — 「スズダリ年代記 (『ラヴレンチー本』) 訳・注 [V]」 『古代ロシア研究』 24 号, 2017 年。11 ~ 25 頁。  
日食・月食・星食情報データベース — 「地球上どこでも 日食・月食・星食情報データベース」 (<http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~x10553/>)  
ロシア原初年代記 — 國本哲男, 山口巖, 中条直樹訳 『ロシア原初年代記』, 名古屋大学出版会, 1987 年  
家島 2009 — イブン・ファドラーン, 家島彦一訳注 『ヴォルガ・ブルガール旅行記』 (平凡社東洋文庫, 2009)

〔後記〕 本稿は共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の成果であり, 共同執筆者, 藤田英実香は京都大学文学研究科西洋史学専修修士課程に在籍している。